
英霊とにわか守護者と異世界旅行

ショウケイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英霊とにわか守護者と異世界旅行

【Nコード】

N9618P

【作者名】

シヨウケイ

【あらすじ】

卒業旅行の帰りに死んだ主人公が、英霊を呼び出す能力を与えられ、どうにも曖昧な役割を丸投げされて異世界トリップ。あー、現実逃避したい。夢の世界に逃げたい。ニートになりたい。このまま消滅しちゃった方が楽でいいんだけどなあ。始まつちゃったからには頑張るか……。 (出てくる設定はExtraのみからお借りします)

第一話 飛行機事故から（前書き）

作者はPSP版のExtraしかプレイしてません。その上で、オリジナル色の強いものになっています。Fateファンの方にはご不快な面もあるかもしれませんが。その恐れのある方はどうぞそっと目を逸らしてお戻り下さい。

全話通して、本文にはネタバレを多分に含みます。

第一話 飛行機事故から

自分が死んだ。

意外にそれは納得出来る事実である。耐久十五時間のフライトの末、待っていたのは連続する強い衝撃。そして、暗転。

頭を打ったか何かして、意識をいち早く失うことが出来た私は、もしかしたら運がいい方だったのかもしれない。

卒業旅行の帰りだった。初めての外国旅行を満喫できたのは、よかった、と言っていていいことだろう。

混乱の巻き起こる機体の中でただ耐えていただけの私には、自分の現在地がわからなかったが、不時着したとしても容易にレスキューを期待できるような場所ではなかっただろう。

ので、やっぱり私は死んだ、ということでもいいと思うのである。

「それって現実逃避ということでもいいんだよね？ いい加減諦めてくれないかな？」

目の前の非現実が何か言っている。

いや、見るまい。私は死んだ。そこでブラックアウトだ。

死んだら何も残らない、体は灰になるだけだ、とはよくうちのじい様が言っていた。

勿論、これほど若くして、内定した会社に一度も勤めることなく死ぬのも未練の残ることではあるのだが。

「だからさア、いいじゃん、生き返らせてあげるって言ってんだから！ 素直に生き返っておきなよ！」

嫌である。

だって今生き返ったところで、私を待っているのはぼろぼろの体、

生きて帰る見込みのない状況だ。よくて言葉の伝わらない異国の地上。英語だつてたどたどしいこの私が、生きて日本の土を踏めるであろうつか、踏めるはずがない。そんなサバイバルで過酷な状況なのに生き返るとか言いたくない。現代日本人の叩いたら潰れる脆弱精神なめんなつて感じである。

「わかった、オーケー、話し合おうじゃない。まず何が嫌なの？」

自分で神とか名乗る電波な非現実と話すのが嫌である。

「僕の存在全否定！？ あと僕神とか名乗ってないからね！？」

私は彼の姿を改めて見てみる。非常に嫌だったが。

長い金髪、白いコートのようなもの。全体的になんだか眩しい青年が一人、そこには立っている。

神でなければ何だというのか。天使か。だとしても嫌だ。

「すんごい嫌そうに目を逸らすのやめてよ……。どんだけ拒否られるの、僕」

何が嫌って、やたら威厳ありそうな外観のくせに喋り方がやたら幼稚なところとか。

「幼稚……」

どうやら衝撃を受けたらしい青年は、急に居住まいを正して、わざとらしい咳払いをした。

「初めてお目にかかります、わたくしこの度あなたの担当となりました」

方向性が違う。

「駄目出し！？ ああもうどうすりゃいいのか言っつてよ！ 君にこのまま駄々こねられても困るの！ 生き返るのは決定なの、必定事項なの！ なんかチートにしろっつて言っつならそうするからさあ！」

チートっつて……。

別にそんなものは……いや待てよ？

全ての言語を話せるようにしてくれたら、日本の土を踏むことも夢ではないかも？

「あ、ごめん、それは無理。だって、日本に生き返ることがそもそも無理だもん」

はあ、やっぱり死のう。

「いや、全言語話せるっつていう能力だけならつけられるよ！？ 日本に帰れないだけで……！」

そこがアウトだ。

途中までやりかけのゲームだってあるのに……。
どうせ死んだら全部そこまでだ。はあ。諦めよう。

「諦めないでっつてば」

ゲームは？

「それは諦めて」

がっかりである。

「だからごめんって。そろそろ、これから君に行ってもらおう世界の話をしてもいい？」

現実逃避もここまでか……。

どうやら、ここで待っていても私に消滅という現象は起きないようである。仕方がない。

「ようやく前向きになってくれた？」

「死んでから前向きも何もないと思うけど」

一言返すと、なぜか青年は驚愕の眼差しで私を見て、そして打ち震えていた。

「長かった……っ!!」

人外っぽい生命体にそこまで言わせるほど、私の現実逃避時間は長かったようだ。

死という現実を乗り越えてきたのだから、当然だが。

「で、世界というのは」

「うん、ここなんだけど」

彼の隣に巨大な鏡が出現したかと思うと、青年は白い手でその表面を撫でた。

そこに映ったのは、どうやら地球のような丸い星。

「地球？」

「ではなくてね、正式な星としての名前はまだない。つまり、そこ

「まで文明が発達してない」

「はあ。やっぱ死のう」

「待って！ 現実逃避はもう勘弁して！！」

「文明が発達していないということは、ゲームが出来ないということである。ゲームが……私の人生の唯一の娯楽と言ってよかったゲームが……。」

「君友達いた？」

「いたよそれなりに」

「失礼だ。」

「話を進めていいよね？ この星なんだけど、今現在問題を抱えているんだ」

「……」

「地球と違って、この星には魔法が発達している。神とか悪魔とか呼ばれる存在がいて」

「……」

「相槌くらい打って欲しいな……とか」

「……」

「聞いている？」

「……」

「ちょ、心の声が聞こえないとか。え、この僕に対して心的障壁！？」

「ただ単に何も考えていないだけである。」

「てことは話も聞いてないってこと！？ 頼むよお、頼みたいことがあるんだからさあ！！」

やめてよお、ただの人間にさあ。

「もう僕この人の担当やだ……」

「はいはい、ごめんって。拗ねないで続けてよ。頼みたいことって何？」

「うつつ、なんで僕が宥められてるんだ……。頼みたいことっていつのは、守護者としての役割」

「無理」

「なぜ即答！！」

「いや、だって、守護者って、なんか護るってことでしょ？」

自分の身も護れないこの私に、何か護るということが出来るわけがない。

その前に死ぬのは確実だ。戦闘とかになったらたぶん真っ先に死ぬ。平和ボケした日本人の魂を甘く見てはいけない。

「だから、能力ならどれだけでもあげるって言ってるじゃん」

「どれだけでもって言われても」

こちらら想像力の貧困な一般人である。パツとちようどいいチート能力が思いつくはずもない。

どれだけでも、という制限のなさは、むしろ障害である。

「そもそも、どんな能力があっても、使うが自分だと思うと、どれも有効打にならない気がするし」

重ねて言うが、私は一般人である。

私の考える最強の能力にしても、穴はあるかもしれないし、ましてやこれから行くのは神や悪魔の存在する魔法の世界だという。

私の常識の通用しない場所だ。

「……えーと、じゃあ、さっき言ったゲームって何？」

「F t eのExtraだけど」

ちなみにExtraしか知らない。それも途中である。

「じゃあ英霊を呼び出せる能力とか」

え、なんでこの人F a eとか知ってるの。

「……君の記憶の中からデータを呼び出しただけです。勝手に日本マニアとか、そういう勘違いをしないように」

「別に知っててもいいと思うけど」

「僕の外見のイメージが損なわれるんでしょ？」

「もう崩壊してるからいいと思うけど」

青年は泣き真似をし出した。鬱陶しいことこの上ない。

「それって、このゲームの中で確立した人格を呼び出せるってこと？」

「性格、能力ともに、君のイメージになるけどね。大まかには、そういうことだと思ってくれて構わない。あと令呪も使えるようにしてあげると、使用数無限で」

まあもらっておこう。絶対命令権だっけ？ どのくらいのことが出来るかは、使う英霊によって変わるのだろうか。

「君のやってるゲームに出てくる英霊は、敵味方関係なく全員呼びだせる。勿論君のイメージできる範囲でだけど」

「……ナーサリーライムを呼びだして引きこもっちゃだめ？」
「やめてよ……まだ現実逃避が足りないの？」

全然足りない。

「真顔で言わないように！ ……呼び出した英霊の置き場に困ると思うから、一度顕現させた英霊は還すことが出来るようにしておくよ」

「どこに？」

「どこに……どこにしようか。じゃあ、君の頭の中とかに」

「……」

「軽蔑のまなざしで見るのやめてよ。じゃあわかった、マイルームみたいな場所を建築しておくから！ 亜空間に！」

それでいい……のだろうか。

英霊同士にも相性があるような。

「じゃあ全員分の部屋とか用意してよ？」

全員呼びだすかどうかはわからないが、念のため。

「わかったよ。それでいいんだね？」

全然よくない。第一志望としては消滅だ。そうすれば働く必要もないし、生死の境をさまようこともない。

「能力的にはいいとしても、護るモノって何？」

「それは行けばわかるよ」

いやそこは教えてよ。

物体なのか、生きているのかで大分対応が変わってくると思うんだけど。

「生きてないよ。いや、ある意味生きてるとも言えるかな」

「具体的に、何？」

「……土地だよ」

土地？

土地？

「二回も言わなくてもわかるって。一応、だから、国ってことになってるけど」

思考を読んでいることには今更何も言わないが。

「国を護るってどういうこと？」

「侵略してくる奴らから守ってってことだよ」

「いやだからほんとにどういうこと？」

「神泉がある森が今侵略されようとしてるんだ」

異世界語、ワカリマセーン。

「だから行けばわかるって！ もういいよ！ 早く生き返ってよ！」

キれることないじゃないか、青年。

とりあえず英霊がほんとに呼び出せるかどうか試してから。

「open cage」

と思ったが、目の前の青年が何やら一言呟いたと思うと、キーン、

と鋭い音が脳髓を貫く感覚がした。

再びの、暗転。

もうちょい詳細を話してくれてもよかったんじゃないか、担当。

「あと君の体不老不死にしておいたから」

英霊！ 英霊！ 誰でもいいからこいつ殴り飛ばして！

第一話 飛行機事故から（後書き）

前書きの一文、足させてもらいました。

作中後半以降でしか現れない真名とか英霊とか出してるくせに……
四話目投稿して気づくとか……。ご不快な思いをされた方には申し
訳ないです。

第二話 初めての地下牢

いい青空だ。どうやら太陽がひとつであり、雲が漂い、青く見える空というのは異世界にも共通の常識であつたらしい。それは嬉しいことだ。全く喜ばしいことである。常にどんより太陽が見えないとか、太陽が幾つもあるとか、空が赤いとか黒いとか、そんなんだつたらどうしようとかドキドキしていた自分は杞憂であつたとわかつて、ほっとするやらがっかりするやら。

それはともかく。

「貴様、何者だ！ 魔術師か？」

ああ、空の青さが目に染みる。

ついでに、いくつも突き付けられている槍の穂先が白く反射して目が痛い。物理的に。

「……ここ、どこですか」

あー、泣きたい。自分の体の変化にも泣きたい。不老不死とか言つてたよねあの金髪。オマケみたいに言うなつての。けっこう重大なことだから。

「名と所属を言え、魔術師」

槍の穂先で突つつかれるようにして誰何される。てか魔術師は決定なのですか。私ただの人間ですが。あ、不老不死な時点で一般人

じゃなくなつた気もする。でも能力的には一般人だ。言い張ろう。
言葉がわかるのは、担当のサービスだろうか。

この状況だと、あんまり嬉しくない。

とりあえず、槍を構えてつんつんしてくる怖いお兄さんに向う。
いや顔自体はイケメンのだが、いかんせん、私を不審者として睨
みつけているその双眸は怖いものでしかない。緑だし。緑色の目っ
て間近で見るとなんか怖い。や、黒目に慣れているせいでしょうけ
れどもね。

「名前は穂坂鼎です」

「……イ？」

名前通じない。言語は通じてても、異世界補正は必要らしい。

テイ・ホサカで通じるんだろうか？

「所属つて、なんですか？」

「!？」

怖いお兄さんは、なぜかぎよつとした顔をした。

「無所属の魔術師!? 捕縛しろ!」

へ？

とか思っている間に、あつという間に後ろから飛びかかれ、地
面に頭をぶつけて痛い思いをする。両腕は素早い早業で後ろ手に括
りあげられた。

痛い。

「使い魔を呼ぶかもしれん。口を塞げ」

英霊を呼んだりする暇ございませんでしたよ。

まあでも、言われて気づいた。猿轡とか噛まされる前に、本当に英霊が呼べるのか試さないと。じゃないとほんとに私、無力な一般人だし。

「ナーサリーライム」

はい、お気に入りなんです。セイバーとかアーチャーとか差し置いて呼んじゃうくらいには。

使い勝手よさそうじゃない。永久機関とか、名無しの森とか。この子一人いれば基本的に何でもまかないそうな気がしちゃうんだよね。主に現実逃避という用途で。

「初めまして、マスター」

私のほぼ真上に出現した、人形のような女の子。

黒いゴシック調のドレスをまとい、私の傍にすんと軽く舞い降りた。

その天使のような愛らしい顔が、私を見て笑顔になりかけ 無機質に歪んだ。

「私のマスターに、ひどいことするのは、だれ？」

小首を傾げて、彼女は一瞬その目を怒気に揺らめかせた。

「詠唱なしにサモン・サーヴァント……！？」

私の真上に馬乗りになっていた兵士さんらしき人がうるたえた声を出す。

「私のおともだち、悪い人をやっつけて」

ナーサリーライムがほっそりした片手を挙げると、私の上に乗っかっていた兵士を、目に見えない巨人の拳が殴り飛ばした。いるんだろう、たぶん雲突く巨人とかが。私より、一瞬でジャバウォックとか呼んじゃう彼女の方が危険人物な気がしてならない。

「待ちなさい、ナーサリーライム」

私の咄嗟の制止は功を奏したのか、殴り飛ばされた兵士は軽く宙に浮くぐらいの衝撃を受けたものの、盛大にせき込んでいるところを見ると意識はあるようだった。

「殺生はなるべく禁止の方向でお願いしたいんだけど」

「マスターがそう言うなら」

小首を傾げて、彼女は可愛らしく答える。

「でも、マスターをいじめるひとは嫌い。大嫌い。殺してもよくなったら言ってね？」

あれ、ナーサリーライムってこんな子だっけ……。

彼女から感じる無邪気な好意と悪意は、確かにゲーム中でも感じたものだ。

目の前で言われると、ちょっと冷や汗が出る。確かちょっと計算高い一面もあったような。

「わかった。……これから少しこのお兄さんと話すことがあるから、待っていてもらってもいい？」

「ええ、わかったわ」

彼女は素直に頷くと、ふわりとその姿を消した。
助けてもらったのはいいけど、場を悪くしていったな……。

「えーと」

先ほどの怖いお兄さんを探すと、少し離れた場所で兵士たちに囲まれていた。

どうやら偉い人らしい。

そしてこちらは完全に敵扱いのようで、彼らはじりじりと私を包囲する輪を作りながら様子を伺っている。

「私、ただの迷子なんで、ここがどこかさえ聞ければすぐに出て行くんですが」

「馬鹿言え、危険な魔術師を放置出来るものか」

抑え込もうとされたら反発しちゃいます。青春ですから。

「先ほどのサーヴァントを使ってか？ 人型のようなだったが、一体どういう代物なのだ」

サーヴァント、と呼んだということは、使い魔を使うのはこちらの魔術師にとってスタンダードなのだろうか。

「人型でないのもいるんですか」

「殿下の質問に答えよ！」

怖いお兄さんの横で、壮年の兵士がいかつい声を挙げた。
そんな声出されると怯えてしまっただが。小市民だから。

「どんな代物って言われても。まあ……」

名無しの森とかジャバウォックとか。
考えれば考えるほど危険極まりないものである。

それを正直に目の前の人物に言っていると、殺す気で攻撃される気がして何も言えない。

とりあえずこの場から消え去るいい宝具とか持つてる英霊を召喚出来ないかしら。

視線をうつろつと彷徨わせた私を危険と見てか、殿下とやらが目を光らせた。

「行け、アルケイド」

「御意に」

いつの間にか殿下の後ろに控えていたフードの怪しい人物が、通る声で応じた。

うあ、なんか来る。

なんか来る、と思ったものの、一般人の私のスピードで反応出来るはずもなく。

「」

聞き取れない早口で彼が何か呟いたと思った瞬間、私の体が白い霧に包まれる。誰の名前を呼ぼうかと迷った一瞬に、それは口まで達した。

「!？」

全身の自由が利かない。

英霊を呼び出せる以外の機能がない一般人なので、口をふさがれ

たまたまの無力な一般人の出来上がりである。

そもそも本当にただの迷子だったのに。

あの金髪担当、もしもう一度会ったら絶対にシメてやる。出発地点ぐらい考慮しろよ。どこぞの勇者だって名もない親切な村人のいる村から始まるんだから。私も是非その感じでお願いしたかった。

『マスター』

ナーサリーライムの声が、脳裏に過る。

『いいよね？』

それって、殺しちゃっていい？ というお願いなのだろうか。

それは駄目だよ、と伝えると、ナーサリーライムはむう、と膨れた感じがして、拗ねてしまった。

まあ、もし私に命の危機があるなら、ナーサリーライムにも我慢してもらわない。不老不死がどこまでのものかわからないし、痛いのはごめんである。

「全く、なぜこうも魔術師ばかりの訪問が多いのか 近日になって」

殿下とやらが、無力となった私の傍まで来て独りごちる。

魔術師の訪問。たぶんこれ非公式の、密入国とか言われるモノだろう。

近日になって。これいいヒント。何かこの国狙われてる、それも最近。そしてなんか国とか守らなければならぬ私。

つまり、この国が私の守護すべき国ということになる。もしこの仮説が間違っていたら、私をここに出現させた金髪が悪い。

で、目の前にいるのはその殿下。皇子か王子かわかんないけど、

たぶん偉い人。

うっわ、悪い冗談。

……神様に使わされた守護者です、とか言っただけ通じそうな文化ならいいけど、そうでもなさそうなのが目下一番の問題かもしれない。

「アルケイド、尋問を」

更に嫌な単語が出た。尋問されてもわかんないよー、何も知らないもん、本気で。本当に、ここがどこかわからないただの迷子なんですけど。

「承知致しました。お目汚しになりますので、地下の一室をお貸しただければ」

「許す。デイキ、運んでやれ」
「ハッ」

背の高い、鎧の似合う男性が一人進み出てきたかと思うと、私の肩を掴んで起こし、ひょいと自分の肩に担ぎあげた。私これでもそれほど身長低くないと主張しても無駄なことだろう。完全にヨロピアン体型の彼らと、別に特別太っている訳でもない日本人体型な私では、かなりの差があつて当然だ。事実、まるで重みを感じないみたいに宙に浮いたから、体が。

うぐっ、肩当てが腹に入って痛い！あの、恥とか捨てますからお姫様抱っこじゃ駄目ですか！

とは思ったが、残念ながら彼らは口に出せない私の思いを読みとつてはくれなかった。

「黒髪の魔術師とは、珍しいと思いませんか。東方に魔術文化があるとは聞きませんから、何者でしょうね」

屋内に入り、殿下の姿が見えなくなった辺りで、フードの怪しい人物　アルケイドとかいう男性が、私を担いでいる人に声をかけた。

「無駄口は好かない」

対する返答は一言だった。クールだ。ていうかいいのか、それで。コミュニティも人間には大事だと思うんだ。対人関係は言葉によるコミュニケーションが主要手段だよ。

「つまらないですね……そちらの方は、もうしばらく話せませんし」

そういえば、危険とか言われていたのに、今私の周りにいるのは魔術師？　が一人と兵士っぽい人が一人だ。兵士というより騎士だろうか？　それにしても手薄な警戒である。

口を封じてしまえば安心なのが魔術師、というのが常識なのだろうか。私には、ナーサリーライムに攻撃してもらおう、という手段があるのだけだ。

「まあ、あれだけの大物を召喚したのですから、もう魔力も底をついたはずです。あの時点で切り札を切ってしまうとは、馬鹿なのか、本当に迷子だったのか判断がつきかねるところですが」

大柄な兵士の後ろに回り、私の顔を覗き込む魔術師。

私は顔を上げようとしたが、諦めた。歩き続ける兵士に揺さぶられ続け、ちよっと頭が限界だ。頭が下方に向いているから、血が上るのだ。

「……体力もなさそうですね。これはもしかすると、本当にただの迷子かもしれませんよ」

「……」

対する兵士は返事をする事もなく、無言で階段を下りて行くとその先にあつた独房らしき部屋の扉を開けた。

私をどさりと床に落とすと、これまた無言で部屋を出ようとする。入れ替わりに部屋に入ろうとした魔術師が、ふと何かに気づいたように足を止めた。

「……招集がかかりました。申し訳ありませんが、鍵を閉めてもらえますか？」

「招集？」

「あなたもですよ、ディキ。城内に不審者の気配です」

城内に不審者、二人目らしい。

日中に不審者がぼろぼろ出るとか、警備がザルなんじゃないだろうか。

「尋問はもう少し後ですね。楽しみに待っていて下さい」

ついに顔を見れなかった魔術師がひらりと身を翻して階段を上って行き、兵士は独房の鍵を閉めてそのあとを追っていく。

一人になりました。

一人も残していかないとか、いいのか……とつい、彼らの警備のザルさ加減を慮ってしまう私だった。

「こつちには都合はいいんだけど」

試しに話してみると、言葉は普通に出てきた。どうやら魔術らしきものは解除されていったらしい。

「ナーサリーライム」

呼ぶと、彼女は普通に何もなかったところから出てきた。派手なエフエクトがないのはいいのか悪いのか、これでは知らない間に後ろに立っていられてもわからない。小心者なのでちょっと怖い。

「この部屋って何か警戒されていたりする？」

「対魔術師用に結界が張ってあるわ。でも、回路が違って、あたしや英霊には効かない」

「私には？」

「マスターは魔術が使えないもの。ただ、召喚するには何も問題はないと思うわ」

「そうか。ありがとう」

「どういたしまして」

「ところで、ナーサリーライムは聖杯戦争がないこの場に呼び出されたことについて、何か思うところはある？」

気になることを尋ねてみた。

彼らは英霊であって、ゲーム中ではムーンセルによる呼び出しにに応じていたが、聖杯戦争という共通の目的があったのだ。

「今回がイレギュラーであることについては、なんだか担当とか言ってた金髪の人から聞いたわ」

金髪担当が説明してくれたいらしい。さすがご都合主義。

「サーヴァントは、呼びだされたらマスターのために戦うだけ。みんなそうよ」

「いいの？」

「私たちに、望むところは何もないもの」

それが本当にそうかはともかく、基本的にはそういう見解で構わないようだ。と理解して、私は状況把握のために動くことにした。

「今、外の様子はわかる？」

「戦闘が行われているわ」

「うーん。見に行けないかな」

「巻き込まれると死んじゃうかも」

不老不死らしいから、死にはしないんだろうけど、痛い思いはしたくない。

「つまり、守りを固めて行けばいいってことだね」

「対魔力の高いセイバーなんかがお勧め」

セイバー。

私の知っている聖杯戦争のセイバーは三人、ということになるが、一人は残念ながら対魔力が低い……。

一人は、完全無欠の騎士である。

最後は、救世主。

どちらにせよ、つい私が躊躇う理由は、彼らの性格などにある。

「セイバーってなんかみんな眩しい」

前二人は金髪だし、清廉潔白なイメージがある。

最後の一人は……うん、目の前にいると、なんだか平伏してしまいうそだ。護衛を頼むどころじゃない。

ナーサリーライムに頼んで夢の世界に引きこもりたいニート志望の私には、どれもこれも眩しすぎて痛い。

ネロの性格は、まだ楽そうだが……。

「……ここは我慢して、ガウエインを呼ぼう」

対魔力という点においても、護衛という点においても、彼なら完璧に仕事をこなしてくれるだろう。

「ガウエイン」

「は。ここに」

独房の光射す一角に、彼は片膝を突いて頭を下げた状態で現れた。柔らかなそうな白っぽい茶色の髪は記憶にある通りだ。

「私を呼んで頂けるとは、光栄の極みにございます」

眩しい。いや、白銀の鎧が少ない陽光を反射して目を射すというものもあるが、それ以上に彼の在り様そのものが眩しい。

私コレとどう付き合っていけばいいんだろうか。

「ナーサリーライムと協力して、姿を隠して、護衛をしてくれる？」
「この命に代えましても」

そんなに重々しい返答は望んでないのです。

やっぱり、呼びだすのはナーサリーライムだけにしておいて、彼女の作る夢の中に逃げ込んでおけばよかった。名無しの森を使ってもらえば、私の存在は消滅出来たはずだ。そのあとナーサリーライムがどうなるかは気になるが、ご都合主義の担当のこと、きつと元の世界に戻してくれるだろう。

あーやっぱりその方が丸く収まったような気がする。

そんなことをつらつら考えていると、ガウエインがじっと私の顔を見ていた。

何を望むでもなく、ただ忠実に命令を待っている顔である。

「……………」

……現実逃避がこれほど辛くなる視線はあるまい。ニート志望ですみません、そんな目で見ないで下さい、と懇願したくなる。ああ、やっぱりガウエインを呼んだのは失敗だった。

けれども、呼んでしまったからには仕方ない、重い腰を上げるしかないだろう。

溜息は尽きないけれども。

第三話 戦闘と遭遇

「とりあえずこの独房から出たい」

言っと、ガウエインは立ちあがり、腰元から剣を引き抜いた。

あれが転輪する勝利の剣だろうか。

ていうか、独房の扉を破るためだけにあの聖剣を出しちゃうのか。なんだかすごく、役不足だ。

しかもガウエインが壊したのは鍵の部分だけだった。いや、実際の方が音も小さくていいんだけど、なんだかこう、釈然としないものを感じてしまう。静かに事を運んでくれるのは、私にとってはいいことだが、ガウエインには似合わない。ガラティーンまで使って、極秘に鍵壊し。素晴らしい無駄遣いだ。

「マスター？ ……ご不満でしょうか」

「いや全然。ありがとう、これで進める」

うん、違和感については気にしないことにする。マスターが私なのだから、仕方がない。ガウエインには申し訳ないが。

「とりあえず今後の方針としては、戦闘しているところに乱入して、解決だけして、逃げたいと思います」

「逃げる……ですか？」

ガウエインは不満そうな表情こそ出さなかったが、多少驚いたようではある。彼の辞書にその言葉はインプットされてないらしい。それもそうだろう。

「うん。ナーサリーライム、空を飛べるようなお友達、呼び出せる

「？」

「グリフォンとか？ それともドラゴン？」

「乗って逃げられれば何でも」

「……」

ナーサリーライムは黙って頷いた。彼女も、このマスター、つまり私の性格を多少理解しつつあるらしい。

「悪いなと思う。ガウエインにとっては、私のサーヴァントとしての初陣でもあるだろうし」

それが誇れることかどうかは別にして。いや、別に私も卑屈でそう思う訳ではない。彼とは性格が合わないだろうと、勝手に予感して苦手に思っているようなマスターのサーヴァントとしての初陣が嬉しいかどうかである。

「だから、戦闘では好きなようにしてくれていい。思い切り戦ってくれてもいいし、卑怯な手をふんだんに使ってくれてもいい。そういうのには、口を出さない。……素人だし、ろくな口出せないってのが正しいけど」

最後の一言は、ちょっと本音が出てしまった。

「私はあなたがこの場を離れてもいいと判断するまで、傍で見ている。ただし、駄目だと思ったら即逃げることに、無理をしないことだけ守ってくれればいい」

まあ、要約すると、逃げる準備をしながら高みの見物をしている、という意味だが。

騎士の面目もあるだろう彼は、なぜか少し嬉しそうだった。……

胸が痛い。

「仰せのままに」

ただ短く答えて、頭を垂れる彼の姿は、後ろ暗い私にはとても見
てられない。ゲーム中で見ている分にはただ格好いいとか、強
くて鬱陶しいと思うだけだったが、目の前にいると本当に……目
に毒だ。

さて、私の自己嫌悪はいいとして。話は決まったようなので、あ
とは渦中に飛び込むだけだ。

「ナーサリーライム、どっち行けばいい？」
『あっち』

姿を隠したナーサリーライムの声だけが、私を導く。

私は地下の独房を出て、彼女の声を追いかけるようにして広い廊
下を歩きだした。

自分の出現地点に戻ってみたい気もするが、自分一人では間違い
なく辿りつけないことを、歩きながら確認する。

……うん、無理。広すぎる上に、複雑すぎる。城というのは、ど
れもみなこんな作りなのだろうか。窓や扉の作りも似たり寄ったり
が多くて、人を混乱させようとしているとしか思えない。

「マスター」

静かな声が私を止めると同時に、ガギツ、と固い刃が交差する音
がした。

私からは、誰かと恐らく鏢迫り合いをしているだろうガウエイ
ンの背中しか見えない。背の高い彼の後ろにいてその前は全く何も
見えないのである。ただ、足元を見るに、相手にしているのが恐ら

く兵士か誰か、武装した人間だろうということはわかった。

「 どうやって地下を出た」

その冷徹な声でわかった。第一印象を裏切らないクールガイ。私を地下まで運んだ兵士さんだ。声だけでわかるなんて、私意外とやるじゃない。

「おまけに一人増えて おまえが手引きしたのかわ？」

がちん、と互いに相手を押しやり、距離を取って腰ほどに剣を構える。その後ろにいた私は、更に数歩下がって、ちよつと角度をずらす。見てみると、やはり間違はなく私を軽々抱き上げた兵士さんだ。体格だけで言うならガウエインの方がほつそりして見えるほどである。

「誰だ？」

「我が名はマスターにのみ捧げております。我が主の邪魔をする障害ならば、砕くのみ」

剣を下段に構えたガウエインが、涼やかに答える。

ああ、これに水を差したくない。その気持ちは山々だが、私はてくてくと彼の前に出た。我ながら、実に緊張感に欠ける行動である。ガウエインの剣の持ち手に触れ、軽く下げる。それだけで、ガウエインは私の意を察して構えを解いた。私は、軽く手を挙げて戦闘の意志がないことを伝える。

「ディキさんでしたっけ」

「……どうやって、アルケイドの結界から？」

「私、魔術師じゃないんで、効かないらしいです」

「魔術師じゃない？」

胡散臭そうな彼は、やはり剣の構えを解かない。後ろをちらつと見ると、ガウエインの方は直立不動だ。だが、姿を消してはいない。相手の戦意が消えない限りは危ないと思つてのことだろう。

「ならなぜ、サーヴァントを持つている？」
「ある人からもらいました」

間違つてはいない。英霊を召喚する能力は、担当からもらったものだ。だって本当に魔術なんて使えないし。

「で、不法侵入者がいたつて話ですし、たぶん今、私のことなんかにかかずらつていられないと思うんですよ。そのところ、非常に心苦しいんですけども」

「……」
「本当に私、出て行きたいだけなので。その不法侵入者、私が退治したら、私を見逃すつてことで手を打つてくれませんかね」

「……おまえも不審者だ。さっさと地下に戻れ」
「嫌ですよ。拷問とか痛いことするでしょ」

「魔術師じゃないというなら、なぜ勝手に現れた？ それに、そんな力があるのなら、勝手に出て行けばいいだろう」

「あれは私の仕業じゃないんです。ある人の手違いです」

金髪野郎の陰謀なんです。

「ある人というのは誰だ？ そいつが魔術師か？」

「や、ただの変質者だと思います」

『マスター……それ駄目だと思つ』

ナーサリーライムに呆れた調子で突っ込まれ、私はほとんど咳払いで誤魔化した。

「いや、たぶん、魔術師かも？ よく知りませんが。どちらにせよ、私の目的はここじゃないんですよ」

しばし兵士さんは私を　というより、私より危険人物認定らしいガウエインの方を睨みつけていたが、彼が不動の姿勢を変えないことを確認すると、溜息を吐いて剣を引いた。

「……そちらの御仁と戦って、勝てる見込みは万一にもない。俺ではお前たちは止められん。好きにするがいい」

ガウエインの強さは万国共通の通行手形らしい。

「……ガウエインには姿を消さずにいるもらった方がいいかもね」

さり気なく武人として認められた節のあるガウエインの方を見ると、当然とばかりに飄々としていた。まあ、彼にとってはそうだろう。一度の罅迫り合いで相手の力量を測るとか、私のような一般人には想像もつかない世界だが。

「なんか、すみませんね」

「さっさと行け」

職務を放棄したに等しい兵士さんは溜息を吐いていた。哀愁を感じてしまう。

しかし、これで意気揚々と逃走　いや、問題の不法侵入者を討ちに行ける。私は例によってナーサリーライムに声をかける。

「どつち?」

「あつち」

軽やかな足取りで走る人形のような彼女を追いかける　どうやら、ガウエインが姿を消さずに私の護衛をする心づもりなのを見て、自分もいいかと思っただろう。彼女は姿を消さずに道案内してくれる。

……別にまあいいか。全部自分でやるつもりだった訳ではないが、そもそも何の戦闘力もない私が矢面に立とうとしたのが間違いだっただ。彼らが姿を現しているというだけで、まだ見えない敵の矛先は三分割される可能性がある。というかむしろ私の姿を消させていただきたい。無理だけど。うん、こんなことを考える辺り私はとても姑息だ。

「あの扉の向こう……なんだかとても凶悪。マスター、気をつけて」

ええ、なんか嫌だ。初陣なんだから、スライムとかにして欲しい。扉を開けてくれたのはガウエインである。咄嗟の危険に備えてだろつ。

「……うわ」

そこは王の間　のような場所だった。

よくある冒険ものによく出てくる、王座のある広間。ちょっとしたパーティも開けそうな広さであるそこには、王座の代わりに、こんこんと水を湧き出させる泉のようなものが鎮座していた。四方に向かって伸びる支流が、その水をどこかへ排出している。

神泉。あの腹立たしい金髪担当の言っていた言葉に符号するもの

が目の前に現れて、ちよつとなんだか、非常に嫌だ。
そして見回した私の視界に入った、赤。支流の一本が、赤く染ま
っている。

「マスター」

ガウエインが気遣うように私の顔を覗き込んできた。

「……なんですかねガウエイン、今更血とか……死体とかに、動揺
なんか、してない」

思ったより声は震えた。私も今更ながらに、人の子だったのだな
あと認識する。いや、一般人の小市民以外の何者でもないと常々言
っておきながら、本当に今更だと思っただが。

「死体ではありません」

泉から流れ出る支流の向こうにぐったりと倒れた青年の姿を示し
て、ガウエインが否定した。

「生きてます」

よく見れば、私が捕まった時に「殿下」と呼ばれていたお兄さん
だった。顔を青白くしてぴくりとも動かない様子は、死んでいるよ
うにしか見えないのだが。

「マスター！」

はっとしたようにガウエインが私の前に立った。またしても彼の
背中しか見えない。しかし、私を押しやるほどに彼の背中が後退し

てきたことに、よほどの衝撃が襲ったのだらうということとは理解出来た。

「ガウエイン？」

「大事ありません」

ガラティーンをすぐさま抜いて軽く振り、構えを取る彼は本当に大丈夫そうだ。しかし、彼はやっぱり大きすぎて、私には何が何だか全く見えない。

「マスターに、……許さないわ」

怒ったらしいナーサリーライムが、ジャバウォックを召喚する。姿のない拳圧のみではなく、ずしりと重い質感が広間に現れた。

「何と。兎戯のような魔術よ」

初めて、敵らしい人の声がする。

嘲笑するような、低い、嘎れた声。次聞いても絶対にわかる。それほど特徴のある声だった。

「鋼鉄の騎士、に 奇怪な巨人。このようなものを呼び出す魔術師など、聞いたこともない」

その声から、私は年を経た老人を想像していた。

だが、ガウエインの肩の向こうに垣間見えた男性は、黒々とした髪と目をした若い青年。むしろ、少年といつてもいい年頃のように見えた。それでも、こちらを見た、光のない目の淀みは、声に相應しく薄暗い。

「あいつを潰して」

ジャバウォックに命令するナーサリーライムの声と同時に、巨人がぐらりと動いた。

どうやら、ナーサリーライムは私の殺傷禁止令なんてすっかり忘れていようである。いや、私の「なるべく」なんて聞いてもらえないような危険物だと、彼女が判断した結果かもしれない。

ずしりと床にめり込む巨人の拳を飛び退り、回避した男は、ちゃり、と音を立てて鎖のようなものを取りだした。細い、財布につけるチェーンのようなもの。

それが一瞬にして伸び、ナーサリーライムに向かう。

「……」

ナーサリーライムはひらりとかわし、ジャバウォックの腕を駆けあがって肩の上に着地した。

不安に息を呑む暇さえないような素早い攻防に、私は見ているしか出来ない。

「……ガウエイン」

加勢を、と言いかけた言葉を飲み込んだ。

彼を行かせれば、私を護るものがない。

ガウエインを向かわせることも出来ない。私が危ないから。

情けないことこの上ないが、しかし、私があそこへ飛び込むのは、勇気ではなく無謀と言うのである。

護衛は最強だが、本人が最弱。一発入れれば即ゲームオーバー。なんてスリリングなゲームだろうか。

……もつとも、延々とコンティニューが繰り返されるのだろうか。

ガウエインは黙って、私の護衛に徹している。彼の判断に任せると言ったのは私だが、いいんだろうか。

「……」

見ると、ジャバウオックとナーサリーライムが沈黙していた。

「何？」

まさか彼らに何かあったのかと、ガウエインの肩越し　　というより脇の横から様子を見る。

前に出ることを、彼は止めなかった。

そして、広間の風景を見渡して　　違和感。

「……あー」

やられた。

神泉かどうかはわからないが、広間中に枝を伸ばしていた泉の水が止まっていた。どころか、水が流れていた形跡さえ、忽然と消え失せていた。どういう方法かはわからないが、この世界には魔術というものがあるのである。きっとライターに火をつけるのを見せられて驚く原始人のような感じの立場に、私は今立っているのだろう。これがマジックショーなら、私はただ拍手をするだけでいいのだが。

しかし、涸れた泉の上から、男がこちらに視線を向ける。

「さて、目的も済ませた。……ここからは本気で遊ばせてもらうことにしよう」

やめていただきたい。

目的が済んだのなら是非去って　もらう訳にはいかないのが辛いところである。

「まずは……その死に損ないから、片づけるか」

黒い目が、未だ倒れ伏したままの殿下とやらに向いた事実には驚愕する。

え、遊びつてそつち？

殺人が遊びの危ない人ですか！？　いや、戦闘が趣味と言われてもそれはそれで十分危ない人だが。

「ナーサリーライム！　その人を護って！」

わざわざ命令したのは、言わなきゃたぶん彼女は死にかけの重傷人のために動いてくれないからである。

「！　ジャバウオック！」

大人の胸が五・六人分はありそうな太い腕が、その大きさには似合わない速さで床に振り下ろされた。それは凶器を持った男と怪我人を隔てる壁になる。

ざくり、とその腕に怪我人を狙った刃が突き立った。

白く光るように見える刃は続けて剣山のような数多さで巨人の腕を滅多刺しにした。

私の目には同時に全てが刺さったように見える。だが、ひらりと身を翻した男が手に持つのは、一本の長剣だ。

ジャバウオックは痛々しい咆哮をあげ　けれどもすぐさま再生した手で男に襲いかかった。

「むっ」

その攻撃は男にとって予想外だったのか、一瞬の反応の鈍さ。バリツ、と布の裂ける音がした。巨人の指に、男が着ていた外套の端が引っ掛かったらしい。

指が引っかかっただけでポロポロに引き裂かれた黒い外套を脱ぎ去った男は、剣を構えてにたりと笑った。

にたりとしか表現しようのない笑顔を初めて見た。非常に不吉だ。早急に脳内からデリートしたい。

今にも男が全力で巨人に攻撃を加えようというその時だった。

『いつまで遊んでるの』

ふわり、と男の後ろに、透けた女性の姿が浮かび上がった。

色はわからないが、長い髪、やや垂れ目の、非常な美人である。

しかし……しかしだ。

どう目を凝らしても背後霊には見えない。世に言う半透けの精霊ってこんな感じなんだろうか。怖い。

「少し待て、レナリー。もう少しだ」

『だめよ、あなたはすぐ夢中になるもの』

「もう少しだけだ、けちけちするな」

『時間は有限なのよ、もっと有意義に使いなさい』

何だろう、この……ゲームをやめられない子供と母親みたいなやりとりは。

自分が年季の入ったゲーム好きだけに、身につまされるものがある。

「……ふむ。そちらの魔術師にも、一言挨拶をと思ったが」

陰鬱な目が向けられてそつとガウエインの後ろに隠れる。あんな視線に対抗出来る術を、日本の一般人が持っているはずがない。この異世界ではどうだかわからないけれども。

『嫌われているようね。あなたって昔から、子供と動物には好かれないものね』

「……………。まあ、よからう」

泉が消えた以上、彼らから何か情報は引き出さなければならぬ。なので、このまま去ってもらわれると困る、困るのだが。実のところ、いなくなってくれそうな雰囲気にはほっとしていた。

と、気を抜いていた瞬間だった。

「しかし」

ぞわっ、と全身の感覚が総毛立つ。別に第六感の賜物ではない。

一瞬にして目の前に現れた男に、反応できなかった恐怖が少しの間を置いて襲ってきたのだ。

この世の闇を映しているような黒い目が、私の眼前数センチ。よく見れば端正に整った顔立ちをしている。顔の造作なんかを気にしていられる私、意外と余裕だ。と思っただが、恐らく対応できない事態に思考が横滑りしているだけだろう。

「魔術師というには」

彼の言葉を全て聞く前に、私の目の前を刃が横切った。咄嗟に身をかわした彼の、首に下げられていたチェーンを貫通し、扉の横の壁に突き刺さるガラティーン。

「離れる」

底冷えするような声でガウエインが言った。
護られている方のはずの私だが、……正視できません。怖い。

「……ふ」

首元に剣を突き付けられながら、嘲弄するように笑う彼に、ガウエインは一層目を険しく眇めた。その手に力を込めたようでもないのに、ピシ、と軽い音がして、男の首に下げられた細いチェーンが弾けるように飛び散る。

その音と欠片に目を取られた瞬間、男の姿は消えていた。

『またお会いする機会もあるでしょう』

広間に佇んでいた背後霊　もとい、うつすらと透けた女性は、不吉な一言を残してふわりと消えた。

「……逃げられちゃった」

ジャバウオックの肩から飛び降りたナーサリーライムが、つまらなさそうに呟くと同時に、ジャバウオックも消える。

戦闘の気配は消え去った。

「……は」

長いため息を吐いてへたり込んだのは、許していただきたい。私は本当に、ただの、一般人なのである。

「マスター、申し訳ございません」

悔しげな表情で、ガウエインが隣に膝を突く。

「護衛の任を受けながら、不覚をとりました」

男の接近を許した件についてだろう。しかし、何の言い訳もせず、ただ自分の失態を一言で謝る姿勢が彼らしい。

「……次は、お願いするよ」

「はっ」

彼はまた、深々と頭を下げた。その態度に慣れそうな自分が怖い。

「……あ。大分放置してたけど、大丈夫かなあ、殿下とやら」

「大丈夫。ちゃんと死なないようにしたから」

ナーサリーライムが私の方に向けてく歩いて戻りながら、小首を傾げて告げる。

「え。……どういう風に？」

「名無しの森にご招待したのよ」

「それ余計な臨死体験を味わわせてたって言わない？」

「大丈夫。あたしの固有結界の中だから、あたしの魔力で保持出来るの」

慌てて横たわる青年の傍まで行く。端正な顔が歪み、眉間にこれでもかとしわが寄り、時々歯軋りをしている。彼はどう見てもうなされていた。

「……これやばくない？」

「出てくれるかしら」

不穏な言葉を呟きながら、楽しそうに彼を覗きこむナーサリー・イムを見る。

戦闘も何もかも、人任せにしたツケだろうか。私はちょっと泣きたくなった。

第三話 戦闘と遭遇（後書き）

お気に入りにしていただいている方、感想を下さった方、大感謝です。出来ればこれからもよろしくお付き合い下さい！

第四話 マスターの心得？

名無しの森。それは彼女の作成する固有結界である。

「でも陣地なら、他にもなんかなかった？　なんでわざわざ名無しの森……」

「面白そうだったから」
「……」

悪戯ですか。なんて際どい感じの悪戯。彼女を召喚した時に感じた嫌な予感が今、現実のものになっている。

……やっぱりチートな能力なんて詐欺だ。金髪担当をぶん殴りたい。強い英霊を使役出来ても、マスターと呼ばれるのが私では、結局同じことだ。彼女らを上手く扱えるのでなければ、意味がない。そうできるように、精神改造でもしてもらえばよかったか。それはもはや私ではないだろうけれども。

……あ、最初にナーサリーライムを召喚したのが私の間違いなのか。しかし、こんな落とし穴があるとは思わなかったのだ。元々彼女は未熟なマスターのために画策するタイプだったが、どうせ私のイメージから作られているのだからと高を括っていた。

「ナーサリーライム」

「どうしたの？」

大きな目でつぶらに見上げても駄目です。可愛いだけに、怖い。お願いだからここに誰も来ませんようにと、祈りを捧げずにはいられない。

いや、怪我を治療出来る人なら来てもらった方がむしろいいのだが。

「……ナーサリーライム、彼を返してくれない？」

尋ねると、彼女は無下に首を振った。

「だめよ。まだ遊ぶの」

「あんな怖いお兄さんと遊んでいて楽しい？」

「楽しくないけど、ダメ」

「どうして？ 理由があるの？」

「あの人はマスターをいじめたもの。マスターは復讐できないから、あたしがするの」

不覚にもちよつと感動してしまった。

え、私のためですか。

これはもう、そつと目を逸らして放置とか出来ない。もう私一般人だから無理、とか言えない。

これを放って彼が消滅したら、間違いなく私のせいだから。

……でもどうしよう。

「私に復讐するつもりはないから、それはちよつと困るんだけど」

そもそも私、彼自身には別に何もされていない。ただちよつと捕まえるとか、尋問しろとか言われただけである。……十分な気もするが、とりあえず、今彼を消されるのは困るのだ。いわゆる、人を殺す覚悟とかも、何も出来ていないし。何を隠そう、私は覚悟が出来たかという問いに「急に言われても……」を選択した人間である。

「……」

彼女はつーんと横を向いた。

「おおい、私のために動くのに私の言うこと聞かないってどういこと。」

「……私の引率力がないってことですね。」

「だから嫌なんだチート性能。使い手に才能がないと突っ走るから。自分自身の能力でなければいいかと思っただが、心配したと同じ現象が今まさに起きている。」

「恐れながら、マスター。……令呪をお使いになってはいかがですか？ マスターの意に添わず、駄々をこねるサーヴァントなどに、遠慮をなさることはございません。」

「見ると、ガウエインがナーサリーライムに向ける目は冷ややかだった。」

「むっとしたように、彼女はそれを見返している。」

「……仲、悪かったっけ？ いや、彼女らが話しているような場面はなかったたので、実のところどうなのかはわからない。」

「考えてみれば英霊は会えば戦闘を行う仲だ。デフォルトで仲が悪くても、おかしくはない。」

「これは、困った。」

「ここに第三の英霊を呼んだとして 三つ巴になったらどうしよう。手に負えない。」

「令呪をそういう用途には、なるべくなら使いたくない。 ナーサリーライム、譲歩してくれないかな？ 出来れば君に、気軽に人殺しはして欲しくない。」

「……じゃあ、名無しの森に来て。」

「名前を忘れて消滅するという森に誘われた。わお。」

「それなら、いいよ。」

「マスター、もう少し熟考した方が」

「ガウエインには申し訳ないけど、ここにいるマスターは非常に未熟だね。あなた方の上に立つには、場違いだ。だからこそ、協力してもらおう分には、納得のいくようにしてもらいたいと思う。あなたにもだけど、ナーサリーライムにも」

さて、煮るなり焼くなり好きにしておらおう。

金髪担当のせいとはいえ、彼らを召喚したのは私なのだ。責任はとらなければならぬ。人を殺しても生きる覚悟は出来ていないが、自分が消える覚悟なら、とうに出来ている。　はずだ。私は一度死んだ人間なのだから。

ナーサリーライムに向き直ると、彼女は一瞬複雑そうな顔をした。その理由を問いただす前に、視界が変わる。

「あなたのお名前、なあに？」

私は……。

ただっ広い草原の上に立っていた。どこまでも地平線。山も木もない。空には雲が渦巻く、色数の少ない景色。

ナーサリーライムの心象風景は、どれだけ空虚なのだろうか。

何もない。

子供たちの夢として生まれた英霊の心の中に、何もない。

「こりやすこい」

緑の絨毯を風が煽り、海のように波打つ風景は、やけに違和感がある美しさだった。あははうふふと遊んでみたい衝動に駆られたが、一人でやるのは非常に空しい。

でもこれ、森じゃないような。

もっと鬱蒼と深い森を想像していた。

と思つた瞬間、急に周囲にによきによきと木が生えだした。細く伸びた若木が太く育ち、ツタが絡み、空を遮っていく。デジタル機器も真つ青の早送りだ。

どうやら、ナーサリーライムの作ったものではなく、私の心象風景だったらしい。あんな爽やかな空と草原が私の心かと思うと不思議だが、思えば太陽もなかったあの空虚さには納得も出来る。私には何せ、目的も何もないのだ。

「マスター」

完全に周囲が森になった頃、私の後ろに立っていたナーサリーライムがさくさくと柔らかい土を踏んで近づいてくる。

森に来たら、名前も知らないが、「彼」を解放してくれるはずだ。そのことを尋ねようと口を開くが、それを遮るように彼女が関係のなさそうな話題を振った。

「あたしは子供たちの夢。読み聞かせのマザー・グース。マスターの望む夢は、どんなもの？」

「夢？」

「ここはあたしの陣地、お気に入り。ここでなら、あなたの夢を全て叶えられる。マスターの望むことが、全て現実」

ナーサリーライム 私のイメージにある通り、黒いドレスの少女だった姿が、画面がブレるように変化した。

「ここにあるのは何？」

土の代わりにアスファルトが足元を覆い、木々が次々とビルや電柱に変わっていく。私のよく知る風景。

「望んでいるのは誰？」

彼女の姿が、母になり、父になり、兄になって、私になる。

「帰りたい。マスターの心の中は、ずっとその言葉だけ。気づいてた。あたしは呼び出された以上、あなたのサーヴァント。マスターの望みは、叶えるの」

私はいつの間にか、自分の部屋に立っていた。大学時代、ほぼ四年間を過ごした私の部屋だ。

本棚の中身も、机の上に置きっぱなしだったノートも、狭い部屋を狭くするベッドも、何一つ変わらない。

「そうでしょう。鼎」

彼女が呼ぶ私の名は、家族が、そしてかつての私が呼ぶ私の名だった。

その声が慕わしい。当たり前だ。私は帰りたい。泣きたくなくなるほど、その声が懐かしい。

「さあ、真実からは目を逸らして」

ここで、その手を拒む理由がどこにあるだろうか。

このまま失って行けばいい。消えてしまえばいいのだ。一度、死んだ身で、蘇るなんて悲しいことは……私には、耐えられないはずだから。

「……………」

私の前で、母の顔をした女が首を傾げた。

「……思ったより好かれてる、と自惚れてもいいのかな？ 会ったばかりだけど」

「……」

苦笑してしまう。彼女が言ったのは答えだ。

彼女は全身全霊で、この夢を拒んで欲しいと言っている。きっとそうだろう。

記憶の母が笑い、目の前の彼女が泣きそうな顔をしているのは、きっとそういう理由なのだろう。

「鼎。それは私の名前だね」

現実がここにしかないのだから、仕方ない。

何も深く考えずに、といって彼女を呼び出してしまったのは私だから、仕方ない。

この現実を、私は、見て見ぬふりは出来ない。

「……まあ、もう少し現実逃避は控えるよ」

全くしなくなったら、たぶんそれは私ではないので。

それでも、ちょっと頑張ってみようかな、という気になった。

誰も知り合いのいない世界、私が二十年以上過ごしてきた場所ではない場所。

「本当にいいの？」

「止めたのは君だろう？」

私の部屋が消え去り、元の草原に戻ると、彼女は黒いドレス姿に

戻っていた。

「で、彼は？」

「もう、帰したわ」

彼女はつまらなさそうに口を尖らせているが、私は笑った。

「ありがとう。これからもよろしくね。あとガウエインと仲良くして欲しいんだけど」

「それはイヤ」

「……やっぱそうか」

本当に三つ巴になったらどうしよう。

誰か常識的な人を呼ぶべきだな……。……。赤いアーチャーとか？皮肉屋と言いつつ言っていることはかなりまともな気がしていたので、きつと苦労と一緒に背負い込んでくれるはずだ。

「ばいばい。また来てね」

キン、と脳裏に響く音を残して、彼女の作った風景は崩れ落ちた。肉体としての重みを感じ、瞼を開ける。

「うおわ」

眩しいイケメンのアップ！！……。ガウエインだった。

何故彼を見ると逃避衝動が起こるのだろうか。かなり失礼だとは思っただが。

彼はそれがわかったかのように、身を引いて視界から消えた。代わりにナーサリーライムがぼふんと私の上に飛び込んでくる。それに次いで視界を羽毛が飛んだ。

「……ちよ、中身抜ける……って」

体の上を感じる重み。布団だった。……布団、という、いかにも庶民といった感じの単語を使ってもいいのかどうか迷う程度には煌びやかな装飾が施されていたが、これはやはり布団だった。

起き上がって周囲を見渡すと、それは天蓋付きのベッドであった。思わずすぐさま降りた。だってあんなお姫様系ベッド、無理だ。やたら時間のかかっていそうな意匠で刺繍された枕に頭を乗せ、レースのカーテンとかに覆われながらなんて、寝てられない。私は根っからの庶民だと再認識してしまった。

「大事はありませんか、マスター」

「いや、うん……？」

大事と言えば、大事だ。知らないうちに知らない部屋に移動しているのだから。

状況の把握が出来ない。

部屋には、ガウエインとナーサリーライムしかいなかった。

しかしなぜ彼らはこの部屋に違和感がないのだろうか。いや、今気にすべきはそこではない。

「……今どうなってる？」

「どう、とは」

「私の処遇についての周囲認識」

「申し訳ございません。わかりかねます。主の安眠のためには言え
ば、快くベッドを貸して下さいましたが」

それでは……確かにわからない。

しかし、快くこんなただっ広い寝室を貸してくれる辺り、さほど

構えなくていいかもしれない。かもしれないが、念には念を入れるべきである。

「ナーサリーライム、周りに人とかいない？ あと、結界とか張られてない？」

「人は、ふたりくらい。結界は張られているけど、守護結界の一種みたい。こちらに干渉してくる感じはないわ。でも、目が覚めたことは、術者に伝わっているかも」

「はあ……そっか……。事情聴取って感じだろうか。それは、すぐ来そう？」

「ううん。この城広いけど、やたら人が少ないから、来るとしても時間がかかりそう」

よし、それまでに作戦会議だ。

ということで、赤い方のアーチャーを呼ぼう。

「ということ、って？」

元凶その1、ナーサリーライムが首を傾げる。

「戦力強化ですね。致し方ありません」

元凶その2、ガウエインが重々しく頷く。

いや、あの、うん。戦力と言えばガウエインがいれば十分いいんだろうけど、彼の思考様式がいまいちわからないので、命令の出し方がわからない。相談出来る人が欲しいんだ……。

三人三様に動き出したら本当に手が負えないことになるが、今でも手に負えていないので一緒だと諦めよう。私のスペックなんて大したものではないのである。

「無銘」

これって名前、ということでもいいんだろうか。
果たして、彼は来た。

「君がそうか」

白銀の髪、黒い肌。赤い衣装に身を纏った弓兵。最も、普段双剣で戦っているため、私は彼を弓兵らしいと思ったことはあまりないが。

「こんな事態は想像だにしていなかったよ。しかし、これはこれで面白そうだ。よろしく頼む、マスター」

「そう言ってもらえると助かる。……名前なんだが、アーチャーと呼べばいいのかな？」

「ああ、そうしてくれ」

周囲を見回し、セイバーとキャスターがいることを認識したのだろう。彼は肩を竦めた。

「他にアーチャーがいるなら、君が勝手に名前をつけてくれない」「い」

「……。まあ、私のネーミングセンスは褒められたものじゃない。アーチャーと呼ぶことにするよ」

まあ、またロビンフッドを召喚したら考えよう。

「アーチャー、聞きたいんだが、金髪の担当とか名乗るふざけた男とは話した？」

「……何というか、君が彼に対して抱いている印象が如実にわかる

な。ああ、会った。聖杯戦争がないということについては話を聞いたが」

「それだけ？　実は、私は何の詳細も聞かずにここに放りこまれたんだ」

ナーサリーライム、ガウエインにも聞いたが、私と似たり寄ったりの情報しかなかった。一番新しい彼なら何か知っているかと思っただが、どうだろうか。

「そういうことが」

アーチャーは少し考える風に腕を組んだ。

「残念だが、私も目新しいと思えるような情報は持っていない。そういうえば、君の言う金髪の担当は名前をレキサンドラと言うらしいぞ」

「……」

「そんな顔をするな、必要性のない情報だというのは承知している」
毛の筋程の興味もない情報である。

「とりあえず、情報集めは自分でやれってことか……」

アフターケアがなっていない。

「あと今、私自身の立場が決まっていけないので、どうにかしたいんだけど」

「守護者、というだけではダメなのか？」

「何を護るのかよくわかっていないのに？」

守護対象を奪われたような気もするし。気もする、というのが少々アバウトだが、致し方ない。私の常識では、泉を水源ごと一瞬で移動するような手段は考えられないのだ。

「それもそうだ。 そうだとすると、この地の情報が必要だな。マスターにとっても、慣れぬ国なのだろう」

私は黙って頷く。

「使用言語の壁はないのか？」

「それは大丈夫だろうと思う」

ガウエインやナーサリーライムも、この国の人々の言う言葉がわからない、とは言わなかった。恐らく私だけではなく、英霊にも金髪……レキサンドラとか言うらしいが、彼の補正が効いている。

それをアーチャーに告げると、彼は驚いたようだった。

「問答無用だな。そんなことが出来るなら、彼自身が来て目的を果たせばいいのではないか？」

「私もそう思う」

そういえば、わざわざ私を送り込む意図も聞かなかった。

詳細の説明がなかったのは、もしかしなくても私の現実逃避が原因だろうか……と今になって思う。

冷静に質問を繰り返していれば、色々と教えてくれたのかもしれない。が、私の頭にあったのは、とりあえず苦勞をしたくないという事だけだったので、それも無理な話だ。

「何らかの理由で干渉出来ない可能性もある、か」

アーチャーは、私がこの世界に来た経緯などは知らないだろうが、なぜか少々気の毒そうな目で私を見た。私の遭遇した状況に対してだろうか。

「しかし、無茶としか言いようがないな。マスターの命令は基本遵守だが、その枠に囚われず行動する英霊もいる。もし令呪を持っているなら、最低限、召喚で現れた英霊に自分の身の安全を守るようにと厳命した方がいい。このイレギュラーな状況に、異論を呑む者ばかりとも限らない。私を含め、だが」

彼は皮肉げに笑って言った。

「寝首をかくかもしれないぞ？」

背後にいるガウエイン、及びナーサリーライムの方から、嫌な感じの空気が立ち上った。顔は見えないのだが、怒っていると思えない感じの空気だ。やたらと波紋を投げかけるようなことは謹んでもらいたかったのだが。これで事実上三つ巴の出来上がりである。手に負えないの決定だ。

「マスター。それには、私も賛成です」

だが、なぜかガウエインは同意した。

「英霊が皆、安全なものとは限りません」

……私自身については、不老不死らしいし。

と思ったが、痛い思いをするのは確かに嫌である。不老不死だからといってたぶん血とかは出るのだから、寝ている間に首を切られて朝起きたらシーツが血まみれ、とかいう怪奇現象にも遭遇し

たくない。

しかし……。

「それは、ちょっと気分悪くないか？」

令呪は確かに、英霊を従わせるものだが、それを使うということ
は、彼らに無理を強いるということではないのだろうか。
出来ることなら使いたくない。

「そこだマスター」

びしりとアーチャーに指を差された。

「何？」

「その弱気がいけない」

腕組みをして、思案げに彼は言う。

「聖杯戦争に関係のないこの世界で令呪を持って、マスターを名乗
る以上、君と私たちは絶対に対等ではない。それなのに、君の言葉
には依頼、もしくはお願い、といったニュアンスが感じられる」
「……という事」

「つまり、君の命令には従わねばならないのに、君が低姿勢過ぎて、
我々が戸惑うということだ」

ダメ出しされた……！

思わずガウエインとナーサリーライムの方を振り向く。ガウエイ
ンは無言で見返してきた。肯定も否定もしないが、文句を言わない
ところを見ると同じ事を思っていたのかもしれない。ナーサリーラ
イムの方は遠慮なく頷いている。意外と意気投合してるんじゃない

のか、この人たち。

「上に立つ器じゃないのは重々承知だが……」

「実際に我々の上に立つのだから、そんなことを承知してもらっては困る」

アーチャーは呆れた風に言った。

「令呪は三つ持っているのだろうか？ 他の使い方をしてもいいとは思うが、君にはまず最低限の安全が必要に見える。まあ、これは私の考えであって、踏まえて判断するのは君だが」

「……ああ、数だけは無制限にあるんだけど」

「何！？ ……それだけの力があってなぜ使わなかったのか、それも不思議だ。君は欲と言うものがないのかね？」

そんなものは手に余ると思ったので、使わなかったのだ。

同時に、英霊をサーヴァントとして扱う主という立場も、身にそぐわない気がしてならない。

「慎重と言うべきか……石橋を叩いて割るタイプだな」

叩いて割って、縁がなかったから今日は家から出るのやめようと思っタイプだ。

とりあえず、私は降って湧いたようなこの事態に混乱しきりだったということかもしれない。

ゲーム中で見た英霊たちに親近感は覚えていても、向こうはそうではないのだと、当たり前前にことに気付かなかったのだから。

英霊と対等な関係、もしくは友人関係になる　とかいうのは、マスターという自分の立場からして普通に無理だということがなぜわからなかったのか。私の頭の中は結構お花畑だったらしい。

そんなお花畑状態の私の方が、彼らサーヴァントにとっては都合がよかったかもしれないのに、目を覚まさせてくれたアーチャーは、やっぱり善人なんだろうと思われた。彼の説教に口を挟まないガウエインも、むしろ同意したナーサリーライムもだ。

「令呪とか持っているならバンバン使っていけということだね、アーチャー」

「いやそうは言っていないが」

「よしわかった」

「従者としては不安な言動だな、マスター。何がわかったのか、是非内訳を教えてもらいたい」

まあ、実際のところ何も方針は決まっていないし、作戦会議というよりお説教タイムだった訳だが。

ちよつとやる気出てきた。たぶん。

「君らに寝首をかかれる心配は、やっぱりなさそうだと思うので、令呪は他の使い方をしようと思う」

第一私は不老不死だ。痛いのが嫌だというだけなのだから、一度殺されてから信用出来る相手を決めたっていい。

やり直しが利くって素晴らしい。やっぱり痛いのは嫌だけでも。

アーチャーは肩を竦めたが、反対はしなかった。

他の二人は、と振り向くと、ナーサリーライムが声をあげた。

「あ、マスター。さっきの人たちがこっちに向かって来ているわ」

予想外に早い来訪である。それでも、ナーサリーライムが先に予告してくれたのをありがたいと思うべきか。

「……アーチャー、なんか無理のない設定考えて」
「それは自分で考えるべきだろう」

もつともだ。彼らにマスターたる私を認めてもらうには、もう少し自身の成長が必要だろう。そのためには、甘えはいけない。従者に甘えるなど以ての外である。
よし。

「……こういつ時にこそ、令呪を」
「令呪を使おうが何をしようが、今さっき呼び出されたばかりの私に状況説明など無理だからな？　　軽口を叩いている場合か。真面目に考える」

作中でもあったが　確かに、彼は口うるさい英霊だった。このくらいが私にとってはありがたい話かもしれない。
さて、考えよう。

第四話 マスターの心得？（後書き）

ほぼ日更新を目指そうと思ったのですが、この作者に定期更新は無理でした。

なので、不定期更新を宣言させてもらいますの……。

第五話 世知辛い世間と常識？

目の前には、私の捕縛を命じた人と、実際に捕縛した魔術師。

前者は大怪我を負っていたらしいが（血が怖かったのでろくに見てない）、ぴんぴんしている。魔術で治したのだろうか。

「窮地を助けてもらったそうだな。……感謝する」

不審人物として捕えかけた人間に助けてもらったのが本意なのか、やけに慚然とした顔だ。そんな顔で感謝されても、されている気がしない。

ちなみにアーチャーには、引っ込んでいてもらった。これ以上サーヴァントが増えたら、何を言われるかわからないし、隠し玉は多いに越したことはないからである。

「お怪我の方は？」

「問題ない。うちの魔術師は治療と補助魔術には秀でている」

「皮肉ですか殿下。確かに侵入者に思い切り先を越されましたがね、あれは人員の少なさのせいですよ」

フードでやっぱり顔の見えない魔術師が揶揄するように言った。

相手が殿下と言うには気安い態度である。

「あなたの方は大丈夫ですか？ 魔力切れで倒れたのかと思いましたが 顔色はよさそうですね」

「はあ、特にご心配いただくようなことでは」

曖昧にぼかすと、魔術師は首を傾げたが、先に自己紹介をさせてもらいましよう、と話を進めた。

「こちら、この国の第二皇子　オルトレート・ヴェステリア・フエル・レリーク殿下ですよ。ご存知なさそうですが」

軽い。

そのため、長いものには巻かれるという信条を持つ私だったが、自分の態度を取りかねた。

「ええ、まあ、知りませんでしたね。あ、もしかして不敬とかで投獄されます？」

「いいえ、一応あなたは殿下の命を救った相手ですからね。それはありません。ね？　殿下」

ちらりと見えた魔術師の口元は、なぜか今にも笑い出しそうなのを堪えているかのように歪んでいる。

「……まあな」

対して殿下の方はやっぱり無然としている。名前も教えてもらったが、なんだか殿下殿下呼ばれていたので私も殿下と呼べばいいだろう。むしろ名前を呼ぶ方が不敬な気もするし。

「ちなみに私はアルケイド・ラネットと申します。あなたのお名前を、もう一度ゆっくり教えて下さいませんか？」

「テイ・ホサカです」

「この辺りでは聞かない響きですね。テイ……？」

「テイ・ホサカです」

「……すみません、もう一度」

「テイ……あ、一応これが名前なんで、これだけでいいです」

「あ、そうなんですか」

和やかに名前の交換などしていたのが気に障ったのか、殿下が口を挟んできた。

「テイ、でいいんだな。おまえは所属を聞いたらわからないと答えたが、本当に無所属なのか？」

「はあ……質問を質問で返して申し訳ないんですが、つまりそれってどういうことなんです？」

前回と同じ繰り返しのような出来事だったが、今は不敬だと叫ぶ兵士はいなかった。質問の意図をわかっていないのだということを理解して、アルケイドが説明してくれる。

「魔術師というのは、誰でもなれる職業ではないんですよ。この職に就くためには魔術を学習するアカデミーに通い、しかるべき組合に登録しなければなりません。ある種の特権階級ですから、登録出来ない、ということは滅多にありませんが、何らかの理由で出来なかった場合は封印処置がとられるはずですよ。所属を答えられない場合、非正規に魔術を習得した疑いがかけられます」

……世知辛い。

「……非正規に魔術を習得しただけで、罪ということでしょうか」

まあ、習得していないんだけどね。

「魔術師は、一人いるだけで十分に危険です。だからこそ、厳重に管理されるべき職なのですよ。その管理を受けず、規律を守らない者が無所属。そう認識される間は、罪ですね」

「……。そういう事情を知らずにうっかり魔術を習得してしまった

場合は？」

「……魔術とは、数年単位で修めるものです。組織ぐるみで行っているのであれば、まず有り得ません」

あの金髪担当め、そんな世界だとせめて一言言ってくれよ！というか 本当に、出現地点をほんの少しだけ考慮してくれれば、何とかなかったかもしれないのだが。

「あなたの事情を聞きましょう」

これだけ聞いておいて、今更所属名を思い出しましたとは言えない。

「……私はレキサンドラという男性から魔術を教えてもらいました」
転生とか云々はいいとして、言えるところだけ正直に言って、あの金髪担当に罪をなすりつけてしまえという私の姑息な手段は、思いもかけない方向で成功した。

「それはまさか、レキサンドラ・ヘルダースですか？」

「へ？」

「その方は金髪に碧眼の男性ではありませんでしたか？」

「あ、そうです」

「それは……『彼方の賢人』のお一人では」

なんですかそれは。

「まさか、ご存命とは思いませんでしたが、サーヴァントを二名常時現出させることのできるあなたの魔力量にも頷けますね」

訳のわからないところで領かないでいただきたい。

「『彼方の賢人』は三名からなる少数ギルドだったそうですが、その発足は認証されています。あなたの保証は十分でしょう」

思ったより杜撰だった。いいのかそんな適当で。そもそも三名からなる少数ギルドって、管理という役目を果たせないんじゃないだろうか。

もしかして、適当な名前言ったら当たる可能性もあったんじゃない……？

そもそもどういう単語がギルド名に相応しいのかわからなかったから、無理だとは思っけれども。なんか正直に全部話してしまったことが悔しい。

そしてレキサンドラの手の平の上で踊っていきそうなことが、より一層悔しい。

「くっ……精進せねば……」

「は？」

「いや、独り言です」

私の奇怪な呟きも気にせず、アルケイドはなぜかやけに身を乗り出して言った。

「実力は既に確かめておりますし、素晴らしい。これ以上は望みようがありませんよ、殿下」

私に話しかけたのではないらしい。

殿下はそれを受けて、気のない素振りで呟く。

「……しかし、子供だぞ？ 魔術師だとしても、修行中ではないの

か？」

衝撃を受けた。

これが噂のカルチャーショックというものだろうか。

一体幾つに見えるのか、是非聞きたい。わくわくしてしまう。

「幾つに見えるんですか？」

「……。そう聞くということは、見かけ通りの年齢ではないということかな」

緑の目に、警戒心が灯る。

「純粹に聞いてみたいだけなんですが」

そういえば不老不死だという私の体は、もうこれ以上年を取らないだろうか？

成人はしたし、ちょうどいい頃合いといえはそうかも。

「十五・六にしか見えん」

是非もうちょっと上めをお願いします。

欧米人の目ってどうなっているんだ。あ、いや正確には異世界人か。

「……殿下っておいくつですか？」

「二十四だが」

「四しか違いませぬ」

「何！？ 成人しているのか！？」

もしかして、私は言動も年齢マイナスに一役買っているのだろうか

か？ 今回、あれこれ質問してしまったし、そうかもしれない。ちよっとシヨックだ。

「この国の成人が二十歳からなら、十分にしています」

申し訳ないことに、常識力はゼロですが。

「そうか……普通、成人は十七だ。それならば、遠慮することはないな」

「そうですね、殿下。何より、あの生きた化石とも言われたヘルダースの弟子！ 手に入れない手はありません」

なんかアルケイドさん、顔見えないけど目が輝いているように見えますよ。若干怖いです。

それにしてもレキサンドラ、もしかして世界への干渉は出来ないのかと思っていたが、生きた化石が本人なら、十二分にしているんじゃないのか？

それとも、顔と名前が一致しただけの別人？ しかしこうも都合よくあるものだろうか、そういう偶然が。

「今、働き口はありますか？ ありませんよね？ ギルドのことも知らなかったくらいですから。それに召喚が出来ていて、修行途中ということもないでしょう」

勢いのいいアルケイドに私は何となく一步下がった。ガウエインがそれとなく前に出てくれた。そういう空気は読んでくれるらしい。

「もしかして、皇室お抱え魔術師になれとか言います？」

なんて……面倒くさそう……！！

動き回る立場が必要なことから、そこで引くなよ、と後ろでアーチャーが呟いた気がしたが、これは脊髄反射だ。仕方ないのだ。そんな面倒くさそうなものとは無縁でいたい。

「俺直属の魔術師で頼みたい」

アルケイドが口説き落とすにいくかと思いきや、真顔で殿下がこちらを見てきた。

「人手が足りんのだ。魔術師は特に少ない。この国は特殊だからな」
「……魔術師に襲われていたでしょう。一度助けたくらいで、私を信用して構わないのですか？」
「倒れるほどの魔力を使つて？ お人好しには間違いないだろう」

実際には、名無しの森に行っていたただけだが。あれはそう解釈されるのか。確かにナーサリーライムが魔力をばんばん使っていた。サーヴァントには魔術師が魔力を供給し、魔力切れをすると気絶とかいう図式があるなら、すぐお人好しに見えなくはないだろう。捕まつて逃げるところだったんだし。

すぐお人好し。

なんかダメージを受ける評価だ。それもうなんか私じゃない、と叫びたくなる。騙しているみたいで胸が痛い。

「……」

反論出来ないが不服さを隠しもしない私に何を思ったか、殿下が一瞬笑みを浮かべたように見えた。
が、それはすぐに消え、咳払いに誤魔化される。

「で、どうだ？ 俺に仕える気はあるか？ 楽な道ではない上、希

望があるとも言い難いが」

働いたら負けだと思ってる。

しかしながら、ここでそんなセリフを言えるだろうか。……アーチャーは間違いなく小突いてくる。というか、今まさに小突いている。背中が見えないところをぐりぐりと。どうして私の考えていることがわかったんだ。ていうか痛い。

私だって理解している。公式の立場を手に入れていた方が、今後動くのには楽だ。動くのには。ひっそり現実逃避するには……害悪としか言いようがないが……。

「……乗りかかった船でしょう。オルトレート殿下。あなたにお仕え致します。確かに働き口は探していたところですし」

あー言っちゃった。

「助かる。詳しいことは、アルケイドに聞くといい。同じ魔術師の方が話も通じるだろう」

え。むしろ通じないかもしれない。魔術知識とか欠片もありませんよ、私。

「では、まずはヘルダース殿の素晴らしさについて語り合いましよ
うか、同志！」

嫌です、この人と会話するの。知識がどうの以前に、肝心な意思というものが通じない気がする。

殿下に目で訴えるが、黙殺した拳句、「何かあれば来い」とだけ言って彼はさっさと部屋を出て行ってしまった。今まさに用があったんですけど。

「あ、部屋はこのままここを使って下さい」
「え、ここって貴賓室ではないんですか」

あんな天蓋付きベッドとか要らないんですけど、切実に。

「どうせガラガラですよ。ひとつ埋まったところで構うまい、と殿下は仰っておられました」

どういふことだろうか？

「人手不足って言うてましたが、そこまで深刻なんですか？」
「一応ここは第二皇子殿下であるオルトレート様の城になりますよ、今この城に滞在しているのは、三十名以下ですよ。しかも兵は半数です。この規模の城、しかも皇子殿下の御許というには、手薄にも程がありますね。一応ここは客室ですが、賓客など滅多に来ませんし」

アルケイドが嫌なことをぶっちゃけた。

「だから死にかけてたんですか、城主が」
「死にかけてたとか言っちゃいけません。まさにそうですが」
「まさにとか言っちゃってたら世話ないじゃないですか!？」

もしかして左遷だろうか。継承権絡みとか？ 私の頭では想像の域を超えない。

「皇位を脅かすほどの立場を得てらっしゃるんですか？」

「殿下を皇帝に、と推す一派は根強いいますよー。神泉の姫君が御母上ですからね」

うわ、嫌な単語聞いた。

「……神泉？」

「あ、やっぱりご存知ありませんか。この国の東方に位置するところですので、つまりこの辺ですね。神泉があつた森として有名なのですよ。この城はちょうど、神泉の真上に建てられた形になります。伝説上ですが、神泉の水を浴びた一族は、神がかつた力を行使したそうですよ。魔術師から言わせると、魔術なんですけど」

観光ガイドの口上みたいにぺらぺらと、アルケイドは教えてくれた。……捕まった時も思ったが、彼は実に饒舌だ。

「まあ、その血を引くご本人である皇子殿下は、魔術が使えないほど魔力が低いんですがね。もっとも、魔術が使えないこと自体は不思議なことじゃありませんが。この国出身の魔術師は少ないです」

それなのに魔術師に狙われるのか。

「……そういえば、泉らしきものが盗まれていましたが、あれは？」
「あれは、形だけのフェイクですよ。同じ場所からかつては湧き出していたのですが、神泉と呼べるようなものはもうありません。ま、実際神泉というものがあつたとして、盗まれたとしても、この国にとって実害というのはあまりありませんが」

「え？」

え、じゃあ私は何を守れと？ ……まさかとは思うのだが。

「神泉の水を浴びた一族、というのは……？」

「今となつては殿下だけですなえ。お母君も由緒正しい家柄とはい

え、親兄弟には恵まれておりませんでしたから。まあ、その伝承自体は、単なる伝説でしょうけれど。あの珍しい髪の色ですから、何かと話の種になったのかもしれないですね」

殿下の髪の色？ …… よく見ていなかったが、白っぽい金髪ではなかっただろうか。珍しい髪の色なのだろうか。

その血筋を守っていかなければならないとか、そういうことだろうか？

絶滅危惧種を守れと？ しかも一個体しか残っていないというのに。今まさに崖っぷち。

「殿下ってお子さんいらっしやるんですか」

「近所の人みたいな質問の仕方をされますね……。一応あれでも皇室ですが。まあ、いらっしやいませんよ」

一応あれでもとか言っている彼の方がひどいと思う。

「奥様は？」

「ご正妃はいらっしやいます」

「それはよかった」

彼女探しからかと思った。

下地が出来ているなら、私がそこに手出ししなくてもいいだろう。馬に蹴られてしまう。

「ここで働かせていただけたということですが、当面は殿下の護衛ということになるのでしょうか」

「ええ。それをお願いしたいと思います」

アルケイドが溜息を吐きながら言った。

「この国のギルドは弱小なんですよ、どこも。私もさほどの力を持つている訳ではないので、先日の魔術師が襲撃に来ると、全くもって歯が立たないのです。お恥ずかしながら」
「襲ってきた先方は、何が目的なんですか？」
「わかりません」

そんな堂々と答えないでいただきたい。
殿下を半殺しにして神泉フエイクをかつぱらつていった相手なのだが。

「ただ、まあ、まず正規のギルドではないでしょうね。あの強さからして、外国の人間であるとは予想が付きましますし、すぐに頼みにして悪いのですが、あなたなら、次に彼らが来た時に撃退、もしくは察知出来る結界を張れますか？」

ベッドに座って足をぶらぶらさせているナーサリーライムに視線を向けると、彼女はこっくり頷いて姿を消した。

ああ……便利に使ってごめん。いやもう本当に申し訳ない。が、こついつた腰の低さは恐らく彼女自身にもダメ出しされるので、後でお礼を言うだけに留めよう。

「常駐する結界ですね」

「ええ……そういえば、あなたはサーヴァントを現出させたままですが」

「はい？」

「余力はあるのですか？ 肝心な時に魔力切れでは困りますよ」

思わずガウエインの顔を見た。

なぜなら、自分のものとはいえ、私自身に魔力の量などさっぱりだからだ。ていうか私に魔力なんてあるの？

そういえば彼、及びナーサリーライムの情報マトリクスに、単独行動スキルはなかった。魔力が切れた時点で彼が消えてしまう可能性がある。え？ それってやばくない？

見つめられたガウエインの方は困った顔をしている。アルケイドの前で質問をすると色々と差し障りがあるので、後で尋ねようと思ったが、恐らく私にのみ聞こえる声で、彼が返答を返してきた。

『私にはわかりかねます。私を顕現させていただくには十分ですが、キヤスターが魔術を使う際の魔力消費もありますので。お察しの通り、マスターからの魔力供給なしに私が動くことは出来ません』

一応魔力というものは、私にもあるらしい。

というか、私が眺めていただけで心の中の質問に答えを返してくるとは……。もしや頭の中の考えは駄々漏れなのだろうか。それは非常に恥ずかしい。

『伝えたい、と欲していただければ伝わる程度です。お気になさるほどのことではございません』

視線の先で、目を逸らしていたガウエインがほんのわずかに頬を染めた。ちよつとその反応不安になるのですが。

「しばらくは心配ないと思いますけど、いまいちよく把握しきれていないので、保証は出来かねます」

率直過ぎる返答を返すと、アルケイドはふむ、と首を傾げた。

「測定したことがないのなら、後ほど魔力値を測ってみましょうか。ではあと、食事と勤務時間についてだけはお伝えしておきましょうかね」

その他必要そうなことをいくつか教えてくれたアルケイドは、明日の朝彼の執務室の方に訪ねるようお願い置いて、部屋を立ち去った。……結局部屋を変えてと言い出せなかった。

「食事……ガウエイン、あなたってご飯食べるのか？」

「いいえ。魔力供給で十分ですので」

それはちよつと残念だ。

「明日まで時間が出来たところで、情報収集をしたいんだが」

探索モード開始……はいいが、どこから手をつけよう。

「目的も定めるべきだな」

ふつと音もなくアーチャーが現れた。

「世界情勢、通貨、一般常識あたり、かな」

「そこに、この国の内部事情も加えるといい。手分けした方が早いな」

「では、私は訓練舎の方へ行つて聞いて参りましょう」
「え」

ガウエインの言葉に思わず驚く私である。

彼にそんな諜報員まがいの真似が出来るとは思ってもみなかったせいだが。

「一応この国にも騎士の制度はあるようです。戦いを生業にする者同士であれば、話くらいは出来るでしょう」

戦場をまたぐ人種の考え方は私にはわからないので、とりあえず彼が言うならそうだろうとお願いしておく。

「それなら私は街の方を見てこよう。軽くだが、地理を知っておくに越したことはないだろう？ ついでに通貨も調べてくる」

「違和感のない服装もお願いしたい」

「……解析してきて、投影魔術で出せばいいのか？」

「買ってきて」

「俺も無一文だとは知っているだろうな？」

「買ってきて」

「……」

アーチャーはやれやれと肩を竦めたものの、何も言わずに消えた。うむ、令呪を使わずとも言うことを聞いてくれるというのは素晴らしい。令呪は本当に無理やり感があって、好きでないのは変わらないのだ。必要がなければ、出来れば使いたくはない。もっとも、自分の身の安全のためには、最低限使おうと決めただけでも、

いなくなつた彼らと入れ違いにナーサリーライムが戻ってくる。

「マスター、ご本は好き？ あつちにいっぱいあつたわ、読みに行きましょう」

結界を張りに行つて、一体どこを見てきたのだろうか。勝手に人の部屋を覗いていそつだ。けれどもありがたい。そこへは私と彼女が行くとしよう。

第六話 世知辛い世間と常識？

ナーサリーライムに案内された部屋は、小ぶりだが図書館のような場所だった。本棚の間を歩くと、覚えのある独特の匂いが鼻をかすめる。インクと紙の匂いだ。

「……おお、読める」

私はとりあえずとつてみた本を開きながら感動に浸った。文字が読めるって素晴らしい。本がない世界など考えられない。活字万歳もつとも、書かれている文字自体は、アルファベットに似た、馴染みのない文字だったが。読めるのだから問題はない。

しかし、やけに字が綺麗だが、既に活版印刷とか発明されているんだろうか？ いや、活字というものは古くから存在したらしいし、ましてや魔術の存在する世界だ。不思議ではないのかもしれない。

「難しい本ばかりね」

本棚の間をフラフラと彷徨っていたナーサリーライムは、戻ってきてそう言った。その手には一冊の本がある。

「何の本？ それ」

「絵のある本」

絵本ではなくて、絵のある本か。

開いてみると、図鑑のようだった。中の絵はどちらかというとりアルで、手書きではあるうが、特徴を掴んだ代物だった。ただし、その「特徴」は、まるで子供向けの絵本のように誇大なものが多か

つたが。曰く、三つ首の犬、体長以上の角を有した鹿、人の頭を持つ鳥、など。レッドマークのつけられたページはどうかやら危険指定されているらしい。見かけたら慌てず騒がず迷わず逃げるようにと書かれている。

表紙を読むと、『魔獣百科』と書かれている。
私はそつと本を閉じた。

「うん、絵本だね」

パツシブスキル『現実逃避』が発動した。これが現実だなんて……認めない！！

「マスター」

「だ、……大丈夫、大丈夫、帰りたいたいなんて思っ
てないよ……うん……たぶん……」

そんな逃げたい私に現実『魔獣百科』を突き付けてくるナーサリ
ーライム。なんて恐ろしい子。でも荒療治過ぎて心が折れるからや
めてください。

「うっ……読書ってもっと安らげるものだと思っ
てたのに……」

情報を得に來ている以上、現実を思い知らされる可能性は多大に
あったのだと、私は見通しの甘さを後悔した。もっと覚悟すべきだ
った。泣きそうだ。

ナーサリライムが屈んだ私の頭を撫でてくれる。癒されるけど
原因の半分は君だ。

「マスター？」

背後に大きい気配が立った気がして、私は慌てて振り向いた。

「ガウエイン。どうだった？」

「はい。やはりこの国は王侯貴族によって治められているようです。今のところ外交に問題はありませんが、ここ数年国内に内部分裂の動きがあるため、やや不穏であるということでした」

内部分裂。

それってここに左遷されてる皇子とか、絶対渦中の人だろう。うわあ……。

「主な派閥とかは？」

「皇太子派、第二皇子派と分かれていますようですが、今は皇帝がいるので、水面下の暗躍にしか過ぎないようです。話を聞く分には、本人の人格や思惑とは離れた部分での問題のようですが」

「どうということ？」

「元は、今の第二皇子が皇太子だったそうなのです。今代の皇帝はご側室の方に先に男子が生まれておりましたが、ご正妃に男子が生まれたことにより、ご正妃のお子の方が皇太子として据えられていたものを、ご正妃の逝去とご側室の正妃への昇進に伴って、地位が逆転したそうです」

「……年齢相応に、ってことなの？ それとも正妃の権力が強いとかそういうことなのか？」

「現在の皇妃はどうやら我欲の強い方の様子ですね」

面倒くさっ。

というかそんなことで、元々あった地位って逆転するものなのか。させちゃっていいのか、皇帝。

「それと……ディキ・レブリースと名乗る男に会いました。一戦試

合たいとのことでしたが、相手をして構いませんか？」
「したいの？」

格下の相手と思ったが、それでも楽しいものなんだろうか？

「はい。こちらの騎士の腕前を知るいい機会です」

生真面目な返答を返してきた彼に、特に反対する理由もなく頷く。

「いいよ。あ、それでなくても、私が呼んだ時とか、緊急時以外は好きに過ごしてもらって構わないからね」

「……はい。しかし、出来ればマスターのお傍につかせて頂きたいと思います」

返事に一瞬の間が開いたことを意外に思い、私は首を傾げた。言葉自体には、肯定を返しておく。

「それはそれで、構わないよ。お願いする方もね」

わずか、安堵したように緩んだ空気に、その意味を彼に問いかけようと言葉を探したが、その前に目の端に映った赤い色に気づいて振り向く。

本棚に紛れてアーチャーが立っていた。本当に彼らは、音もなくいつの間にか立っているのです、全くもって心臓に悪い。

「……君らの会話は、入りにくいな」

「いや、入ってよ。黙って立っていられた方が困るじゃないか」

「ああ、すまない。立ち聞きのつもりはなかった。遠慮した方がよかつたか？」

「堂々と会話に混じって欲しいね、是非」

アーチャーは肩を竦め、私に布の包みを押し付けてくる。

「ご希望の服だ。街中で着るのに適しても、城の中ではどうかかわらないが」

「おお。ありがとうございます」

中身を出すと、落ちついた緑の、長袖のワンピースのようなものだった。

「腰は帯で締めるらしい。そこだけ後で手伝おう。通貨はどうやら硬貨と紙幣があるらしい。概ね、硬貨より紙幣の方が価値が高いと見ていいだろう。もっとも紙幣の方は、あまり出回っていない」

「硬貨にもいくつ種類がある？」

「ああ。一応全て 投影開始」

なんて投影魔術の無駄遣い、と思ったのは私だけだろうか。いや、お金の偽造という面では、非常に有意義 いや、犯罪だ。本当に今私に見せる以上の意味がない。やっぱり無駄遣いだ。

彼は手の平の上に、形の違う五枚の硬貨を乗せた。

煤けた銅の硬貨が一番小さく、次に黄色っぽい金色の硬貨、その次が緑の硬貨、銀色の硬貨、白い硬貨という順に大きくなっていている。裏に異人の横顔が彫られていたり、外国の硬貨、って感じだ。一番大きいものでも、五百円玉よりは小さいくらいの大きさしかない。

「失くしそう」

「失くしそうだな。まあ、一番小さいこれは一応最小単位のような感じがあまり使われないだろう。価値としては大きさの順だ」

「紙幣は？」

「街に出て買い物をする、という時に、紙幣はほとんど使われない。おかげでこの一枚しか目には出来なかった。他にあるのかどうかはわからないし、価値はよくわからない」

彼が出した紙幣は、千円札の半分くらいの大きさしかなかった。そしてやはり人物の横顔が書かれているが、書かれているのは女性のようなのだ。この国の、歴史上の人物だろうか。

くるりとアーチャーの手が紙幣をひっくり返す。ライオンと、そのたてがみに麦の穂が絡みつくデザインが描かれている。

「そういえば国旗とかあるのか」

「領主によって違う旗印があるようだ。ここの主のものはこれだ」

言いながら、アーチャーが投影で剣を出した。その柄に、麦の穂と波打つ髪の子女の刻印が彫られている。

「あの人がこれ使ってるかと思うと……なんか恥ずかしくない？」

「別にあの御仁が決めた訳でもないだろう」

「それはそうだろうけど」

まあ、私が気にすることでも　ハッ。彼直属の魔術師ということとは、もしかして、どこかにそういう記章的なものをつけなくてはならないのだろうか。アルケイドのあの怪しさ満点のフード付きフードにはそんなものはなかったが……。

というか、もしかして、制服のようなものなんだろうか。あのフード付き。私もアレを着ると言われたりするかもしれない。

「……ま、まあ、そうだとしても明日か」

「マスター？」

「や、何でもない。とりあえず、部屋に戻って着替えることにする」

よ

今着ている服は、しまっておこう、と思う。当然いつかは着れなくなるかもしれないが、出来る限り大事にとっておくことにした。生まれ育った世界より、こちらの世界に馴染んでしまえば、いつかは手放す覚悟も出来るだろう。そんな日が来るようには今は思えない、ということとはさておいて。

「しかしこれ、ワンピースみたい……」

感想を言いながら、私は重大な事実気付いた。

「ここって下着どんな？　というかお風呂ってあるの？」

アーチャーは目を逸らした。ガウエインもこちらを見ようとしない。ナーサリーライムは首を傾げている。

「……」

……そりゃそうだ！！　英霊は風呂なんか入らないだろう。気付かなかった自分が悪い。

「……アーチャー。明日、街連れて行って。服飾の専門店があるなら、そこ」

「……ああ、わかった」

仕事の前に衣食住の確保だ。もしアルケイドに止められても知るものか。仕事より先だ、死活問題である。

不老不死なら、新陳代謝も止まればいいのに。ちょっと心底思った。

……髪は伸びるのだろうか？

「投影魔術でお風呂って作れる？」

「作れるが……出来ればそれは最後の手段にしておけ」

アーチャーはなぜか私から距離をとった。引かないで！ 死活問

題なんだよ！

……なんだか疲れた。食欲も湧かない。

「もう勝手に寝てもいいかな……」

「寝るの？ だったら一緒に寝ましょう、マスター」

「いいよ。てか、君ら寝るの？」

抱きついてくるナーサリーライムを受け止めながら尋ねると、三者三様の回答が返ってきた。

「一緒に寝るの！」

「扉の前で夜番をさせていただきます」

「せっかく作ってもらった亜空間とやらの体験もしてみたいからな、そっちで休ませてもらう」

約一名、私が安眠出来なさそうな感じの人がいるんだが。

ガウエイン……まさか、これから毎日その気？

「夜番は必要ない」

「……」

いや、黙ってこっちを見ないで欲しい。

なんだか犬を苛めている気分になる。

「……。」「護衛という意味なら、一緒に寝るナーサリーライムがいるから。今日のところは休んでおいて」

「……承知致しました」

すごくがっかりした感じに了承されても、非常になんだか悪いことをした気分になるのだけど。

とりあえず安眠は確保出来　てない。

部屋に戻って、私はそこにどんと置いてある天蓋付きベッドに絶望した。

「くっ……」

「慣れるしかないのではないか、マスター？」

アーチャーがからかうように言って来る。

「ふかふかね」

一足先に飛び込んだナーサリーライムは嬉しそうだ。私の味方がいない。背後に立っているガウエインはなんだか沈んだ様子で、声をかけ辛い。夜番を断ったせい、というだけでもなさそうだ。何なんだ。

「ではな、また明日」

気まずい雰囲気になれたのか、アーチャーはさっさと消えた。

「御前、失礼致します」

ガウエインも深々と礼をしていなくなる。

ナーサリーライムは……素晴らしいフライングで夢の中だった。

寝息！ 英霊も寝るらしい。本気だったのかと少し驚く。

「……………」

私は一縷の期待を込め、寝室に見つけたクローゼットらしき場所を探る。クローゼットと言うよりはまるでひとつの部屋のような広さだったが、果たして、私の目的のものは 予想以上にあった。どうしてドレスだのなんだの、こんなに揃っているんだろうか。もしかして、アーチャーに服を買ってきてもらう必要なんてなかったかもしれない。

と思っただが、思い直した。とても私では着れないようなドレスばかりだ。着れるかと思えば夜着のようなものばかりで、私はその中の一枚を拝借して着替え、クローゼットを閉じた。

私のためのものとは思えないが、貴賓室というだけあって、ある程度無茶な来客に対応出来るようにと揃えられているのかもしれない。

「………… ナーサリーライムが寝てても結界って大丈夫なのか？」

首を傾げつつ、疲れたので考えるのは明日にして、私は彼女の横に滑り込んだ。

うん、豪華な意匠の刺繍もレースのカーテンも見ない。見なければそれはなかったものである。

人間、やればできる。そして人間は慣れる動物だ。きっと大丈夫だ。

きっと大丈夫 明日に向かって前向きに生きようと思いながら、やっぱり思わずにはいられない。

「………… 夢才子が、一番の素晴らしい結末かも？」

次に目が覚めたら　私はあの四年間を過ごした部屋にいて、狭いベッドから落ちそうになって飛び起きるのだ。そして携帯で日にちと時間を確認して、友人に連絡をし、両親に連絡をする。無事を確認したら、あまりにリアルな夢を見たのだと話して笑って、そして元の生活に戻るのだ。

頬に触れる枕の感触が、空しさを助長するようでも、思わずにはいられなかった。

第七話 空と、海と、地面と

左手の痛みで目が覚めた。

「……………」

寝ぼけた頭で状況把握を試みる。目の前には薄いカーテンが下がり、閉塞された空間。自分の部屋のベッドでないことだけはわかったが、それ以上を考えるに至らない。

ほんの少しの頭痛は慣れたもので、眉間を揉みながらゆっくりと体を起こす。左手が痛い。

左手が痛い？

「……………。…………。あ、令呪か」

その痛みは昨日から感じていたものだ。刺青をしたことはないがこのひりひりとした感覚は、刺青をしてすぐの痛みに似ているのではないかと思う。ひらひらと手を振って、寝ぼけた頭を覚醒させれば、もうほとんど感じなくなった。

「……………」

しかし、眠い。

二度寝の世界に入って行きそうになった瞬間、シャツとカーテンが開けられた。

「マスター、いい加減に起きて活動したまえ。服飾を見に行くのではなかったのかね？ そんな時間もなくなるぞ」

「うっ、やめてアーチャー、寝起きにその赤い色はキツイ」

「……次からガウエインに起こさせる」
「わかった今すぐ起きる。だからそれだけは勘弁して下さい」

白い鎧の方がよっぽど目に痛い。太陽の似合う彼は爽やか過ぎて、あと五分とぐずりたい私にとっては太陽と同義だ。眩しすぎて泣けてくる。

「……。うっ……」

よろよるとベッドから降り、落ちてきた前髪をかきあげながら、思考低下状態のまま窓を見る。誰かが開けたのだろう、外開きの木製の窓は思い切り全開だった。青い空を、深い緑色をした物体が横切った。

「……」

違う、あれはきつと……そう、飛行機だ！ 飛行機！ なんかちよつと緑色に塗っちゃったりしているだけだ、きつと。

一瞬間によぎった言葉を全否定して、しかしその羽ばたきの音とドスの効いた奇声に絶望した。ギエエエエみたいな。地響きですか。なんかちよつと足元揺れた気がした。現実逃避しようにも存在感が大きすぎる。あんな生き物が生存しているなんて。

「今日もう外出ない」

「いきなり引きこもり宣言をするな、マスター！ たかが竜くらいでなんだ」

たかが竜、されども竜である。竜なんて生き物は伝説上、想像上で十分なのだ。目の前にいて、一体何が楽しいのだろうか。怖いだけである。上に乗って空を飛んでヒャッホーウとかするタイプでは

ないのだ。繰り返すが、怖いだけだ！

「飛行機並みの竜……あ、もう駄目だ。気絶していい？」

「言っている時点で余裕だろう、マスター。背に人が乗っているよ
うだぞ、騎乗用だ」

「乗れるのでしょうか」

扉の前に立っていたガウエインがちょっと興味を示した。

「えっ 乗りたいの？」

「……機会があれば」

控えめに彼は言ったが、どう解釈しようとしても彼は乗りたい
そうに見える。

そういえば彼の騎乗スキルには、幻想種は乗りこなせないと書いて
あった。そこんところなんだろう、竜は幻想種？ まあ、本人
は、乗りこなせるかどうかは別にして乗ってみたいのかもしれない
が。

「うう」

近づきたくない、是非とも。あんな代物に関わらずに過ごしてい
いのなら、私はそうする。
だがしかし。

「……機会があったら、ね」

ガウエインをそれに付き合わせるのは可哀想だ。彼らには好きに
過ごしてもらおうと決めたのだ。我慢すべきは私だろう。

「マスター、そろそろ着替えて顔を出すべきではないか？」

なんだかアーチャーが呆れた顔をしながら私の思考をぶった切った。たぶん私の動作が物凄くのろのろとしているせいだろう。クローゼットの中にしまっておいた緑のワンピースらしきものに手を出す。

ふと気づいてガウエインとアーチャーを振り向く。

彼らは特に何を言うでもなく私を見ていた。

「……………。着替えたいんだが」

「……………。ああ、やっぱりそうなのか。どっちなんだろうとは思いなから、たぶんそうなんだろうなとは思っていたんだ」

「そこに疑問は持たないで欲しかったな……………」

「……………申し訳ありません」

「ガウエインまで!？」

「それにしてはその……………無防備でいらっしやるので」

そこか!!

どうやら私は無意識に彼らを男性として　というよりむしろ人間として認識していなかったらしい。もしかしたら着替えをするから見るなど警告した時点で快挙じゃないだろうか。だって今無言の視線を感じなかったら、普通に着替えていた。

うわ、なんか色々失敗していそうだ。

「……………?」
「……………?」
「……………?」

足元まで覆う緑のワンピースに着替えながら、しっかりとこっちに背を向けている彼に尋ねる。

「よく見る、ズボンも入っているだろう」

「……あ、これ？ ……え、この下にはくのか」

「たぶんそれはワンピースではないと思うぞ。それにしてもスリットが深すぎる」

「ああ、そうか……。あ、ごめんアーチャー、帯締めてくれる？」

「もういいのか？」

歩み寄ってきた彼に帯を渡し、背を向ける。彼の手の動きを見ながら何か見覚えがあると思った。……柔道の帯の締め方に似ている気がする。

「思ったより大きかったか。まあ、大丈夫だろう」

「意外と民族衣装みたいになったな……。殿下とかとはまた違う感じだ」

「貴族と庶民では着るものも違うんだろう」

すう、と扉の方から透けるナーサリーライムが音もなく入ってきた。

……驚きすぎて心臓が痛い。やめて欲しい、そんな幽霊のような登場の仕方は。

「おはよう、ナーサリーライム。何かあったの？」

「おはよう、マスター。昨日の夜、接触があったみたいだから、結界を確かめてきたの」

「接触？」

「可愛い猫ちゃんだったわ。あたしが結界を張ってしまったから、入れなくて、うろろろしていたみたいだけ」

遊んであげたかったなー、と首を傾げる彼女に、遊んであげないでいてくれてありがとうと心の中で感謝する。何者かはわからない

が、入れなかったと言うなら大したものではないと見ていいだろう。

「じゃ……とりあえず顔を出しに行こうかな」

そして買い物に行く許可を得よう。得られなくても行くけれども。

「ダメ！」

途端にナーサリーライムにダメ出しを食らった。

「……え？」

「ダメよマスター、隣の部屋に来て。鏡台があるの。髪を整えなくちゃ」

「……ナーサリーライム？」

「可愛くしなきゃ、ダメ！」

……彼女のマスターは可愛くなければならぬという規定でもあるんだろうか、もしかして。だとしたら選考落ちだと思っただが。

私はといえば、寝癖さえなければそれで、という認識の持ち主だったのだが……とりあえず顔洗いたいし……。ハッ、そういえば昨日歯磨きもせずに寝ちゃってる。一度認識すると、歯が磨きたくてたまらなくなった。

「……アーチャー、歯磨き粉と歯ブラシが欲しいです」

「……」

そんな難しい顔をしなくてもいいじゃないか。

果たして彼がくれたのは家に置いてあるような歯ブラシと歯磨き粉とつがいコップだった。素晴らしい。投影魔術って反則的に便利だ。

「歯磨きセットを使う機会があったの？」

英霊って食事したり歯磨きしたりする必要があるんだろうか。

「いや、これは……。まあ、そうだな」

もごもごと答えるアーチャーは歯切れが悪い。そういえば彼は元々一介の魔術師だったというから、人間として生きていた頃に使用した覚えもあるかもしれない。

「マスター、早く！」

「はいはい」

急かすナーサリーライムに引つ張られるがままに、私は鏡台の前に座る。金色の装飾の施された鏡台はやけに使うのに気後れした。そこに映ったとしても、私の顔は変わらないのだが。

もっとこう、煌びやかなドレスの似合う女性とかが使いそうな鏡台だ。しかしなぜ私にこんな部屋があてがわれたのか改めて疑問に思う。嫌がらせだろうか。

「いつ」

ナーサリーライムが懸命に櫛で私の髪を梳いてくれるのだが、鏡台に備え付けられていた固いブラシは正直合わない。私の髪は癖っ毛で絡まりやすい。それでも何とかナーサリーライムの納得のいく出来になったのか、彼女は満足げだ。こんなきつちりまとめてくれなくてもよかったのだが。

「……もはや女性には……いや、何でもない」

アーチャーが何か失言をしそうだったが、途中でやめたのでよしとする。ナーサリーライム作なのになぜけななしの可愛さが消えたのだろうか……。

「マスター、私たちはどうする？ こちらのサーヴァントとは、我々のようではなく、召喚してから魔力が続く間のみ存在するものようだ。ある程度こちらの常識に則って動く方針なら、朝から姿を現しているのはまずいだろう。昨日そこの騎士が現界していた時間ですら、規格外のようだからな」

自分を常識外れの存在だと言っているようなものだが、確かにその通りだ。

「出来ればあまり目立ちたくないし、姿は消していて欲しいかな。あ、ガウエインには用事があったよね？ それって日時とか決まってるの？」

怖い兵士さんと決闘のお約束をしていたはずだ。

「いいえ。次に会う時に、と」

「そうか。じゃ、出てて。でないと」

ガウエイン狙いの怖い兵士さんを私が相手することになるかもしれないから。

「……機会がなくなるかもしれないし」

そつと目を逸らして本音は隠しておいた。今更かもしれないが、ふと何かに気づいたようにナーサリーライムが顔を挙げた。

「マスター、お客さんが来たわ」
「え？」

まさか勤務時間を過ぎたので様子を見に来た、なんてことだった
りするだろうか。急ぐ気は露ほどもないが。

「誰？」

ナーサリーライムに訊いた瞬間、ノックと同時に扉が開いた。ノ
ックと同時に開けちゃダメだろう。

「おはようございます、テイさん」

その人物が姿を見せた瞬間、ガウエインを残してナーサリーライ
ムとアーチャーは消えていた。おお、素早い。マスターがぼやっと
しているうちに彼らは迅速に反応してくれたようだ。昨日と同じ格
好で部屋に入ると入ってきたアルケイドは、ガウエインを見て
唯一見える口元をへの字に曲げた。

「テイさん、もしや、そこの彼はずっと現出させていたんです
か？」

「いえ、夜は戻っててもらいましたが、なぜですか？」

答えると、アルケイドは心なしかほっとしたようだった。

「どれだけ化け物なのかと。ああ、すみません。褒めているん
ですよ？ きつとギルドで階級検査したら、恐ろしいことになり
ますね。見てみたい」

愉快犯になりそうな人だ。

「すみません。用件ですね。先ほど、問い合わせに出していたギルドの方から使いが来まして」

「ギルド？」

「はい。ギルドに所属していないのなら申請しようと思ったのですが、テイさんは『彼方の賢人』に正式に登録されているようですね」

「……」

え？

「勝手に申し訳ありません」

「いやこちらこそ……」

「しかし問題なかったようで、これで改めて雇用契約が出来ます。申請書類の方は出しておきましたので、とりあえずこれを」

渡されたのは四角い金属板のようなものだった。それほど大きなものではなく、革ひもでぶら下がっている。昨日見た妻と乙女の刻印だ。

「魔術師としての身分証明のようなものです。殿下の直属ですから、殿下の紋章ですね。失くしたら悪用される可能性がありますので、失くさないで下さい」

「は、はあ」

すみません。私に考える時間を下さい。

『彼方の賢人』に私の名が登録されている。

『彼方の賢人』には、レキサンドラ・ヘルダースがいる……たぶん私をこの世界に寄越した金髪の男性と同一人物である。

……間違いない。よし、殴りに行くぞ。

「……アルケイドさん、もしかして、レキサンドラがどこにいるかとか、わかります?」

「いえ、現在地までは……」ご存命で現役ということだけは確かめられました」

「調べられないんですか?」

「そこまでは情報開示してくれないですよ。……テイさんには明日、頼みたいことがあります。ギルドに行くとか言うのはよして下さいね?」

「くっ……なんですか、頼みたいことって?」

「殿下の護衛です」

「それは昨日も聞きました」

「王城へ参内するのですよ。魔窟です」

「いいんですか、仮にも皇室に仕える人が王城を魔窟とか言ってる事実ですから仕方ありません」

と云うか待てよ、王城といったらかの高名なイベント発生地だ。魔王倒して来いとか言われたらどうしよう。

行きたくない。

「ガウエイン……」

「……」

「いや、いい」

一人で行ってくれない? と言いかけたが、言われることを正しく予想したかのように決意の目で見返されて断念する。

どうしてそんな、死地に行く兵士のような目をするのだ。行かせられなくなるじゃないか。

「わかりました。行きますけど、アルケイドさんは?」

「私は私でやっておくことがありますので、ついてはいけません」
「はあ」

「そういえば、デイキがそちらの方に試合の申し込みをしたとか？
楽しみにしていましたよ。王城へ参内するのは明日ですから、今日
は兵士と交友を深めてはいかがですか」

「それって必要なんですか」
「必要ですよ。同僚ですからね」

アルケイドとデイキの会話を見ているために何とも返事が出来ない。
い。

「……はあ、まあ、顔だけ出しに行きます」

「あなたと会話していると力が抜けますね」

「お互いさまだと思います。あ、午後から街に出かけてもいいです
か」

「ええ、問題ありませんよ。入る時はそのエンブレムを提示してく
ださいね。ああ、あと街に出るなら、盗まれないようにしてくださいな
いね」

とりあえずもらったエンブレムは首にかけて服の下に入れ、私は
ガウエインを引きつれて兵士のいる場所へ向かうことにした。

「……アルケイドさん、デイキさんってどちらにいらっしやいます
？」

「今の時間なら、訓練舎の方ですね」

「それってどこですか？」

「あつちです」

「わかりません」

詳しく道順を教えてもらったが、結局のところ私にはわかりそう

になかった。……私が方向音痴なのではない。この城が複雑すぎるのである。

「マスター、私が案内出来ませう」

見かねたのだろう、ガウエインが言ってくれた。そういえば彼は昨日一人で兵士さんたちに会いに行ったのだった。何だろう、この私と彼の能力値の違いは。戦闘がどのではなく、こういう性質面が出てくるとシヨックを受けるのだが。

「喋るサーヴァントは便利ですね」

それを見て、アルケイドがうんうんと頷いていた。

「では、私はこれで」

のんびりと私に話をしていた割には、実は忙しかったのか、アルケイドは早足で去って行った。

残された私の方は、ガウエインの先導で兵士さんたちのいる訓練舎の方へ向かう。

昨日も思ったが、人に会わない。がらんとした城は、まだ朝と云っていい時間にも関わらず不気味である。

だが、訓練舎と思しい場所に近づいてくると、さすがに喧騒が聞こえてくる。正確には、指導している側らしい男性の怒号とか、ガチンガチンと噛み合わせる剣や鎧の音とかである。それに混じって嫌な声が聞こえてきた。

ギエエエエ、という奇怪な鳴き声である。

「ガウエイン。……後ろに隠れてていい？」

「マスター？」

「というか、訓練舎に行かないという選択肢を選んでもいいだろうか！？」

「マスター、大丈夫です。たとえどんな相手でも、私がいる限りお怪我を負わせることはありません」

宥められてしまった。

守ってもらえるお姫様ポジションは楽だなーとか思っていたけど、これは、……意外に楽しめない！ なんだこの恐怖との戦い。

だが、ここまで言われて行かない訳にもいかないだろう。なけなしの勇気とかを振り絞って、訓練舎に入っていく。

中には、砂ぼこりの舞うグラウンドらしきものがあった。小学校の校庭を思い出す作りだ。白線がないということがわかりだが。

「……」

そのグラウンドの中央に鎮座する巨大なかぎづめを持つ緑の生き物。

なぜか、巨大な頭を私の方に近づけてきた。巨大な扇風機であおられているような風圧が、ブワツと私の周囲の砂を撒き散らす。どんな鼻息だ。私としてはもう恐怖のあまり、顔が拳げられない。

「マスター、乗せてもらいましょうか？」

心なしが弾んだ声でガウエインが言った。

「……だれが」

恐怖のあまり上ずり、か細く漏れただけの私の声は、彼には届かなかったようだ。

「彼は快く乗せてくれるそうですよ。大丈夫、振り落とされたりはしません」

それ以前にこの生き物自体が怖いんだったら。私が君の背中につちりしがみついているのを何だと思っっているのかね。というかガウエイン、竜と意思疎通しているのか。もしかして。

「ああ、このままでは乗り方がわかりませんね。失礼」

ごく優しく私の手を外したガウエインは、流れるような動作で私を抱き上げた。お姫様抱っこ、としか言えないような抱え上げ方だ。抵抗という抵抗を封じる、実に滑らかな動作だった。実はわかっていてやっているんじゃないのか。

が、目の前に緑の生き物を持ってこられた私は恐怖のあまり声が出ない。

人間、本当に怖い時は悲鳴すら出ないものらしい。

「……」

私を抱きかかえたまま、ガウエインが脚力のみで巨大なドラゴンの足を駆けのぼり、肩のような場所を蹴って背中に辿りつく。

ちなみにその間私は目を閉じていた。それでも彼が鱗を蹴る度に起きる上下運動が怖い。ジェットコースターの恐怖なんか比べ物じゃない。なにせベルト代りはガウエインの腕しかないのだ。がつちりとガウエインの首にしがみついている私の腕はもの数の数に入らない。なぜなら衝撃が半端なく、すぐ外れそうになるからだ。

ドラゴンの背中に下りる時だけは、ふわりと衝撃も何もなく下る

された。

「……………」

へたり込んだ両手の平に感じるのは鱗の固い感触だが、意外と温かい。呼吸で動く感じにぞわっとしたが、思ったよりも背中の上は広く、安定感がある。掴まるころはないが。

「飛んでもらいましょう」

頭の方から伸びている手綱のようなものを、ガウエインが私に握らせた。無茶振りすぎる。

が、私はそれに掴まってしまった。引っ張ったことになったのか、竜が頭を上げ、咆哮を上げる。

「ギエエエエエエ」

それがもう怖い。振動が全身をビブラートさせている気すらする。激しい風圧とともに、両脇にある翼が動いた。ぐらりと地面、竜の背中が揺れ、動き出す。

「マスター、しっかり握っててください」

無理。気絶する方向でお願いします。

そういえば私、ナーサリーライムに空を飛ぶ生き物を要求していたっけ？

逃げるには仕方ないと思っていたが、こんな目に遭うとわかっていたらあんなことは頼まなかった。

「……………」

現実逃避している間に、既にのっぴきならない高度まで来ていた。私は特に高所恐怖症という訳でもないが、こんな不安定な乗り物で高層ビルの最上階並みの景色を見ると、さすがにくらりとする。

「ビル……」

と云えば。

めまいを堪えて眼下の景色を見下ろす。そんな高い建物はひとつもない。身を乗り出すのが怖いので真下は見られなかったが、鬱蒼と続く森と遠い地平線は見えた。微かに見え、白く光るように見えるのは海のようなのだ。

狭い現代日本に比べれば、なんて広々とした景色だろうか。

「……。本当に異世界だ」

近い太陽と、かすめる雲の群を前にして、竜の背中の上は揺れが少ない。

「マスター。空と、海と、地面は変わりませんよ。恐らく、人の在り方も」

そうかもしれない。たとえ足の下にドラゴンがいても……いや、とてもじゃないがドラゴンの存在は許容できない。

「この世界に生きるものを知ればきっと愛着も湧くでしょう。あなたは優しい方だ」

買いかぶりだ。

何をどうしてそう思うことになったのか、是非問い質したい。

けれども。

「……ある程度は、マスターとして認めてくれてるってことかな」
「勿論です。あなたが、私の主です」

ゲーム中ガウエインの主だったあの少年王もこんな気持ちだったのだろうか。否、周囲の期待に答え続けてきた彼とは違うかもしれない。王の器なんてものは、到底私のような凡人にはないものだ。けれどもそれが大したことではないと思う程度には、今の私は気分がよかった。

「どうして君に期待されると、それに応えない訳にはいかないかと思うのか、自分が不思議だよ」

……まあ、それはそれとして。

地面が恋しいので早く下ろして下さい。今すぐ。足の震えが半端ないから。

第八話 竜騎士

熱く太陽に焦がされた砂ぼこりの匂い。手に土がつくのも構わず、下ろされた瞬間、私は地面にへたり込んだ。

思えば、前世の死因飛行機事故なんですよ私は。トラウマになっていてもおかしくないのだ。もつとも、ほとんど覚えていなかったから、高さに対する恐怖なんてものは別にないはずだが……ドラゴンの背の上はガチで怖い。

「マスター、御気分でも？」

ガウエインが屈んで様子を見てくるが、あなたのせいですと声を大にして言いたい。

「大丈夫」

手を振って立ち上がるうとするが、これが上手くないかない。先ほどの揺れがまだ残っている気がして、足がプルプルする。

生まれたての小鹿のようである。あんな可愛いものでもないとは思うが。

『情けないマスターだ』

「うるさい」

全くだと思うけど。

アーチャーの声に反応して振り向くと、無関係な第三者が立っていた。

「……まだ話しかけてもいないのだが、ご挨拶だな」
「いやっ、すみません。あなたのことじゃないです」

ディキさんだ。

「そういえば、あの竜、持ち主っているんですか」

「もちろんだ。あんな竜が乗り手もなくその辺を飛んでいたら撃墜対象だ」

どうやって撃墜するのは非方法を知りたい。あんなのが襲ってきたら災害だ。

「じゃあ、勝手に乗っちゃって悪かったんじゃ」

ガウエインの方を見る。

「大丈夫だと思いますよ。乗り手に了解を取っている節がありましたから」

ね？ と巨大な竜に向かって同意を求める彼に、私は距離を取りたい気持ちに駆られた。

竜の方はギャ、と返事のような声を返してくる。

「ということは乗り手さんも竜と意思疎通が出来るのか……」

「ああ、今こっちに来る。紹介するか？」

「なんで？」

「新顔だからだ。ここの魔術師になったんだらう？ よくわからんが」

いや、普段からあんな竜を乗り回したりしている人とお知り合い

になりたくない。

けれども先輩ならば挨拶をせねばだろう。

デイキが示した方にいた相手は、茶髪の背の高い青年だった。鎧を身につけてはいるが、少ない面積を覆うだけのもので、ガウエインに比べると身軽そうだ。

「いやあ、俺以外にコイツに乗れる奴がいるなんて思わなかったよ」

言つて、私とガウエインを見比べる。

「人間じゃあなさそうだなあ。てことはこっちが魔術師か？」

前者はガウエイン、後者は私に目を向けての言葉である。

「エンリ・ゲルダだ」

「テイです」

欧米的な握手を求めてきた相手にそれを返しつつ、「ごっごっ」とした手の平の感触にこっそり驚く。

「わかるものですか？」

「俺も一応竜騎士だからな。魔術にはある程度造詣があるのさ。ま、魔力の圧倒感が全く違うからな、少し勘が鋭い奴なら普通でもわかるんじゃないか？」

「竜騎士？」

「知らねえの？ 二級魔術師にはメジャーな職だと思っただけだな」

「こいつは世間知らずなんだ」

デイキが私のことをそう紹介した。どういふ紹介の仕方だ。

「へえ？ そりやすげえ。知らないうちに魔術を教えられて魔術師になったとか言う口か？ どっかじゃそういう育成所があるって聞いたな。脱走組？」

「……」

そんなのがあるのか。私は何とも答え難く、黙っておくことにした。

根が親切らしいエンリは「だとしたら言える訳ねえよな」と納得した風に頷き、竜騎手について教えてくれる。

「竜騎手ってのは、竜に関して特化した魔術師、とでも思ってくれりゃいいさ。竜と意思を交わせたり、従えたり出来るが、それだけだ。魔術師としては落第点だな。他にも色々あるが、基本的には一芸しか出来ない奴を二級魔術師って言うんだ」

「へえ」

……あれ、もしかして私も二級魔術師じゃないだろうか。召喚しか出来ないぞ？ なんて言うんだろ。召喚士とか？ いやしかし、英霊しか召喚出来ない。二級魔術師にしても、とっても半端だ。戦力自体はあるだろうけど。

「テイつつたな。あんた、明日王城へ向かう奴じゃないか？ 魔術師が一人いるって聞いてる」

「……たぶん、それは私でしょうね」

イベント豊富な魔窟を話題に出されて、私のテンションは急下降した。

「やっぱりそうか。じゃあ、明日はよろしくな」

「……………え？」

竜騎手である彼がよろしくという意味を頭の中で反芻し、導き出された事実冷や汗をかいた。

「明日はコイツで王城へ向かうから。心配すんな。成竜だから、結構な人数が乗れるし、安全だ」

ギエエエエ！ と咆哮を上げる竜を誇らしげに見上げるエンリ。そりゃあ、その飛行機並みのでかい体躯になら百人乗っても大丈夫じゃないかと思うが……。どの辺が安全なのだろうか。物凄く揺れたけど。

「……………」

もしかしてこの世界の主な移動手段は、竜ですか？
泣きそうだ。

英霊の中に、瞬間移動とか出来る奴いなかっただろうか。いたら是非お願いしたい。ナーサリーライムのマスターであるアリスがしゅんしゅん現れたり消えたりしていたのは、本人の力かな？ ナーサリーライムに今度お願いしてみよう。

とはいえ、明日は一人だけ消える訳にはいかないだろう。場所もわからないし。

「覚悟するしかないのか……………」

顔を青くして決意する私を見て、エンリが吹き出した。

「ま、そうだな。何度も乗れば慣れるもんだ。何なら今からもう一回一周するか？」

「遠慮します」

何を好き好んであんな怖い乗り物に乗らなきゃいけないのだろうか。エンリの後ろにどすどすと寄ってきた竜が、私を見てぶふんと鼻を鳴らした。好きなだけ馬鹿にするがいいさ、怖いものは怖いのだ。

「ははは」

これ以上エンリと話していると、どうしてもドラゴンに乗る方向に話が行きそうなので、私は沈黙の人になっているディキの方を振り向いた。そんなに見つめられると照れる。小市民だから、エンリと会話しているからと視線を無視することが出来ない。

「何か私に用事があるんですか？」

ガウエインのことだったら勝手に連れて行ってくれないんだが。

「ああ、そうだ。そいつ借りていいか」

「決闘のことなら聞いてますが」

「いや、決闘というか戦闘訓練に。最近でかい魔獣退治も何もないから、若い奴らが鈍ってな」

魔獣退治と言う言葉が引っかかったが、私はとりあえずスルーの方向で、ガウエインを差し出した。

「ガウエインが構わないなら」

「マスターのお言葉なら、勿論否やはございません。目的を思えば、彼らを増強しておくのも必要なことかもしれませんね」

いちいち重い返しをやめて欲しいんだが、まあこれもガウエインの性格と思えば……。慣れるしかない。

……あれ、私は彼にこの地での目的について話したっけ？

「しかし、いいのか？ おまえ、見たとこ他に身を護る手段を持っていないだろう。城内にいる気ならいいが」

「他にもいますし……」

私は首を傾げた。デイキには、ナーサリーライムを見せたことがあると思うのだが。

「あんな子供に何が出来るんだ？」

「……まあ」

色々怖い子です。

だが、確かに外見的には多少頼りないかもしれない。与し易しと見られるのは間違いないだろう。

「アルケイドがおまえは規格外の魔術師だと言っていたが、見てみるとどうにも頼りない。この国では、魔術師というだけで身を狙われることもあるんだぞ」

諭されてしまった。

ガウエインがいる時は確かにいい見せ札だが、いなければ頼りない一般人にしか見えないのだろう。間違っではない。

「無茶言つなよ、デイキ。普通、召喚は現出させているだけで桁違いの魔力を食うんだぞ？ 二体同時召喚とか、伝説の域だ」

エンリが笑って突っ込んでくれたが、少し気になることがあった。

「竜は？」

「おいおい、定義を知らずに実践しているとか怖い奴だな。召喚は次元の違う生き物を呼びよせるから召喚なんだぞ。竜は違う、この地に生きるものだ。召喚の対象になるほど不安定な生物じゃない」

竜とかいうものが普通の動物だと言い張られても困るのだが。

「一人で何体も召喚出来たらダメなんですか？」

「ダメ……とは言わないが、もしかして出来るのか？」

「してたぞ、こいつは」

エンリが信じられないものを見るような目を私に向けた。

「記録ものだな」

出来るだけ目立たない作戦はもう既に無理だと私は悟った。

「アーチャー、ナーサリーライム」

呼ぶと、二人は私の背後に現れた。しかし、彼らはどうしていつも後ろに立っているのか。

「……まあ、マスターのような人間が力を隠して生きるとかまず無理だと思ったがな」

「わかっていたんなら言ってくれてもいいじゃないか」

だって別に私がすごい訳じゃないから、それで騒がれるのはとても迷惑だと思ったんだ……。

「どうせ、そうだろうと思った。私たちは、こういう形を取っているが、間違いなくおまえの力なんだぞ？ マスターのくせに、そこを否定するな」

アーチャーは呆れている。そう言われても、私にしてもほんともらった力だし……。今更だが、どうして心の中の思考を読んでいるのでしょうか。

ガウエインにしろ……ハツとしてアーチャーに尋ねた。

「私の考えは君らに駄々漏れ？」

この間も訊いたが、あの時はガウエインが軽く誤魔化した。あの時の赤面はそういうことだったのか？ 眩しすぎて目が痛いとか、清廉潔白に見えて怖いとか思っていたのは全部バレバレ？ もしくは全くもって考え方がわからなくて扱いにくいとか？ 見るとガウエインがちよっとわかりやすく落ち込んだ表情をした。

「まあ、全部とは言わないが……」

アーチャーも歯切れが悪い。ほぼ全部知られていると見ていいだろう。

うわ、はっずかしい。

「……。今更……か……っ」

取り繕う必要性も感じないくらいに、頭の中は逃避衝動でいっぱいだったはずだ。

そういえばナーサリーライムにも、私の望むことはバレバレだった。

「穴があつたら……埋まりたい」

「現実逃避はそれくらいにしろ、マスター。そっちをどうにかすベ
きだ」

見ると、デイキはともかくエンリがかなり遠巻きにして私を見て
いた。

珍獣を見る目だ。一応同僚なのに、これは困る。

「いや、悪い、驚いただけだ。味方にしたら、心強い。こっちの戦
力は心許なかったしな。アルケイドはよくあんたを雇ったもんだ」

素直に称賛されても困る。。

否定しようと思って、やめた。英霊の強さは、本物だろうから。

否定は、私をマスターとする彼らへの侮辱だ。

「その通りです」

隠す必要もなくなったと思ったのか、心中の声にガウエインがに
こりと頷いた。

やめて恥ずかしい……っ。

こつなつたら無心だ。私は無心を目指す。

とはいえ、これは訊いておかねば。

「……寝返る可能性とか考えないんですか？」

「あんたがか？ 俺らを騙している可能性か、あるにはあるだろう
けどな」

エンリはあっさりと言った。

「現状、第二皇子側についていいことなんてないぜ？ メリットがあるとしたら、皇子の人柄くらいだ。いい上司ではあるからな、落ち目だが」

わお。落ち目って言っちゃった。

「皇太子がスパイを寄越すなら、あんたみたいに有能な魔術師なんかじゃないだろうさ。その辺の使い捨てで十分だ」

「……悲しくなってくるんで、その辺でやめてください」

普通に就職しようと思ったら外れクジだと言う訳だ。聞きたくなかった。

「殿下は無欲だというだけだ。侮辱するような言い方をするな」

「そりゃ、皇室に生まれたからには、多大なる欠点だ」

デイキの言葉に、エンリは鋭い否定を向けた。

「俺ア皇太子よりは皇子殿下の方が好きだが、今の姿勢だけは肯定できねえな。半分だけ血のつながった兄貴だからなんだよ？ こっちを蹴落とそうとしてるんだ、素直に蹴落とされてやる道理なんか何処にある」

「殿下はそれも致し方なしと思っておられる」

「あんたらがそうやって甘やかすから、皇子も許されたような気になっただろ」

突然湧き起こった子供のようない合いに、思わず板ばさみにされたような心地になる。

二人の言い分は完全に平行線のようで、フォローの余地もなさそうだった。

だが、恐らく同じような言い合いを何度も繰り返しているのだから。

エンリは肩を竦めて、怒気を逃がした。ディキの方はさして表情を変えてもいない。

「おつと悪いな。新参に聞かせるような話じゃなかったか」

「いえ……」

内輪もめが日常茶飯事とは怖いこともあるものだ、とは思ったが。エンリとディキはガウエインを連れて、訓練している兵士さんたちの方へ向かって行った。竜置いて行かないで欲しい。

「……色々調べることが多そうだな」

アーチャーが腕組みをしながら思わしげに呟く。全くだけど、ちなみに調べるってどうやって？

『足で稼ぐしかあるまい』

それってつまり、Ext aにおける探索パートですね。情報を持っている人が吹き出しマークで区別されるアレですね。現実問題、それはないだろう。つまり会話をして、情報の有無を確かめねばならない。

「無理」

「マスターには求めていない」

可哀想な子を見る目を向けられた。

「手駒がいるだろう、おまえには」

「手駒って言い方もどうかと思うけど。……潜入捜査とか、ナーサリーライム、出来そう?」

竜の鱗をぺたぺたと触っていたナーサリーライムが振り向いて答えた。

「楽しそう。変化のスキルがあるから、問題ないわ」

いくら兵士に変化したとしても、彼女の言動が変わらなければ意味がないと思うのだが……。

そう思っで見ると、彼女は首を傾げた。

「口調や考え方も真似ることが出来るから、大丈夫よ。でも……マスター、その間護衛が一人で、平気?」

心配そうに言われてしまった。確かに私は何の力もないけど、逆にだからこそ狙われることもないと思うんだけどな。知名度も低いし。

「そうとも一概には言えない。実際、君は皇子の配下につくことにしたんだろう。皇室というのはどうあっても狙われるものだからな」「戦力なら、ラニのバーサーカーでも……と言いたいところだけど」

ラニの英霊だった呂布。バーサーカー化してはいるが、その戦闘能力に疑うべきところはないだろう。むしろバーサーカー化によって著しく戦闘能力に限って言えば上昇しているはずだ。

「何を躊躇うのかね?」

「恐らく自我とかないから、一から十まで命令するのが私になるんだよね」

「むしろその方が、君にとっては強力な味方と言えるのではないか？」

理解しがたい、というようにアーチャーが肩をそびやかした。

「召喚したまえ、マスター。いい練習だ」

「練習とか言うか……」

「そのバーサーカーとやらを君が上手く使えれば、我々も安心して君の傍を離れて活動が出来るというものだ。聖杯戦争のように、常に共にいれればいい戦場ではないからな。土壇場で召喚して失敗するよりは、先に練習しておいた方がいいだろう？」

「……まあそうだね」

幸いここはグラウンドで、場所もある。

ドラゴンは不審げにこちらを見ているが、一応、エンリもディキも味方と数えていい相手だ。ある程度手の内は明かしてもいいだろう。もつとも、手の内が分かっていたところで、彼らが英霊に勝てると思わないけれど。

「呂布奉先」

重厚感のある存在が、ずしんと私の前に立った。中華風の鎧は、今私がいる世界観には一線を画すものだ。

こちらを見ているとも思えない目。

私の前に立つたら立ったで、何をしてもなくそこにいるだけ、それでも半端ない威圧感がびりびりと肌を刺すようだ。

「……どうやって動かせばいいんだろうか」

彼のスキルと言えば、必中無弓とか。まず初めにそれを思い出し

た。

遠くの的でも射てもらおう。人に被害が出ないように。ちようどいい的はないかと探すか、ドラゴンがかなり邪魔だ。その図体で視界を塞ぐから、手頃なものが見つからない。

「マスター」

アーチャーがとんとんと私の肩を叩いて注意を促した。呂布がゆつくりと、ドラゴンに向かって矢をつがえている。

「うわーっ!? 待った待った!!」

慌てて制止すると、呂布は動きを止めた。

「な、なんて怖いんだ……勝手に動いたよ?」

「たぶん思考を読んだんだろう」

「え、なんか思った? 私」

「ドラゴンが邪魔だ、とは聞こえてきた」

その言葉だけで、オートで攻撃し出すのか。実に怖いじゃないか。

「……マイルームに戻ってて、呂布」

言うと、彼は音もなく、その重厚な存在感が、まるで初めからなかったかのように消えた。

「やっぱあれレベル高い、アーチャー」

「しかし、十分な脅威だ。あとはマスターの状況判断能力だけだな。しかるべき時には躊躇わずに呼び出せ」

「……」

確かに、もし命をやりとりするような場面になったら、それも致し方ないことだろう。

恐らく、呂布は私の恐怖心に従って、殺戮を繰り返してくれる。後から私の被るトラウマは尋常じゃないだろうけど。

「……時に、マスター。君は人間だよな？」

「は？ まあ、そうだと思うけど」

「昨日の夕食も抜いて、朝も食べず、今はもう昼すぎだ。水すら口にしてない。空腹感を覚えないのかね？」

そういえば。

「特に……お腹が減ったとは感じないな」

なにいいい。

自分で言って驚愕した。

何も口していないのは、アーチャーが言うより半日以上前からだ。

これで夜まで空腹感が麻痺していたら、間違いなくレキサンドラのせいだ。なんてことをしてくれるんだろう。ご飯を食べなくてもいい体だなんて！ 人生の楽しみは食が大半を占めているのに！

「……よし、ご飯を食べよう。とりあえず何でもいいから」

そうだ、何も食べていないから食欲がないのかもしれない。

この世界の料理がどんなものはわからないが……。

「それなら……。街に出て食べ物がどんなものか理解するといいだろっ」

アーチャーがそつと目を逸らして提案した。

「……え、こっちの世界の食べ物ってどんなの？ グロテスクなの？」

「いや、そうとばかりも……いや……まあ、見ればわかる」

結構グロテスクらしい。しかし、私とて魚をさばくこともある日本民族だ。そう多少のことでは驚かないと思うのだが。タコなんかを、昔の欧米人は食べる文化がなかったというから、アーチャーもそういう感覚なのだろうか。

「そうか。まあ、それなら大丈夫だろう」

アーチャーはこころなしほつとしたように言う。異世界でも、ここでしばらくなりと暮らすのだから、食文化は大事だ。

見た目での好き嫌いがほとんどない私は、そうさして気構えることもなく城下へ向かった。

第八話 竜騎士（後書き）

呂布が脇役にしか……ならな……。
いえ、レギュラーです。

第九話 猫

細かいレンガの敷き板、居並ぶ店舗はどう鼻屑目に見ても露天商だ。ごろごろとスイカや瓜のようなものを布のシートの上に転がしている店もあれば、魚のようなものを木箱に詰めて売っている店もある。店番は基本的に地面に直座りだ。これが市場、って奴かと私はしみじみ見た。その喧騒の中に立っている自分というのは、とてもじゃないが場違いだ。

隣に立つアーチャーとナーサリーライムは相変わらずの格好だ。ナーサリーライムがはぐれると怖いので、手をつないだ。案外彼女は好奇心旺盛で、あちこちに目をとられている。

「アーチャー、その格好つて浮かない？」

「まあ、それなりに浮くだろうな。しかし、主の黒髪黒目の方が珍しいようだぞ？」

「そうなの？」

「ここにそういった風貌の者は、昨日も見かけなかったからな。民族柄、出にくい色なのかもしれん」

「異邦人丸出してことか」

「懐に気をつけるよ」

まあ、今私が持っている大事なものと言えば、身分証明のメダルくらいだが。

そう思いながら固い石畳の上に一步を踏み出したところで、ナーサリーライムが勢いよく頭を上げた。

だが、彼女が反応する前に、アーチャーが私に伸ばされた手を捕えて、人影を地面に叩きつける。

「言った傍から」
「う……」

一般人に、スリに気づけっただ方が難しいよね？ というか私が気付くのはたぶん被害を受けてからだ。しかし、触れられてもない段階で引きずり倒したりして、間違いだったらどうするんだ。

「君に向かってナイフを構えていたんだぞ？ 間違いであるものか」
「ナイフ？」

「用心のために財布にひもをつけている者もいるようだからな、そのためだろう」

どうやら手慣れた犯行らしい。

「……それにしたって、子供じゃないか」
「スリや盗みを働くのに、年齢は関係ないぞ？」

アーチャーが私の前にその子供を差し出した。

「……服は汚いけど、食うに困ってる風にも見えない」

食べるのに困っている子供ってというのは、こんなにふくよかだろうか。別に太っている訳でもない。ただ、程良く筋肉のついたその少年は、私の知るその年頃の小学生とそう変りなかった。恵まれた日本人と、そう変わらないということは、むしろこの世界観ではかなり恵まれた部類と見ていいんじゃないだろうか。

「盗みって困ってからするものじゃないか？」
「別の理由でスリをする者もいるだろう」

暴れる子供に辟易した顔をしながら、アーチャーが応じる。ナーサリーライムの顔が怖いことになっているのを、私は彼女の手をぎゅっと握って止めた。

「マスター、誰かこつちを見てる」

ナーサリーライムがひそ、と私に告げる。

「何者？」

「あ……覚えがあると思ったら、昨日の猫ちゃんだわ。……マスター、遊んできてもいい？」

「目的を吐かせる程度でお願い。非殺傷設定だとなお嬉しい」

「それも面白そうね。首が取れちゃったら、ごめんね？」

うおいと突っ込みを入れる前に、ナーサリーライムは私の傍から姿を消した。

「……大丈夫かな。うん、大丈夫だろう。きっと」

ちっともそう思っていない顔で何度も頷く私に呆れの目線を向けて、アーチャーが「これはどうする？」と子供を指し示してきた。

「気になることはあるけど、まあいいや。逃がしてあげて。もう一回襲ってくるようなことはないよね？」

子供にそうやって目を向けると、子供はぶいと顔を逸らした。くしゃくしゃの髪は茶色で、目の色はどうやら青だ。異国の子供って感じがして物珍しく思う。

「来ても勝てないってわかったでしょ？」

笑顔で告げると、子供はなぜかそろつと横目で私の様子をつかかった。ニコニコと満面の笑みを持ってその視線に応えると、子供は慌てたように何度か頷いた。アーチャーの腕から身をよじるようにして逃げ出し、ばたばたと駆けて逃げて行く。

「いやー、子供って可愛いよねー」

「意外と君の顔は武器だな」

「ん？」

「いや……子供には効きそうだな。子供好きなのか？」

「ああ、まあそうかもね。保母さんになろうとしてたくらいだし」

「保母さん……」

「保育士」

「いや、わかるが」

じゃあ何を釈然としないのだろうか、と思いながら私は辺りを見回した。

「軽食屋なんて、ないか。やつぱり」

「いや、裏路地に入ればあるようだ。味は保証しかねるが」

「それについては、何事も経験だ、って奴だね」

アーチャーの導きに従って裏路地の方へ向かい、私は愕然と足を止めた。

「……軒先に何かぶら下がってるよ、アーチャー」

「……ああ、そうだな」

「アレ、何？」

「走り蜥蜴と言っそうだ」

普通の一軒家としか思えない家の玄関先にだらりとぶら下がっていたのは、蜥蜴の巨大な死体だった。子供くらいの大きさはあるかもしれない。一匹ではなく、五・六匹ずらりと置いてある。

「生々しい……っ。どうしてこの世界はこう、鱗モノが目につくの……？」

「この辺りで言う肉とは、走り蜥蜴の白肉が一般的らしいぞ、マスタ―」

なんですと。

「う、牛とか豚とか鳥とか……もしくは馬とかは……!？」

「わからん。馬はいたが、食用には思えなかったな。牛らしきものは見たが、……あれを牛と言っているものか……」

「私、どれだけグロテスクな食事風景でも大丈夫だと思ってたよ……でも思ってただけだったよ……現実って厳しいなあ……」

引きこもりたい。

「ナーサリーライムの中に逃げるなよ？」

「しませんよ……」

「で、ここに入るのか？」

「ここが軽食屋!？」

看板も何もない、と思ったら、アーチャーが示した玄関脇、蜥蜴の死体に隠れて、慎ましやかなメニューボードがあった。

「難易度が高い。勘弁して下さい……」

だらんとぶら下がった巨大な蜥蜴の死体が意味もなく怖い。あれ

を食べ物だと思えとは、無理な話だ。色を失くした青い鱗、てれんとした白いお腹、四本の手足、尾の付け根で打ち抜かれた杭が縄でつるされているので弧を描いて地面に落ちる尾。うん、無理だ。

「魚……魚ならばけるのに……」

「魚は平気で、なぜ蜥蜴がダメなんだ？」

「そう考えると不思議に思えなくもない……だけど無理なものは無理」

「とりあえず、調理されたものなら、大丈夫じゃないか？」

「だとして、今原材料となるものをまざまざと見せつけられているのに、それを調理したものを出されて目の前にこの姿が浮かばないとでも？」

アーチャーは打つ手なしというように肩を竦めた。

「ごめん。他の店……」

「蜥蜴が一般的だと言っただろう。似たり寄ったりだ」

「うう……！」

なぜこうも鱗付きは私の前に立ちはだかるのか。

どうやら店の中から、玄関先に立つ二人を眺めていたらしい中年の女性がずかずかと出てきた。

もしかして文句でも言われるのだろうかと身構えた私に対して、いい具合に浅黒く日に焼けた肌をした女性はニカツと笑う。

「あなた、余所の人かい？ 走り蜥蜴の店は初めてなんだろ」

「は、はい」

「外国から来た奴らは、外見で尻ごみするんだよ、もったいない。まあ、ちよつと中入ってひとつ食べていきな」

「あっ、いや、あの……」

無理！ と思っただが、恐らくこの店で働いている人を前にして、そんな拒否は出来ない。ノーと言えない日本人魂が発揮され、私は気づくと店の中に連れ込まれていた。

端の欠けた木の椅子に座らされたはいいが、私は落ちつかない。

「アーチャー……考えてみれば無一文なんだけど」

お金ないからと叫んで出て行った方がいいだろうか！？

「……。マスター、私がそのくらいの支払いは出来るから、やめておけ」

昨日、無一文の彼に服を買って来いと無茶を言った意趣返しに放っておかれるかと思っただが、アーチャーは渋面でそう言った。自分のマスターが無銭飲食未遂をするよりはいいと思ったのかもしれない。

というか、なぜ金を持っているのだアーチャー。もしかして投影？

「サーヴァントに養われるってどうなんだろう。ヒモ？」

「その単語には語弊がある。やめろ、はしたない」

はしたないって。

「おまちごつさま」

二人分の食事が、中年女性によってずらりとテーブルに並べられた。

「……」

渡されたナイフとフォークを構え、じっと目の前の皿を見つめる私。一見して、あの蜥蜴は連想されない。

「共通点を見つけようとするな」

目の前で、アーチャーはぱくぱくと白身のステーキを食べている。

「英霊も食事ってするのか。ナーサリーライムも誘った方がよかったです？」

「付き合いだ。別に食べなくても困らない、遊びに夢中のようにだったから構わないだろう」

「……味、どんな？」

「同じものが目の前にあるんだから、まず食べる」

「……くっ」

カウンターの向こうから、仕事をしながら中年女性もこちらをちらちら見ている。

食べない訳にはいかない。

私は覚悟を決めた。とはいえ、物凄く恐る恐ると、スープの間に浮かぶ白い肉に口をつけてみた。

「……」

思ったほど、突拍子もない味はしなかった。当たり前かもしれない、こちらの人にとっては一般的な食事なのだから。むしろ肉自体が淡白な味わいのせいか、スープのダシが利いて美味しい。ところどころに浮かぶジャガイモに似た野菜の味の方が強いかもしれない。

「……美味しい」

「よかったな」

よく出来ました、というようにアーチャーが口の端を上げる。すぐく子供扱いをされている気がするんだが。

「実際、私から見ればまだまだ子供だ。間違いではあるまいよ」

しれつと言うアーチャーに対し、満足に自分の保身も出来ない身としては黙るしかない。

「普通に暮らそうと思ったら、英霊の力なんて借りなくていいんだらうと思うけどな」

カルチャーショックはあるだらう。蜥蜴とか。けれども、こういつた食堂で働くのもよし、目指していた保育士のような職業があるかどうかはわからないが、必要性はあるだらうからその可能性を模索してみるもよし。

仕事幹旋業みたいなものがあるかどうかは知らないが、役所のよくな場所があれば訪ねてみてもいいだらう。

そつえば戸籍という代物はあるのだらうか。時代観からして、杜撰そうだが。

言葉に困っていないというのは大きなアドバンテージだ。様々な可能性を見ることが出来る。

「……腰を据えて職を持つのはどの道無理だと思うぞ。十年が限度だな」

テーブルに行儀悪く肘を突き、けれどもそれが様になるアーチャーは胡乱げに言った。

「だよねえ」

あの金髪担当がオマケのように足していった「不老不死」属性は、
こういうところで物凄く邪魔だ。

何をやってもやり直せる代わり、腰を据えることは出来ない。

結局完食し、空になった皿を前にしながら、ぐだぐだと悩んでいる自分に気がついた。

「あー、駄目だ。悪い癖だな」

「わかつているんだな」

がたりと席を立ったアーチャーが、テーブルの上に数枚の硬貨を置いた。……ああ、そりゃレジなんかないよね、と気づいて私はニコニコしている女性に声をかける。

「ご馳走さまでした」

「助かった。おかげで我が主の食わず嫌いも治ったようだしな」

うそぶくアーチャーを睨む。店の女性はあらあまあまという顔をした。

「主って、貴族か何か？　じゃあ、お忍びかい？」

「えっ、いや」

「そりゃあ、こんな汚い店で悪かったね。だけど気に入ってくれたんなら何よりだ、また来ておくれよ」

それ以上の追及もせず、必要以上に卑下することも拒否することもなく、快活に見送られる。

玄関の蜥蜴を見るとちよっと戻しそうになったが、ここはとりあえず、私にとつての鬼門ではなくなった。

「……子供のスリもいるかと思えば、ああいう普通の人もいるんだね」

路地に出て、思わず、感想を漏らす。対してアーチャーは皮肉げに言った。

「いつでも世界はそういうものだ。自分の視野は狭いと思ったただろっ?」

私は知らず苦笑した。

「ところでお金ってどうしたの」

「さあ」

「マスターに隠し事ですか」

「従者としては役に立っただろう? マスター。細かいことは気にするな」

まあ、それには違いない。

知ったところで、何が出来る訳でもない。引き際だけは心得ておこう、と私は頷いた。

「わかった。ありがとう、アーチャー」

ゴチになりました。と頭の中で両手を合わせて拝んでみると、先を行くアーチャーの肩はちよつと震えていた。どこらへんが笑いのツボをつついたんだらう。私の思考は駄々漏れなのに、なぜ彼らの思考は読めないのか。非常に残念だ。

目下最大の懸念だった食事の摂取については、問題なかったようだ。しっかりと満腹感も得られたし、まあ、蜥蜴には驚いたが、食

べられるということだけは確認した。食べなくてもよさそうなことについての確認は後回しにすることにする。飢餓状態になるかどうかはわからないが、好き好んでそんな状態になりたくない。

「ところで、マスター」

「何かな、アーチャー」

「上を見てみたか？」

上？ と空を見上げた私の目に、黒い物体とそれを追う黒いドレスの少女の姿が飛び込んできた。

その一人と一匹？ は路地に落ちてくると、私とアーチャーの周りをぐるぐると激しい勢いで追いかけてっことを続ける。

「……………猫？」

そこにいたのは確かに黒猫だった。屋根の上まで飛び上がり、今なお壁を蹴って走ることの出来るこの生き物が、猫と言っているのかどうかは別として。

「うふふふっ、疲れてきたの？ 猫ちゃん」

ナーサリーライムは余裕のままだが、猫の足の目は目に見えて鈍っている。

「つまんないの。そろそろ終わりにしちゃうね」

一瞬何をするつもりかと思い、制止しかけたが、片手を上げたナーサリーライムは猫の周囲に細い格子の檻を作っただけだった。持ち運びしやすいお手軽サイズ。

思わずばちばちと拍手をする私であった。

「圧勝だな、ナーサリーライム」

「えへ」

褒められて嬉しそうな彼女を撫でつつ、檻の中の黒猫の様子を見る。疲れ切ったらしく、荒い呼吸の度にその小さな姿が揺れていた。

「この猫とは喋ってみたのか」

「うん。でもなあんにも答えてくれないの」

そりゃあ、猫なら喋るはずはない。だが、疲労困憊しながらも体を起こそうとする猫の目には、気紛れな獣の質ではなく、知性が感じられる気がした。

「手とか足とかとつちやったら、喋ってくれるかしら」

相変わらず怖いお子様だ。やめていただきたい。

「どういう理由で私たちを見ていたかくらいは教えてくれるかな？」

屈んで猫と視線を合わせると、猫は荒い呼吸をそのままに、まっすぐな金色の目でこちらを見てきた。

しかし、そのまま沈黙は続いた。長い。

……なんだか、この目に人語を解する者の知性を見た自分の感覚が信じられなくなってくる。

ただの猫に話しかけているとか、普通に見たら変人なんじゃないだろうか。

「いや、間違いなくただの猫ではない」

アーチャーが言う語尾に被せるようにして、猫が鋭く声を発した。

「帰れ」

帰れ？

私は呆気にとられる。

「おまえ、絶対、違う。レキシンドラが」

私は思わず籠を鷲掴みにした。その衝撃で揺れた籠の中、格子に頭をぶつけた猫がギャツと鳴く。

「あつ、ごめん」

意図せず動物虐待をしてしまった。

予想外のところからレキシンドラの名を出すから悪い。私にとつてあの金髪は悪夢だ。全ての元凶だ。動揺もするというものだ。

「くう……乱暴。やはり、レキシンドラ、間違った」

「どういうことだ？」

低く押し殺した声を漏らしたアーチャーから怒りの気配が立ち上っている。見ると、ナーサリーライムも同様だった。

「我がマスターを捕まえて、間違った、とは聞き捨てならん。この世界に来ることは、彼女が望んだことでもないのだぞ」

黒猫はその威圧に一瞬怯んだ様子ながらも、小さな口から牙を剥いて応じる。

「守護者、優しい人。みんな、優しい人。こんなの、違う！」

それだけ言うと、猫はぴんと耳を立て、私達ではない誰かに反応するようにさわりと尾を波立たせた。

「……ごめんなさい、セディ」

私には感知出来ない誰かに怒られたのか、へによ、と耳とひげと尾を垂らす猫を、思わず撫でたくなった。何かいつ可愛い。

はつとしてナーサリーライムの方を見ると、案の定拗ねている。愛玩動物に対する愛と君への愛は別だよナーサリーライム！

「……ナーサリーライム、この檻の中に入れておけば逃亡は出来ないの？」

「こつちの魔法のことはよくわからないから、たぶんだけど」

「そか……ん？」

黒猫に視線を戻すと、猫は華麗な猫座りで私を見上げていた。わかりやすく上下していた胸は落ちつき、尾は地面に沿って落ちていく。先ほどの様子と比べると雲泥の差だ。何か乗り移ったみたいだと私は思った。

「離してやってはくれないかね？ 悪気はなかったのだ」

「誰です？」

思わず私も丁寧語になってしまっくらいには、威厳のある口調に、咄嗟に誰何する。

「私はこの猫のマスターだ、若き守護者よ。この世界へようこそ、君を歓迎する……『彼方の賢人』の一員として」

猫はひげをそびやかし、苦笑気味にナーサリーライムに視線を向けた。

「昨日のうちに接触を試みたのだが、そこのお嬢さんに咎められてしまっただけ」

「だって、マスターが眠った後だったんだもの」

「ああ、昨日は早く寝たからなあ……って」

そんなすれ違いはどうでもいいのだ。

訊きたいことが色々ありすぎて、質問がまとまらない。

「あなたが『彼方の賢人』の一人？ 名前を訊いても？」

「私はセドリック・イースター。もっとも、名を連ねているだけで、現役からは退いた身だ。この猫の失言については許してやって欲しい。レキシサンドラがそう守護者となり得る者を間違うとも思えぬしな」

ええー、それについては物申したい。

「間違っているかも」

「間違っているかね？」

中身が違うだけでこれほど仕草も変わってくるのだろうか。わずかに小首を傾げる仕草は、愛らしいと思えども、これを撫でる勇氣は出ない。

「……どうして？」

零れた問いは、ひたすら私を悩ませたものだった。

どうして私は死んだのか。どうして私は今、ここにいいのか。
ただの、日本の現代に生きた、平凡な人間がなぜこんなところで
守護者と呼ばれているのか？

「レキサンドラの選定に、私は否やを言うつもりはない。それと同
じように、君の選ぶ道もまた、私は肯定しよう」

猫の声自体は最初から変わっていないが、その抑揚には長い時と
深い思慮を感じさせた。

「私は帰れないのか」

ずっと、そうなんだろうなあとと思っていた。最初、レキサンド
ラに、日本に戻ることは無理だと言われてからこつち、選択を与え
られる幅はなかった。

「それだけは、出来ない。もはや神にも」

誰ともしれない、猫の体を借りただけの者の声が、じんわりと染
みる。

「……レキサンドラは今どこに？」

「彼に言いたいことがあるならば、私が受けよう。レキサンドラと
は知識を共有した。君の訊きたいことに、答えられるはずだ」

さり気なく、レキサンドラの居場所については誤魔化された。あ
の金髪、一体何をしているのだろうか。

「では、あなたはどこにいるんですか？」

尋ねて、不思議に思った。この猫の主人が『彼方の賢人』で、レキサンドラと同格というなら、なぜ私の前に現れないのだろうか。

「なぜ出向いてこないのかと思っているかね？ もっともだ。使いを出した非礼を詫びよう。守護者殿」

「からかつてます？」

「いいや、本当に申し訳ないと思っている。君には全てを押し付けた形だ。こちらとしても不本意だが。もし君が私に会いたいと思ってくれるなら、この猫に案内させよう。今いる地から、私はもう動けぬのだ」

「動けない？」

「病持ちの身でね。何、身に余る膨大な魔力のおかげで、死の淵はまだ遠い。急がずとも時間はある」

ただし、と猫は首を傾げた。

「私もレキサンドラも、君の疑問に対する答えは恐らく、持ってはいない。全ては偶然であり、必然だ。我々の事情を語るのは、どうにもならなかったことを掘り返す繰り返すようなもの。君にとってさして重要ではないだろう」

今私がここにいることに対しての答えは、得られないのだと彼は言ったようなものだった。

一瞬唇を噛み、必要なことを聞きそびれたことを思い出す。

「セドリックさん」

「セディと呼んでくれ」

ええ、何その無意味なフレンドリーさ。

「……セディさん」

「何だね？」

「守護者って聞いてはいたけど、具体的に何を守れば……」

「何？」

セドリックは呆れたような吐息を漏らした。

「それはレキサンドラの手落ちだな。まことに申し訳ない」

「いや、こちらこそ……」

長時間に渡って現実逃避という手段で彼を拒否していた覚えのある私はそっと目を逸らした。

「世界だ」

「え？」

「君に守ってもらいたいのは、世界だ」

ええええええ、一気に話がでかくなったよ!?

「泉とかじゃないの!？」

「ああ、神泉かね？ あれも要の一つ。重要ではある……が、実物はもうなくなってしまったからな」

「なんですか要の一つって」

「かつて神泉の一族と言われた人間は、神泉の力によって存在自体が封印になっている。かつては魔力とは違う、神力の出所として神泉が在ったのだ。枯渴したが」

封印。何ですか、その邪悪なものをいかにも封じ込めましたって
いう感じの響きは。

「詳しいことは、君が来てくれた時にでも話そう。今はまだ 彼方の賢人」の残りがいる間は、君の猶予期間だと思って欲しい。この世界を知り、馴染んでくれ。出来れば、愛して欲しい。君が長くいる世界だ」

無理だ、と即答しようと思ったが、それはなぜか憚られた。

この世界に来て私は二日ほどだが、もう既に、色んな人間に会っている。その全てが敵意を向けてきた訳ではなかった。

しかし逆に、まだ二日だ。この世界が異国の地であることには変わりない。無理だとも言えないが、容易に頷くことも出来ない。

「……ふう。少し疲れた」

猫はぐつと背中を丸め、へたりと地面に伏せた。

「この猫は、一旦返してくれると嬉しい。君たちがもう一度、私と接触を持ちたいと思った時に……向かわせよう」

ピッ、と黒猫の耳が立ち、彼はわかりやすく頭を上げてきよるきよるした。尾は警戒のためか、ピンと立っている。

どうやら最初の黒猫に戻ったらしい。

「ナーサリーライム、檻解いてあげて」

「うん」

割合素直に、彼女は頷く。それと同時に黒猫を閉じ込めていた檻は空気に溶けるようにして消えた。

まるで野生の素早さで、黒猫はその瞬間シュツと物陰に消えた。

「ええっ、早っ……あ、名前訊くの忘れた」

「逃げ足の速い猫だな。一言文句を言ってやるうと思っていたのに」
残念そうにアーチャーが腕組みをして唸る。

「いや、いいよ。主人に怒られていただけろう」

その方が堪えるだろうし。

「マスター、先ほどの猫の話をして信用する気か？」

「まあ、大方嘘はないだろうと思っているけど、とりあえずの判断は会ってからかな。なぜ？」

「レキシンドラを見るに、君に対して『何でも』能力を付加出来ると言ったほどの存在なのだろう。ならばこちらで言う魔術師と同格というのも頷けない話ではないか？」

「……まあ、そうだね」

「だが、あの猫が接触してきたのは偶発的とは思えない。君の知るレキシンドラと猫の言うレキシンドラは同一人物とみて間違いなさそうだ」

「……」

「同格として、セドリックがそれほどの力を持つなら、なぜ守護者の役割を自らしない？ 病というのもおかしい話だ。また、同格でないなら、なぜそれほど 神にも等しいだろう存在が『彼方の賢人』とやらに一魔術師として名を連ねているのか」

考え込み、私は思考の渦に沈みそうになった頭を無理やり上げた。

「わからないことは悩まないに限る」

「マスター……私には、君が都合よく利用されているように見えてならん」

「だとしても、だ」

私は苦笑した。

「この世界を壊そうとしている人たちではないだろう。その点だけは、味方に思ってもいいと思うよ」

言っと、アーチャーは、なるほど、と頷いた。

「マスターは既にそちら側だという訳だ。ならば何も言っまい。問題はないのだから」

第十話 道中？

「……結局大して何も教えてもらってなくないか？」
「今頃気づいたのか、マスター？」

ゆっくり出来ない部屋で、どうにか寛ぐと私室のソファに腰掛けてみた。三人掛けに見える大きなソファは、私のサイズからはかなり大きい。大柄な成人男性にちょうどいいくらいだろう。柔らかい毛皮のクッションがふかふかとして、いい触り心地である。全体的に白っぽくて、何か飲み物でも零したらと思うとちょっと怖い。何の毛皮だろう。

探してみると、縫製の痕が裏側に細かく集まっていた。全体図を想像すると……でかい。何の毛皮だろう。

扉の前で直立不動のガウエインはともかく、一人掛けの籐椅子に座って足を組んでいるアーチャーも、外側に開けた窓に張り付いて夜空を見上げているナーサリーライムもやけに自然体でうらやましい。

「あのはぐらかされっぷりに気づいていないとは、ある意味大物だな。向こうには結局事情も目的も言わせていない」

それ絶対褒めていないよね。

「当たり前だ。むしろけなしている」

「くっ……とりあえず今することはわかったじゃないか。この国に馴染むことだ」

「で、そのあとどうするかは向こう任せという訳だな」

「具体的にいつ、みたいなことを訊こうと思ったなら逃げられたしな

あ

恐怖に駆られたかのようなあの走りっぷりはなかなか素晴らしかった。まさに脱兎のごとく、だ。猫だが。

「すぐに追えば私でも捕まえられたが」

「まあ、いいよそれは」

あの猫を捕まえたところで大した情報が得られないだろうということは、その前の会話でわかっていた。同じことを思っていたから、アーチャーも動かなかったのだろう。

「あー……この世界に馴染む、で思い出した。アーチャー。投影で作ったものって簡単に崩れたりとかしないのか？」

「しない」

「期間限定で消えたりは？」

「しないな。投影したら、壊れるまではそのままだ」

「じゃあ、昨日投影してくれた剣とかコインはどこに？」

「自室だが。あれは便利だな。君の傍にいさえすれば、手軽に入れる。見た感じ、入れられるものに制限はなさそうだ」

ああ、なるほど。物置と化する訳か。投影という魔術がある分、アーチャーは場所を取りそうだ。

もしかすると、私の私物も頼めば入れられるかな？

「浴室を作って欲しいんだが」

兵士が使う訓練舎の方にも、シャワー室らしきものがあったことはガウエインに聞いた。戦闘訓練に昼中付き合っていたと言う割に、汚れの一つもない輝く鎧のまま涼しい顔をしていた彼が使ったかど

うかは定かではないが。

ガウエインからリアルタイムで寄せられた情報によると、風呂らしきものはやはりないらしい。

ちなみに私は今は使われていないという使用人棟のシャワー室を使わせてもらった。第二皇子付きの使用人が少なすぎるので、その棟は使っていないらしい。シャワー室はかなり勝手が違った。蛇口の代わりに、壁に備え付けられたポンプの柄のようなものを上から下に下ろすと水が吹き出す。どうやって水を出す仕組みになっているのか不思議だ。お湯は出ないらしいが。冬場は辛い。

「あそこにか？ 君の入る風呂を？」

「そうそう、ユニットバスみたいな奴でいいから。マイルームなら私も入れるはずだし……どうやって入るのかわからないけど」

「入ろうと思えば入れるんじゃないのか？」

「なんで君たちは気軽にマイルームに入れるんだ？」

「さあ？ いちいち、君が出入りを許可しなくてもいいようにしてくれたんじゃないのか」

「そんな気を使うくらいなら、もうちょっと色々と気を使って欲しかった」

説明とか、説明とか、説明とか。こちらら元来マニュアル人間なのだ。まあ、それで異世界や役割に対する私の態度が変わった訳ではないだろうから、もう今更どうでもいいことだが。

「で、どうやって入るんだろう」

「入ろうと思うだけでいいだろう」

一般人の私にとっては、思うだけで事が成るというのもおかしい感覚だったが、マイルームに「入ろう」と思うだけで、確かに視界は切り替わった。

「マイルーム……？」

ゲーム中のマイルームはただの教室だったが、私が今いるのは、むしろゲーム中で見たアリーナのような作りだった。深海のような景色を、私は今、透明な正方形の箱の内側から見ている。透明な壁を越えて足を踏み出すと、同じ大きさの正方形が連なった。

音はしない。どんな遠くにも、何もなかった。

五感は鈍く、透明な壁は触れずに通り抜ける。

不思議な空間としか言いようがないだろう。敵とエンカウントしたらどうしようと思いつながら、外にいるはずのサーヴァントを呼ぶ。

「おーい、アーチャー？」

「何だ、マスター？」

真後ろから声をかけられてちょっとドキッとした。これも慣れるべきことの一つなのだろうか。ゲーム中も、サーヴァントの立ち位置は、戦闘以外大抵マスターの後ろだった。普通に横に来て欲しいのだが。

「お風呂」

「……意外と図太いと思ってるのか。どうしても風呂は入りたいんだな」

「日本人なら当然だと思うのだよ」

異世界なんて、私に免疫のない細菌の宝庫だろう。綺麗にしておきたいのは誰しも同意してくれるはずだ。

「わかった」

不承不承、というように頷くアーチャーに、私はつい謝った。

「ごめん。けっこうくだらないことに使って」

「そうでもないからくだわるんじゃないのか？ 背中を流せと言われたら断るから、気にするな」

そこまでは言わない。

本当に嫌ならにべもなく断るだろうと思われるその言葉に、少し安堵した。

アーチャーに浴室の作成を任せ、現実世界に戻る。

パタン、と窓を閉めたナーサリーライムが目に入る。扉の前のガウエインは一ミリも動いていなかった。

ならばなるほど、行った時と同じ場所に戻るのだろう。

英霊達のように瞬間移動っぽくは出来ないようだ、私はちよつとがっかりした。消えたり隠れたりにはいいが。

「ナーサリーライム」

「寝るの？」

呼ぶと、彼女は駆け寄ってきてほんとベッドの上に乗った。

やはり今日も一緒に寝るのかと思いつながらベッドにもぞもぞ入りこむ。

「あ、でもいつもだと拗ねられてしまつかしら」

「ん？」

子供らしく羽毛布団の上で足をパタパタさせながら、彼女が言う。言葉の唐突さは今に始まったことではないが。

「マスターは独り占めしたいけど、喧嘩は駄目でしょう？ マスタ

ーが困っちゃう」

勿論困るのでやめておいて欲しい。出来ればみんな仲良く。

「だから、当番にするのはどう？」

「当番？」

「マスターと一緒に寝る日の当番」

一緒に寝る相手の当番制！？

それは遠慮したい！ ナーサリーライムならともかく、ガウエインもアーチャーも男性だ。あ、でも女性とはいええ、赤いセイバーやピンクのライダーと一緒に寝たいかと言うと……うむ……微妙だ。あの豊富な、あるいは普通サイズの胸を見るにつけ、色々と思うところが……いや、それは言っても詮無いことである。やめよう。

「ダメなの？」

ナーサリーライムが小首を傾げて悲しそうにする。

「いつもナーサリーライムの当番ということでもいいと思うよ、それは」

「それはいけません」

ガウエインが口を挟んだ。

「夜の護衛は平等にすべきでしょう。マスターをお守りしたいというのは、共通のことでしょうから」

夜の護衛の話か、よかった！ 私と一緒に寝たいのかと思ったよ
！！

「……」

「それって呂布にも同じことだと思っ？」

「……、バーサーカー化した英霊の考えはわかりかねますが、恐らくは」

「じゃあ彼も入れた方がいいのかな」

護衛の当番制に。

「やっぱり当番にするの？」

「一緒に寝るのは、いいよ、ナーサリーライムの好きな時に一緒に寝れば」

護衛の話である。

夜の護衛を、常にナーサリーライムに頼む訳にもいかない。ガウエインはガウエインで、当番にでもしなければ毎日夜番とかしていそいだ。ではやはり、当番制にして頼む方が問題は少ないだろう。

「今のところ、一日目がナーサリーライム、二日目がガウエインで、じゃあ三日目がアーチャーか呂布？ 呼び出した順番にするとしたら、アーチャー、呂布か」

アーチャーは風呂づくりに凝っているのか、まだマイルームから出てきていないようだ。背後を振り返ってみたがいなかったのだからぶんそうだろう。

「では、今日は私が拝命致します。ごゆっくりお休み下さい」

ガウエインはそうだけ言うと、扉の前に戻った。

一晩中起きているつもりなんだろうなあ、本気で。

徹夜するだけなら私にも出来るだろうけど、敵　この場合、以前会ったようなこの世界の魔術師が襲撃してくることを考えると肝が冷える。それを前提に徹夜の警護は、とてもじゃないけど無理だ。

「……悪いなあ」

「いいの」

ナーサリーライムが両手を腰に当てて、お怒りのスタイルで首を傾げた。

「マスターが戦えたら、あたしたちのいる意味がなくなっちゃうわ」

そうでもない。

民族習慣も何も知らない異世界にいて、無条件で味方になってくれる相手。どれだけ救われているだろう。

ナーサリーライムはにこりと笑って私の手を引いた。

「寝ましょ。夢の中は、好きに出来るわ」

鐘の音で目が覚めた。

昨日は気にもしなかった、遠くで響く余韻。こんな微かな音で目が覚めるなんて、と自分に驚いたくらいなの。

除夜の鐘に似ている、けれどもここは日本ではない。

「……何この眠さ」

頭を上げようとした瞬間に、寝足りないかと体が訴える時間。ベッドの脇から手を出し、無意識に時計を探した。

「……、……ある訳ないし」

習慣って恐ろしい。

まあどうせ異世界だし、時間指定ですることがあるわけでもない。まあいいやともぞり、ベッドに潜り込もうとすると、遠慮がちにカーテンが開けられた。

「マスター」

囁くような声はガウエインである。

「何？」

「出発するそうですが」

「へ！？」

思わず飛び起きてベッドから滑り降りる。

ガウエインは私を避けてベッドから二歩ほど引いたところで足を止めた。

「出発するって何？」

「もうすぐ出発するので、起きているかとディキが様子を見に来ました」

「もうすぐぐ？」

「はい。三の鐘が鳴る頃には、と」

「それっていつ」

「今二の鐘が鳴ったので、その次ですね」

つまりそれっていつ？

時間があるのかないのか。慌ててはみたが、顔を洗って身支度を整えれば、私の準備は完了だ。もしかして食料も持参していかなければならないのだろうか。

「だとしても、狩りか何かで何とかなるでしょう。一日中竜の上だと少し辛いでしょうか」

その問題もあった！ 心の準備に少し時間が必要だ。

だが、時計があつたとして、合わせるべき時間がわからない。地球でだって、国によってズレがあつたのに、根本の考え方から違いそんな異世界でどうすればいいだろう。ていうか時計あるんだろうか。

「どこに集まればいい？」

「昨日の訓練舎の方だそうです」

「……案内お願いします」

自分で行ける気はまるでしない。

「マスター」

「アーチャー！ よかった、時計をもらえるだろうか」

「どこまでも便利屋だな」

やれやれ、というようにアーチャーが額に手を当てて言う。

「これを使うといい」

と、アーチャーが差し出したのは懐中時計だった。皮紐でつながれた、くすんだ銅色の懐中時計。中身を見てみると、私も知っている形の時計だった。三時すぎ。

「え、これは？」

「アルケイドの使っていたものを投影したものだ。本人に見られるとまずいかもしれないから、一応隠しておけ」

「……ええ？ アルケイドさんの持ち物？」

こんな現代ばりの懐中時計が？ あ、でも見るとぜんまい仕掛けのようだ。そりゃそうか、時計やバッテリーなんてさすがにあるまい。あつたら……いや、あつても不思議はないか。魔法で召喚とか、いかにもありそうだ。

「だが、時計に関してはあまり多くないが市中でも見られた。君の知るものとはほぼ同じ考え方と見て間違いないようだな」

アーチャーは何か考え込むように黙り込んだ。

私は身分証明のメダルと一緒に服の中に入れるため、紐と一緒に括りつけながらふと思いついてもう一度時計の中身を見た。

三時半。

「おはよう、マスター。今日は早いよね」

ベッドから飛び降り、パタパタと窓に駆け寄ったナーサリーライムが両開きの窓を外側に向かってバツと開けた。

星の见えない暗い夜空。どう見ても夜明け前だ。もうすぐ白んでくる頃だろうか。

「……本当に同じ考え方？ アーチャー」
「働き者だな」

そういう問題じゃない気がする。もし、この起床時間が普段のものだとしたら……それは非常に恐ろしい想像だ。

「単に移動のために早朝に起こしたんだよね？ そうだよな？ そうだよな？ そうだよな？ そうだよな？」

そう、今日はドラゴンに乗って王都に行かなければいけないから早い時間だったのだ。前日に言ってくれなかった理由は、考えないことにしよう。よく起きられた自分。

覚えているだろうかと試みに自分で道を考えてもみたが、やはり途中でわからなくなりガウエインに案内してもらいながら、見覚えのある訓練舎の方にそろそろと移動する。

「おはようございます」

皇子一行なのだから、ずらりと並んだ兵を連れていくのかと思いきや、そこに立っていたのは皇子とディキとエンリと……他三名だった。名前と顔は……駄目だ、一致しない予感がする。一人ずつならいいのだが、複数いて順次自己紹介されると困る。覚えなきやいけないだろうか。

みんな男性だし………そういうえば異世界に来てから女性という女性を目にしたことがない気がする。食堂のおばちゃんくらい………？

「魔術師のテイだ。王宮内での護衛を頼むことにした」

皇子殿下が一言そう言うと、知らない顔の人間が「えっ」という

顔をした。私を見て、異論ありげに殿下の顔を見る。

「アルケイド殿ではないのですか？」

渋い声で質問をしたのは初老の男性だった。比較的年配のおかげか、私に配慮している風がうかがえる。

「アルケイド殿のお墨付きだ」

デイキが私を指して言った。

「隊長、しかし……」

更に反論しようとした初老の男性を、手で制したのは殿下だった。

「構わん。向こうも王都で手出しをするほど愚かではないだろう」

それってつまり、私の力はどうでもいいということだろうなあ。私が彼にあまり信用されていないのかとも思うが、白み始めた空に目を細める皇子殿下を見ていると、どうもやる気がないだけのようにも見える。どうでもよさそうだ。

目に入れないようにしていた緑の物体が動いた。

殿下の前にどすりと頭を落とす。殿下の前に鼻先を差し出しているようにも見える。

「おまえの竜はかわいいな、エンリ」

ほんのわずかに目元を和らげ、殿下が差し出された鼻先を撫でてやっている。竜の風圧でふらつきもしない辺りは、さすがである。

……体重の問題かな、と思わなくもない。殿下が太っている訳では

ないが、身長も筋肉の付き具合も、私とはまるで違う。

「私もおまえのように天恵があつたなら、竜騎手になるのも悪くなかつた」

「御冗談を」

エンリは軽く流していたが、近くにいた私は気づいてしまった。殿下は割と本気の目だった。

何かこの、就職を控えて諦観じみた感じ……私に通じるものが……。

いや、皇子殿下にとっては、皇子という立場は選べもしないものだろう。就職難よりよほど選ぶ幅は少ない。というか、最初から決まっているようなものかもしれない。それにしても 世の中の皇子ってみんなこんなものだろうか？ 諦めて流される感じでやっていけるんだろうか、皇子って。兄弟で争っている雰囲気といい、血なまぐさい印象を受けるのだけれど。

流されていたら死ぬんじゃないだろうか？

「では行くぞ。乗れ」

まるで戦に行くような物々しい勢いで、居並ぶ随員メンバーがザツと敬礼をした。出遅れた感のある私は、さっさと歩き始めた殿下の後についていく。そして否応なく緑の鱗が迫ってきた。

「!?!」

考えてみれば自分で乗れない。鱗の凹凸に足を引っ掛けるようにして器用に上に登っていく殿下を見送りながら私は愕然とした。梯子とかつけないんだ!?

と思つたら、そんな私の思いを汲み取ってくれたのか、エンリが

何か円筒形の大きなものを抱えて先に竜の背に登って行った。そうやって登れる時点で驚異的なのだが。そして上から縄梯子を垂らしてくれる。

兵士さんたちはそれで上るようだ。超人的な能力の持ち主ばかりではないらしい。ほっとしてしまった。

「マスター……大丈夫ですか？」

へっぴり腰で縄にとりついたら、ガウエインに心配された。抱き上げて連れて行ってくれる気かもしれない。が、安全ベルトなしのジェットコースター並みのスリルだ。それはそれで遠慮したい。

地道に頑張つて竜の背の上に登った。下は見ない、下は見ない。いつの間にか消えていたサーヴァント達が、竜の背に辿りついたや否やフツと私の背後に現れた。

「……」

なんかずるい。

彼らの身体能力からして、私ほど苦労することはないだろうとわかっていても、瞬間移動みたいにして来られてしまうと、あの苦労はなんだったのかと思ってしまう。

えっちらおっちら登っていたのが私だけでなく、兵士さん達もだったことが唯一の救いか。勿論私なんかよりよっぽど早かったけど。それでも親近感を抱いてしまいそうだ。

そして変わらず竜の背にへたりと座りこんだ私だったが、周りには全員なぜか立っていた。

「……危なくないの？」

「なんだ、怖いのか？」

からかうように声をかけてきたのはエンリだ。

「俺は竜騎士だぞ？ 絶対に落ちないし、風圧もあまりないはずだ。高度が上がると温度も下がるから、気温調整だっしててる。昨日だっって快適な乗り心地だっただろう？ まあ、飛び上がる時だけは少し気をつけてもらわないとダメだけどな」

「すごい……」

竜騎士って、下手な魔術師より万能なのではないだろうか。

「それなのにどうして二級なんだ？」

「魔術師に聞かれるとは思わなかったなあ」

からから笑いながら、エンリは軽くとんとんと竜の背を足で叩いた。

ぐつと竜の頭が持ち上がり、その巨大な翼が広げられる。巨大な足から繰り出される脚力と共にバサリと下方へ向かってはばたく翼の力で、一気に地面は遠のいた。

「それらは全部、竜の力だからさ。俺は竜から魔力を借りて、竜の出来ることを少し手伝っているだけだ。奴らが絶対にしたくないことを、俺は出来ない。出来るのは、こっやって人を乗せて飛ぶことくらいだな。竜は竜で、自分の魔力を上手く扱えないから人間の手を欲するっっていうのもあるが」

「……竜は自然繁殖する種じゃないっってこと？」

だったらちよつと安心するんだが。

「いや、そういう訳じゃないな。むしろ竜の繁殖に成功した例を俺は知らない」

エンリは不意ににやりと笑って言った。

「だから、決まった竜騎手のいない竜に会ったら気をつけるよ？
野生に生きる奴らはまさにモンスターだ、とてもじゃないが普通に
戦おうとしても相手にならん」

「……」

固まった私をしばらく面白そうに見ていたエンリは、隣りに立つ
ガウエインを見やって肩を竦めた。

「ま、そちらさんがいれば何の問題もないだろうけどな」

「……それは、わかりかねますが」

控えめにガウエインは答えたが、まあ、そうだろうな、と思う。
竜とか出てきたら、とりあえずガウエイン卿に頼むことにした。

「ところでエンリ、王都までってどのくらいかかるの？」

竜が高度を変えず滑空を始めた辺りで、ようやく落ち着いてきた
私は尋ねてみた。座って休憩している兵士さん達も多くなってきた
頃である。私は、最初にへたり込んだ四つん這い状態から、ちよっ
と腰を下ろした状態になっただけだが。

「丸一日ってとこだな」

丸一日、この状態でいることが決定した。

「ああでもよかった一日で……日をまたぐ時はどうするんだ？」

「それは降りるさ、竜は一日中でも飛んでいられるが人間はそうも

行かない」

「トイ……。その、催した時は？」

「降りる」

エンリが下を指し示した。つられて下を見る。

遠大な森と大地、はるか遠くの海。簡易トイしなんてあるはずもない。

「……野性的」

いつそ泣いてしまいたい。

第十一話 道中？

竜がぶわりと旋回するようにして降りたのは、山麓の開けた場所だった。木を何本かなぎ倒して着地する竜に、この生き物自体もはや災害だなと舌を巻く。

予想出来たことだが、その背中から降りるのにも手間取った。最終的にアーチャーによって引きずりおろされた私に、エンリが声をかけてくれる。

「立てるか、テイ？」

「何とか」

一度目の小鹿状態よりはマシだった。エンリは呆れたような笑いを漏らしたただだったが、名前と顔の一致しない兵士さんたちはあからさまに眉をひそめた。

「頼りない……」

「アルケイド殿は本当にこんな者を？」

「そもそも魔術師など信用ならん」

そのひそひそ声、聞かせようとしてますか。いやらしいですね。

最後の人、自分の陣営の魔術師も含めて全否定だし。

「黙らせますか？」

背後にいた白い騎士が眩しいほどの笑顔で言った。そんな顔で物騒なことを言うのもやめてください。何で黙らせるんですか。剣で？

竜の背の上にはいた時も微妙に続いた地味な嫌がらせに、確かに若

干衝撃を受けているけれども、それだけだ。竜の上でどつかれたら、恐慌状態に陥るあまり泣いてガウエインをけしかけるだろうが、地面に降りた解放感の前にはたかが嫌味など大した話ではない。

「それがいいわ、マスター。竜の上に乗ったときに落としてしまいましょう」

ナーサリーライムが可愛く両手を叩いて、更に物騒なことを言った。それがいいわと同意した風から考えて、私の思考を読んだのだろうが、果たしてどう曲解したのだろうか。

「アーチャー、この二人……」

止めてよ、という念を送ると、アーチャーはやや黙って考えた後、二人に向かって言った。

「マスターは軽い嫌がらせだと考えている。なら、軽い嫌がらせをし返せばいいのではないか？」

ガウエインは黙ったが、ナーサリーライムは目を輝かせた。

「どうしようかしら」

「軽い、だからねナーサリーライム。そこ重要だから軽視しないよ
うに」

「わかっているわ、マスター」

本当に？

「かなり不安」

アーチャーは黙って頷いた。

「いいんじゃないのか。マスターを侮辱した点について相応の報いだ」

「狙ってた！？ 穩便に済ませようというマスターの意を汲んで欲しかった」

英霊はもしかして、かなりプライドが高いんだろうか。だとすれば、いかにこんな普通人のマスターでも、マスターであるからには、馬鹿にされれば腹も立つのかもしれない。

しかし、何せ、こと戦闘において、あるいは緊急事態において、私が何も出来ないのは事実だ。あの人たちの言う役には立てない。それで馬鹿にされるなら当然のことだ。そんな私に従わなければならない英霊たちには、申し訳ないことだった。

「……………」

顔を上げると近くに立っていたアーチャーと目が合った。

「……………」

褐色の顔に複雑そうな色を浮かべて私を見下ろしている。口をへの字に曲げているのだが、何かを話そうとするつもりはないらしい。はて、と思つてガウエインの方を見ると、またしても目が合った。彼はわずかに苦笑を浮かべて、私の視線を流す。

「おーい、休憩終わるぞー。乗ってくれ」

エンリの大声に、私は立ち上がるうとしてふらついた。

今度は、問答無用でガウエインに抱えあげられる。竜の背に乗る

までの上下運動は無心で耐えた。竜に対する耐性がついた……とい
うより、数奇な出来事に対する耐久が高くなってきたのだろうか。
嬉しくないステータスアップだ。

「まずい」

私の後、つまり最後に梯子を回収しながら登ってきたエンリが肩
間にしわを寄せて呟いた。

何がまずいのかと彼の視線を追うが、私には問題のある光景には
見えない。ただ静かな山並みがあるだけだ。

「匂いがする。妊娠した野性の竜だ。　　チツ、なんでこんなところ
に……」

母は強し。そんな言葉が頭をよぎった。

野性であろうと、妊娠中、もしくは子供のいる母親は神経質にな
る傾向にある。それは竜にさえ共通であつたらしい。

「出来るだけ刺激しないように移動します。遠回りになりますが」
「任せる」

エンリと殿下の会話を聞きながら、私はじつと辺りに耳を澄ませ
てみた。手の下を感じる竜の呼吸。

森からは、音がしない。

「イリイ、言うことを聞け。すぐに飛び立つと狙われる。ゆっくり
だ」

忙しげに移動したエンリが、嫌がって頭を振る竜と何か会話して
いた。

「すぐにも逃げたい竜を、今説得しているようですね」

ガウエインがあらぬ方向を見ながら言った。静かな森の方にその視線は向けられている。

「見えるくらい近くにいますか」

「はい。恐らくマスターにも視認できます。狩りをするように、隠れている」

獲物はこの竜ですか、もしかして？

なぜ狙われるんだ。

「大きいからでしょう。乗っていてわかったのですが、竜はあまり小さいものを気にしない様子がありますから」

「人間が獲物になることはまずないってこと？」

「そうですね。背中に乗せていても、恐らく竜騎士以外は認識出来ていないでしょう。獲物も大きめの、それこそ……まあ、こちらにしか生息していないような　マスター、気を付けてください」

咄嗟のガウエインの忠告と、私が森に潜む竜の姿に気づいたのはほぼ同時だった。

森の中に、キラリ、と光るものを見た気がした。こちらに向けられた牙だ。これで噛み砕くのなら、なるほど、人間など獲物にならないだろう。

「マスター！」

フツと伸ばした手が掴むものが何もない。竜の巨体が傾き、竜騎士の魔術によってカバーされていたはずの私の体を、衝撃が跳ね飛

ばしたのだと気づくには時間が必要だった。

肩と肘を抱くように支えられ、思っていたような衝撃もなく地面に降りる。恐らく一番近くにいたガウエインが受け止めて下ろしてくれたのだらう。だが、その上から影が落ちる。竜が私達の上に倒れて来ようとしているのだ。

その瞬間、剣を抜こうとしたガウエインの手を咄嗟に止めていた。何を考える間もないので脊髓反射だったが、後から考えると我ながら正しい行動だと思う。まともに地面に立つことも出来なかつた。せに、私は咄嗟に、竜を真つ二つにしようとしたガウエインの手を止めたのだ。

七枚の濃いピンクの翅のようなものが広がり、竜の巨体を支えていた。アーチャーが熾天覆う七つの円環を展開したらしい。でなければ竜の巨体の下敷きになっていたことは必至だ。アーチャーに感謝である。

竜は慌てたように体を立て直し、新たに現れた竜の体を体当たりで退かした。と言っても、同じような体積のぶつかり合いだ、どすりと全身が震えたが、お互いの間に出て来た隙間はわずかなものだった。

だがそのわずかな間に、竜は翼をすばめ、その後ろ脚の筋肉をたわめた。

まるでジェットが発射するかのように空に飛び立ち、物凄い勢いで逃げて行った。なりふり構わずという言葉が似合っている。

「……あ」

妊娠しているらしい竜の方もドストスと竜を追いかけていった。腹部に目立つたふくらみがあるためだらう、やや不格好ながら、飛んで追いかける心づもりのようで、翼を広げて助走をつけ、飛び立った。が、墜落した音が聞こえたので、恐らく失敗したのだらう。妊娠した竜は飛べないらしい。

危機が去ったのは、幸いなことだろう。しかし、遠のいた竜の影が戻ってくる様子はない。

「……うっわ、どうしよう」

知らない山中に、置いてけぼり。近くに人の住むような場所があるかどうかもわからない。私を連れてきた竜を追いかける訳にもいかない。戻ってくるかどうかは、わからない。ここには携帯も何もない。連絡を取る手段がないのだ。

完全に遭難だった。

「大丈夫よ、マスター。なんとかなるわ」

へたり込んでいる私の頭を、ナーサリーライムが慰めるように撫でてくれた。

「だってあれ絶対戻ってこないよ……」

妊娠中の竜に接触したような、危険ゾーンだ。竜で戻るのも危険、生身はもつと危険だ。ぼつと出の魔術師一人のために戻ってきてくれたりするはずがない。エンリの言葉を考えると、本来ここに妊娠中の野性の竜などはいないはずで、もつと安全なルートだったはずなのだ。そう考えると、作為的でもある。とするなら、皇子を乗せているのだから、その安全が優先だ。竜は絶対に戻ってこないだろう。

竜の上に一人でも英霊が残っていてくれれば、皇子を護ってもらうことも可能だったかもしれないが、今は全員ここにいる。

早く合流しなければならぬだろう。手段なんてないのだが。

「そう悲観するな。幸い食料も豊富そうだ。飢え死にすることはな

いだろう。夜露をしのぐ方法なら、テントでも投影してやる」

「テントなのか」

「移動するだろう？ テントで十分だ。それとも点々と家を作っていく気かね？」

そんなことをしたら、後世の歴史家さんにナスカの地上絵並みの驚きをもたらしてしまう。不本意だ。

「まあ……夜は少々、厄介かもしれないがね」

「それは、私がどうにかしましょう」

「いや、今日は私の当番なんだろう？」

あの場になかったはずだが、アーチャーも聞いていたらしい。

「非常事態です。無理をしてマスターに累が及ぶ可能性を思えば」

「休む者も必要だろう。心許ない、と言われるのは心外だが、自分の分はよく知っている。何事かあれば呼ぶさ」

「わかりました」

統率力のないマスターに代わって、自分達で話をつけてくれる彼らはいいいサーヴァントだ。

「こんな森、初めて入ったかもしれないな」

日本は森の多い土地だという。現状どうなっているか知らないが、自然豊かな土地が多いのは確かだろう。

かといって、私は現代日本の、一応都会圏の出身だ。といっても家の周りは田んぼだらけだったが。生い茂った下生えや太い木々の居並ぶ圧倒感に、覚えはない。ナーサリーライムの名無しの森くらいだろうか。だがあれも、あまり現実味がなかった。

「虫とかいけませんように」

虫よけスプレーとか持っていればよかったなあと思う。たとえそれが蚊であろうと、油断は禁物だ。蚊は感染症の媒介である。異世界にそれらしいものが流行っているかどうかは知らないが、流行っていないという保証もなければ、感染しない保証もない。もっと厄介な虫や、あるいは猛毒を持つ動物もいるかもしれない。触ったらかぶれる植物もあるかもしれないし、口にしたら軽く一回死ねる木の実もあるかもしれない。そしてそれらはきつと私などには見分けがつかない。

考えてみれば、不老不死というのもよくわからない。毒で苦しめぬいた末に死んだとして、その一歩手前ぐらいの状態に生き返り続けるとかいうのだったらどうしよう。さすがに世を憐んでもおかしくない。というかそれって果たして生きていると言えるのだろうか。その際の救済措置はあるのかなのか。

「うん」

「考えすぎだマスター」

アーチャーに頭をはたかれた。

「考えたところで現状が変わる訳ではないぞ」

「だよね……」

しかし、実際何か食べなければならぬとして、毒は気になる。

「毒物とかがってわかるの？」

「わからんな。ましてや異世界のものだ。専門家なら何かわかるかもしれないが……」

毒物の専門家。

適役が、まだ呼び出していない英霊の中にいることに気付いて、私は手を打った。

「ロビンフッド」

自然界の毒に精通している、森の王。森の中でゲリラ戦を繰り返したという彼なら、サバイバル経験も豊富そうだ。軍用に関与された化学兵器なんかと違って、こんな森の中は彼にぴったりだろう。緑の衣装を身にまとった、やや垂れ眼気味の青年は、初めからそこにいたかのように、木々の間に馴染んでいた。

ロビンフッドはガウエインとアーチャー、そして私の後ろにいるナーサリーライムを視認すると、肩を竦めてみせる。

「これまた、面倒そうな顔触れ」

たぶんこれから召喚する英霊はみんなそう思うのだろうなと考えながら、ファーストコンタクトを試みる。

「初めまして。えーと、たぶん金髪から聞いてるとは思うんだけど」

「ああ、大体は聞いている。アンタが俺のマスターってことでしょ？」

「それで、そっちのお歴々とはお仲間ってこと」

思った以上に軽い返答で、ロビンフッドはひらひらと手を振った。軋轢は……彼の方には作る気がなさそうではっきりとする。英霊同士の対立は勘弁してもらいたい。

「戦力としては必要なさーな気もすんだけどさ。俺には俺の役割がある、てことでひとつ」

「聖杯戦争がないことについては？」

「敵はいんでしょ？ 厄介そうなのが。一対一で顔の見えてる戦いよりかはよほどいい。俺のマウンドだって気がするね」

英霊つてみんなバトルジャンキー？

存在自体、戦闘のために生まれたと言っても過言ではないだろうから、仕方のないことかもしれないが。

「で、今は？」

「今は……遭難している」

「マジかよ」

戦う以前の話で申し訳ない。

「ふーん。食料には困んなさそうな森だなあ……。肉食獣も多そうだけど」

「……。肉食獣？」

「足跡とかで、どんなのがいるかを見るのは基本だろ。ほら、アレとか何？ 超獣決戦？」

彼が指したのは、先ほど竜と竜がぶつかり合っていた地点の足跡である。足跡というか、地面がえぐれて激しい凹凸が出来ている。木も何本か倒されて転がり、まるで嵐が通った痕だ。

「あれは、竜だよ」

「へーそう、竜……」

胡乱な口調で呟いたロビンフッドが、あからさまに嫌そうに顔をしかめた。

「竜なんていんのかよ。ありゃ相当でかいぞ、よく潰されなかったもんだ」

「ほんとうだなあ。あれに乗ってたんだ」

転落死とか圧死とかにならなかったのはガウエインとアーチャーのおかげだ。

妊娠した野性の竜が襲ってきて、その衝撃で自分だけ跳ね飛ばされたのだということを手短に話す。

……私だけだったということは、もしかして他の人は衝撃に身構えていたということだろうか。敢えて私だけポイしたなんてことはないだろう、たぶん。竜に乗っている以上責任者はエンリのはずだし。エンリは一応歓迎してくれていた。

「……竜って乗るもんなのか。そうか。それで置いて行かれたんですか」

「そう」

「なるほどねエ……それじゃ最初にやることは決まってるな」

「何？」

「妊娠した野性の竜の所在ですよ。遠くに行つたならよし、近くにいるなら警戒しなきゃなんねえでしょ。今の話だと、早く走れない上、飛べないってんなら、妊娠してるっていうことから考えて、その辺に潜んでる可能性が一番高い。うっかり遭遇しちゃって、暴れ出した相手に潰されたんじゃ目も当てらんねえっしょ」

そりゃそうだ。いくら人間が獲物にならないといっても、休憩を邪魔すればぶつたり潰される可能性もあるのだ。

「じゃあ、その探索は俺がやるとしますか」

「なんか悪いね、召喚したばっかなのに」

「気にしないでくださいよ。一人のが楽だし。好きに移動してくれ

ていいて、マスターの居場所はわかる」

そう言って木々の間に消えたロビンフッドを見送り、ふと三人を振り向いた。

いずれも、竜と言えども倒す力のある人たちである。先ほどの小競り合いから見て、ガウエインは勿論、アーチャーも、恐らくナーサリーライムも問題なく竜討伐とか行けそうな気がする。

え、このメンバーに混じってる私って一体……。

「場違い」

「いや一言でまとめるな。マスターだろうが」

「ああ……そうだったよね……何の因果か……」

とりあえず今晚の寝床でも確保しようかと考える。

「場所は……まあここでいいか、テント作って、アーチャー」

「では、私は食料を調達してきましょう」

ガウエインがガラティーンを取り出して言う。その剣で一体何を狩るつもりなのだろうか。

「ちょうどいい鹿か熊でもいれば」

意外と野性味溢れる騎士だ。

「じゃあ、私は探検してくるわ。食べられそうなもの、あるかしら」

ナーサリーライムは、楽しそうに駆けて行った。止める間もない。まあ、彼女も力ある英霊だから、心配なんて余計な話だろうが。

……彼女のとってくるものは後でロビンフッドに見てもらおう。

「マスター、マスター」

「うお!?!」

フツと背後に現れたロビンフツドの呼びかけに、思わずうるたえて距離を取った。

「見るよこれ」

ロビンフツドが見せたのは、いつか城下街の軒先で見たようなでろんとした蜥蜴。否、羽がついている。竜だった。

サイズはずいぶんと……小さい。

尾を掴まれてぶら下げられているが、バタバタと暴れて地面に逃れると体を起こし、抗議するようにキィと鳴いた。

「ちっさ。 ってこれもしかして」

「あっちで出産してた」

マジか。

「一匹?」

「他は散り散りになったみたいだな」

「えっそれってまずくない? 母親は?」

「さあ? 少し離れたところに飛び立ったような痕があったな」
「……………」

どこに行っただんですか。

地面にちょこんと座って私を見上げる子竜と目が合った。大型犬サイズだ。

あまり可愛らしくはない。成体の竜に比べれば、丸まるとした体

型ではあるが、つぶらな目は金色の縦細い瞳孔で、爬虫類らしい趣だ。牙も爪も立派なもので、動きにもフラフラした感はない。これなら狩りも出来るだろう。

「なんでこんなに鱗に縁があるんだろう……」

「なんだ、爬虫類は苦手でしたか。なら捨ててきましようかね？」

「いや、それも可哀想だろう」

「何、構やしないでしよう。見たところ食物連鎖の上の方だ。子供とはいえ、卵ちゃんって訳でもないんですしね」

竜って、生まれ落ちたその瞬間から一人で生活していけるのか。
神秘だ。

「……」

そしてこの子竜はなぜさっきからまじまじと私の顔を見ているのだろうか。

インプリンティングとかそういうのだろうか。一人で生活している竜にもあるのか、そういうの。

「ありゃあ、マスターの方を気に入ったのか？」

「ガウエインとかじゃなく？」

「いや、ないっしょ。あんたの顔を見てるじゃないですか」

そりゃそうだ。そして今ここにガウエインはいない。戻ってきたら、この子竜が何を思っているかも聞けるだろうか。母親代わりにされても困る。

「うーん」

ぺたぺたと近づいてくる子竜から一定の距離を取りつつ、ちよつと困った。

「そうしてると苛めてるみたいにしが見えねーんですがね、マスター」

「なかなか触るのに勇気が……噛まない？ うわ」

業を煮やした子竜が私の服の端をぱくつとくわえて引き留めた。牙で穴を開けないように、器用に噛んでいる。かなり賢そうだ。

「頭を撫でろって言ってんじゃないんスカね」

「そんな犬みたい扱いでいいのか」

怖々頭を撫でてみる。子竜は目を細めた。嫌がる様子はない。

「連れてくかどうかは別として、マスター。あっちの方に、人の手の入った部分がありましたよ。人里が近いかはわかりませんが、行くなら向こうじゃねーかと思いますが」

「そうか。ありがとう。じゃあとりあえず……どうしようかなあ。

出発は明日にしようか。明日、案内してくれる？」

「……ああ構いませんよ」

一瞬怪訝そうな顔をしたロビンフッドに、ああまたやったと私は思った。

なぜ会う英霊はみんな命令され慣れているんだろうか。マスターからの指示を当たり前前と思っている節が強く、柔らかい言い方をすると戸惑った顔をする。マスターであるからには毅然としていなければならぬのだから、やはり荷が重い。

「……あーまあそういうことなんスけどね。そんな風に、ものを頼

むのを悪いなあという態度をとられると、正直やりにくい……かも？ まあそれもマスターの特性っちゃそうなんですよーけどね、こつちとしちゃ慣れるしかないことなんで別にいいっつーか、もうちよっところ傍若無人に振舞ってくれてもいいっつーか」

ロビンフッドは茶色の頭をがしがしと掻きながら言葉を選んでくれているようだ。

「別に俺らの顔色うかがわなくてもいいんよ、アンタは」

アーチャーからも指摘された。彼らにしてみれば、実に面倒くさいマスターだろう。しかしこの性格が一朝一夕に治らないのも事実だ。

「……善処する」

「戻ってきたぞ」

アーチャーが私に注意を促した。テントはいつの間にか出来ており、その前にぐったりした鹿が横たわっている。既に血抜き、内臓抜きの段階は済んでいるように見えた。どこでやってきたんだろう。川でもあったんだろうか。

それにしても大物過ぎるよガウエイン。しかし、既に命はないよ。うなので御冥福をお祈りするしかない。熱心な仏教徒ではなかったが、手を合わせる。

その隣には、ナーサリーライムが楽しそうに果物や茸類、山菜のよくなものまで山ほど並べていた。

「……大量だね」

「いっぱい食べてね」

私の胃袋には限りがあります。

まあ、みんなでありがたく頂こう。英霊は食事をしないとアーチャーが言っていたが、彼らはたぶん付き合ってくれるだろう。

懐から時計を出して見てみると、ちょうど昼だった。

「……ところで、鹿の解体って？」

「騎士の心得です」

騎士の心得って万能であることなんだろうか。

「……いえ、そうではありません。主人に世話をかけないため、自分の身の回りのことが自分で出来るといえるのは、最低限のことです」

ガウエインはその言葉がさも控えめかのように言ったが、現在自分のことが自分で出来ない身としては耳に痛い限りだ。

ていうか鹿を捌くのは、自分の身の回りのことのために必要なんだろうか。

「……蜥蜴じゃないんだね」

「野性の蜥蜴のようなものも走っておいりましたが、お望みなら」

「いや！ むしろ鹿のが嬉しい」

鹿肉はカロリー低めで鉄分多め。女性に嬉しいヘルシー食品らしい。食べたことないけど。

こっちでもそうだろうか。

「そんじゃ、料理の方は手伝わせてもらうかね」

「あたしもやるわ」

「……てかアンタ、その山菜……ちょっと待て、まず食べられるもんかどうかを見せろ」

「美味しそうですしょ？」

「美味しそうですかどうかじゃなくてだな……。英霊だってこんなもん食べれば毒が……。おい混ぜんな！」

「うるさいぞ、騒ぐな」

アーチャーがフライパンやコンロといったものを手早く投影しながら、騒ぐナーサリーライムとロビンフッドに言う。

「賑やかだ」

「そうですね」

実に鮮やかな手さばきで鹿の皮を剥ぎ、アーチャーが置いたらしいビニールシートの上に切り分けた肉をポイポイ並べながらガウエインが同意してくれた。切るのに使っているいいサイズのナイフは、ガウエインのものだろうか。同意してくれるのは嬉しいんだが、非常に大変そうな作業中だ。返事してくれるとは思わなかった。

「手伝わなくていい？」

「いえ、大丈夫です」

にっこりと笑顔でお断りされた。

まあ、そりゃそうか。私が手伝えるところしたら料理の方だろう。

即席キャンプのようになって、ちょっと楽しい。

「キィ」

私の後ろで、ガウエインの方が気になっているらしい竜が一声鳴いた。

……竜について忘れてた。いや、忘れてたかっただけというのが本音だろうか。

「君も食べる？」

「キィ」

肉を見て目を輝かせている。……うん、間違いなく肉食のようだ。立派な牙がある訳だし、予想できたことだが。

「ガウエイン」

私の意図を察してガウエインが投げた腿肉を空中で見事にキャッチし、そのままがつがつと食べ始める竜。その姿はちょっと近寄りづらい。

下処理を終えた肉を使い、ロビンフッドとアーチャーが手分けして料理をしている。ナーサリーライムはサラダを作っているようだった。

手伝おうと思ったらほとんど終わっていた、という感じである。彼らは英霊のくせに、なぜこんな日常的なことで手際がいいのだろうか。謎だ。

「マスター」

アーチャーが、恐らく投影だろうと思われる簡易な椅子を指して私を招いた。

「食事は座ってするものだ」

「あ、うん」

いいんだろうか、と思いつつ、完全に用意された鹿肉の香草合え、スープ、サラダなどを前にして手を合わせる。野外のくせにやたらと手の込んだ品数である。

私何も手伝わてないんだが。アウトドアなんて何せかなり久しぶりで、それも子供の頃の町内会とかで連れて行ってもらった覚えしかないし、アーチャーが簡単に組み立てたテントの仕組みもよくわからないくらいだ。

「いただきます」

美味しいし。

釈然としないが、普通に美味しい。調味料とか使ったんだろうかなさそうなのに。

「全然、なあんにも」

あつさりとロビンフッドが言った。カトラリーの似合うガウエインと違い、彼は洗練されたとは言い難い食べ方だ。あつという間に目の前のものが消えていく。かといって、さほど汚らしい印象は受けない。

「自然の味って奴かねえ。ま、食いものなんて旨けりゃ何でもいいけど」

「食事が旨いのは最低条件だろう。マスターにしてみればな」
「ふうん？　そういうもんか」

思いがけず楽しい食事の時間を経て、竜の話を書くことにした。といっても、ガウエインに聞いてもらうのだが。

キィキィと鳴く竜の話にしばらく耳を傾けていた彼は、私に目を向けて言った。

「母親が操られているそうです。恐らく魔術師に」

「……うわあ。てことは、あの私たちが乗っていた竜を襲ったのは

故意で、母親は彼を生んだ後、もう一度あの竜を追いかけた可能性があるってことだね」

「そうなります」

悠長にキャンプとかしている場合じゃなかった。

「それで、母親を助けて欲しいというわけだ」

「ええ、そう言っています」

非常に悩ましい話ではあったのだが、私はナーサリーライムに目を向けた。移動手段としての最終兵器が、彼女にはある。きっと命綱なんてないだろう。こっちの世界における魔術のように、騎乗する人間の命を保障してくれる何かなんて、きっと何も無い。

「……………。飛べるもの、召喚してくれる？」

彼女はにっこり笑った。

第十二話 道中？

ブオン、と激しい羽音を立てて何も無い空中から現れたのはグリフォンだった。巨大な竜を見た後では、「あ、普通」と思える程度の大きさ。鷲の頭と翼、獅子の体と蛇の尾を持つグリフォンだが、ジャバウォックと同じように、全身が赤一色の、本当に生き物？と首を傾げるような姿だった。一声もなくナーサリーライムの前に舞い降り、頭を垂れる。

「……この上に乗るとすると……一人？」

「マスターだけで乗った方が、早いかしら」

わお。私だけ綱渡り。

「死んだらごめん」

「おいおい」

諦念の混じった私の言葉に、ロビンフッドが突っ込む。

「落ちてもグリフォンが拾うから大丈夫よ」

ナーサリーライムが、さほど嬉しくもない太鼓判を押ししてくれた。

「飛ぶことにしたのはいいけど、竜の場所がわからないんだよね」

「子竜ちゃんを連れていけば？」

「マスター。先導してくれるそうです」

キィ、と元気よく顔を上げた子竜が羽を広げた。

バツと飛び立つ姿は、大人顔負けである。

「飛べるんだ」

「……子竜ちゃん、行っちゃおうよ？」

「おっとそうだ。じゃあありがとうナーサリーライム、借りるね」

急かされた勢いに任せてグリフォンの背に飛び乗る。そうでもない心がなかなか決まらないからである。

意外と柔らかい獅子の毛並みが手に触れた。掴まる場所はないが、胴体は足で挟める。

「首に掴まって」

ガウエインが私の上体を倒させ、安定した体勢を取らせた。

「では、気をつけて、マスター」

英霊たちは消えた。マイルームの中に引っ込んだらしい。便利だ。羨ましい。

「私もマイルームの中に引っ込んで移動してたらいいのに……できないかな？」

ぶつくさ言っていると、グリフォンが急に姿勢を低め、翼をばさりと動かした。

上から来る空気を裂くような衝撃、そして浮遊感が体を襲う。翼が動く度に、激しい風圧がいろんな方向から渦を巻いて襲ってきた。

「っわ」

衝撃と風で目を開けていられない。薄目で何とか子竜の姿は確認

し、それを追っていることも確認した。

それきりがつちりグリフォンの首に掴まり、進路等完全に任せっきりで落ちないことだけを願う。少しでも気を抜いたら吹き飛ばされそうだった。

長いようで短いその時間を耐え、前の方で子竜の上げた鳴き声に私は目をそつと開く。

「キイ！ キイ！」

子竜は翼をばたつかせながら、私にある一点を示唆していた。

それは今の私の体勢では見えない方向で、体を起こすのも怖かった私はナーサリーライムに下ろしてくれるよう頼む。

ふわりと地上に降りたグリフォンは、ぶるんと体を振って私を地面の上に落とすと、その姿を消した。代わりに私の傍にふわりとナーサリーライムが舞い降りる。

ごろごろと岩の敷き詰められた、砂っぽい地面に手をつき、深いため息を吐く。辺りを見回してみると、岩山のようにだった。

「キイ！！！」

一息つく間もなく、子竜が傍に舞い降りてきて私に上を向くよう示した。

空中で、竜同士が争っている。私の視力では、単に緑色の物体がぶつかり合っているようにしか見えなかったが、度々地上に落ちながら、彼らは互いに傷つけあっていた。

「うわあ」

近づきたくないのだが、彼らは争いながら次第に私の方へ近づいてくる。竜の爪がもう一方の尾をかすり、黒い血が噴き出した。逆

に一方は竜の翼に噛み付き、その端を噛み千切る。

あの争いに手を出せる人間が、この世のどこにいるというのだろうか。

「私が行きましょう」

音もなく私の傍に現れたガウエインがあっさり言った。

「手伝おう」

同じく隣に立ったアーチャーが、がっしりした太い縄の束を取り出してガウエインに渡した。

え、何に使うのそれ。

「傷つけたくないだろう？ どちらも」

「ああ、うん、確かにそうだけど」

傷つけないで彼らを止めることなんて可能だろうか。

「しかし、母親の方はともかく、襲われた竜も怒り狂って我を忘れていますね」

「あたしが一匹つかまえるわ」

ナーサリーライムが軽やかに手を上げて、ジャバウォックを呼び出した。背後に巨人が控え、出番を待つように跪く。ばんばん大物召喚してるけど、魔力量とか大丈夫なんだろうか。そういえばアーチャーにもガンガン投影させている。テントとか、クッキング用品とか 武器と違って魔力はさほど要らないのかも？ 見たところ平気そうだが。

「じゃ、引き離れた後のことは俺がどうにかしようかね」

ロビンフッドが軽く手を上げて言った。

「催眠剤がいいか？ どのくらい入れれば効くのかねえ」

「あの巨体だしね……っ」

のんびりしているロビンフッドと会話をしている間にも、竜はこちらへ迫ってくる。私は思わず及び腰になり、逃げの体勢に入った。もつとも、既に圧巻の巨体が私に影を落とすほどの距離だ、逃げられるはずもないのだが。

代わりにガウエインとジャバウォックは動き出す。二匹の竜が地に落ちたその一瞬を狙い、ジャバウォックがまず一匹を引き剥がし、頭を押さえつける。そしてガウエインは素早い動きで竜の体に駆けあがり、巨大な頭を縄でぐるぐる巻きにすると、その先をガラティーンに巻き付けて地面に突き刺した。竜が起き上がるうともがき、ぐっと張った綱にかかる力は途方もないだろうと推測出来るが、ガウエインは柄を抑えてそれを引きとめる。

私が「あ」と声を上げる間もない早業だ。私の頭の後ろから振りかぶられたロビンフッドの手にボウガンが現れた。

ロビンフッドの放った矢が二匹ともに命中し、彼の手から伸びた木のツタのようなものが竜達の体を絡め取る。あれはゲーム中でも見たことがある彼の宝具、祈りの弓だ。毒のダメージを倍にするという効果のはずだが、今だと催眠剤の効果を倍にしているのだろうか。

暴れようとしていた竜達は、しばらくもがいていたが、目に見えて力を失っていった。ガウエインとジャバウォックの力に抗うことも出来ず、頭を地面に落とす。だらりと舌を曝し、動かなくなつた。死んでいるかのようだ。

「寝てるだけだつて」

あの巨大な竜が二匹とも、あつという間に戦闘不能になってしまった。本当に私、戦闘に関しては役割がない。普通、指示とかつてマスターの役目なんだろうなあ。

「しかし、すごい効き目。最初っからアレでよかったんじゃないのか」

「それは俺の弓の腕を信用してくれてるとかいうことじゃねーよな？ 当てるだけなら当たるだろうが、竜の固い鱗にぶつすり刺さなきゃなんねーし、暴れた竜の矛先がこっちに来てマスターに何かあつたら俺が殺されそうで怖いぜ」

他の英霊に、と囁くロビンフッドに、アーチャーがちらつと視線を向けた。

「それは間違いない」

「……怖い怖い」

ジャバウォックを消したナーサリーライムが私の方に駆け寄ってくる。

「ナーサリーライムもありがとう」

ジャバウォック、竜相手でも格闘で勝てるとか……。本気で竜討伐とか出来そうだ。

子竜を探すと、母竜らしい方の頭の近くでうずくまっていた。眠る母親の牙をつつき、何事か語りかけているように見える。何か邪魔するのも悪い雰囲気だ。

「……けど、乗ってた人の姿が見えないんだよね」

「どっかで死んでんじゃないの？」

「有り得そうで怖いんだけど……」

「マスター、向こうだ」

フツと私の傍にアーチャーが姿を現した。

「襲撃されている。助けるかね？」

「……」

襲撃って何だ、と一瞬考えてしまった。こういう世界で言えば、それは当然命の関わる大変な事態のことである。慌てるまでに二秒かかった。平和ボケというのは一朝一夕には治らないものらしい。

「お願いします」

「承った」

「承知しました」

私の言葉にフツと姿を消したのは、アーチャー、ガウエインだった。ナーサリーライムは眠った竜の上に座り、体育座りしたジャバウォックと向かい合っている。……何をしているのだろうか。声をかけ辛かったので、近くにいたロビンフッドに尋ねた。

「あー、ごめんロビンフッド。どこにいるんだと思う？」

置いていかれたので、皇子やデイキのいる場所がわからなかったのである。

ロビンフッドは肩を竦めた。

「別にいいんじゃないね、見に行かなくても。ここで待ってりゃ、あの

二人が何とかして皇子さんとやらの襟首掴んで持ってくるだろ」

「いや、そうかもしれないんだけど」

というかたぶんそうだろうけど。

「マスターなのに、何もしないのも悪いなあ、なんて」

何もできないから、せめて見てほしいのだ。

英霊を戦わせるのは私だ。護衛にしる、誰かを守るためにしる。

それを当然と思って胡坐をかいているのは、何だか落ち着かない。

「……まあ、落ちつかないのはわかる。じゃ、ついてきな」

ロビンフッドが私を手招き、小高い岩の上まで連れて行った。悪路だったので、私はロビンフッドから伸ばされた手を掴んで岩の上に引っ張り上げてもらう。

「ほら、あそこ」

言われるまでもなく、派手派手しい赤い兵装と白い鎧が目に飛び込んできた。

十数人ほどの塊に飛び込んでいったガウエインが、敵味方の区別がついているのかという勢いで人を切り飛ばし、アーチャーが離れたところからフルンディングで襲撃者らしき人を射抜いている。

「ど、どれがどれだかわかんない」

皇子は辛うじてわかった。独特な色の髪が見えていたからだ。

何度か見直す頃には、立っているのが知っている顔ばかりになっていた。

「……はやつ」

地面に伏した襲撃者達から、唸る声や怨嗟の聲がしばし聞こえたが、すぐに静かになった。私はロビンフッドを盾にしながら降りていく。

「マスター、怖がりすぎ。もう終わってるって」「いやいや、そうは言っても」

倒されたフリをしているだけとか、ない？ 気づかない間に後ろから隠しナイフでバツサリやられたりとか、ない？

「大丈夫ですよ、マスター。倒れている中に戦闘力の残る者はいません」

ガウエインがにこやかに断言してくれる。
ほっとするやらむしろ怖いやらで、返答しがたい。死んでるの？
ねえ死んでるの？ 見ないフリしていい？

「助かった」

デイキが血に濡れた剣を持ったまま私に近づいてきた。鉄錆の匂いが鼻を掠めた。皇子は無傷だが、エンリヤデイキ、兵士さんたちはあちこちにかすり傷を負っている。大した怪我がないのは彼らの腕だろうか。

まあ、ガウエインは返り血ひとつなく涼やかな顔をしているのだ。当たり前前か。英霊だもんなあ。

「大丈夫ですか？」

「……」

尋ねると、兵士さんたちが微妙な顔をした。どことなく複雑そう
だ。

「召喚の力は本物のようだが……、しかし、竜から落ちる魔術師……?
」

悪かったですね！ でもまあ事実である。召喚の力だってもらい
ものだし。

「この程度のならず者にも苦戦していた貴様らに、我がマスターを
侮辱する資格があるとでも？」

ガウエインが笑顔のまま零度の空気をさらりと流した。
うわあ怖い。固まっている兵士さん達だけでなく、私まですいま
せんって謝りたくなったよ。

「……エンリ、魔術師って竜から落ちないものなのか」

剣を血で拭うディキと違い、エンリは徒手での戦闘だったらしく、
自分の怪我の手当てをしていた。手早く、慣れたものだ。

「いやあ、まあ……おまえ召喚しか使えないの？」

「そう」

「そりゃ、悪かったな。おまえは魔術師だし、緊急事態だったんで、
どうにかなるかと思って置いてっちまった。まあ この国の人間
はあんまり魔術師って知らねえんだ、竜騎手も正式に登録されてる
のは三人しかいないし、二級にしても多くない」

「アルケイドがいるのに？」

「あんまり大つぴらに動く魔術師じゃないし、あの人は第二皇子付きだしな。妙なものに手を出してる、奇特的な皇子っていう評価だ」

「……魔術師って妙なもの？」

「そういう認識だな、この国では」

「よく私を雇ったな」

その妙なものの中でも更に異質だと思っただが。

「そりゃ、アルケイドの一人決めみたいなものだったからなあ。実力主義のデイキも賛成したんだろうが」

ふむ。だから、殿下は渋ったのかな？

「……ねーえ、マスター」

フツと後ろに立ったナーサリーライムに、近くにいた兵士が戦闘態勢を取った。デイキが手を振り、警戒を解かせるのを横目で見、ナーサリーライムに視線を戻す。

「なに？」

「一人、魔術師のようなものが逃げようとしていたわ」

ずしりずしりと存在感のあるジャバウォックがゆっくりこちらへ歩いてくる。ジャバウォックはその巨体を屈めると、私の前で握っていた右の手の平を開いた。

そこにぶるぶると体を震わせながら座っていたのは、見覚えのある子供だった。街で私にスリを試みた子供だ。

「魔術師のようなもの？」

「竜を操っていたのはこの子ね」

「竜を操っていた？」

何とか逃げ出そうとしている子供を、ジャバウォックが文字通り手の平の上で遊んでいる。

もしかして、殿下達を狙った襲撃者達も？ だとしたら、私も操られる可能性があるということだろう。怖い子供だ。

「くそっ、どうして僕の魔術が効かないんだ……!!」

声変わり前の高い声で言う子供は、どうやらジャバウォックに何らかの魔術を試みているらしい。効果音とか効果映像とかが出ていないので、何をしているかわからない。魔術って言う割りに地味だ。そんなことを思っている私の横でアーチャーが言った。

「マスター、気をつける。精神操作に近い魔術を使うようだ」

気をつけるって言われてもどうすれば。

「それもそうか」

「納得されても」

「うむ、すまない。心得違いだ。気をつけるのは我々だな」

「うっ、あっさりそう割り切られても切ない」

まあ、仕方のないことだ。私には「気をつける」の具体的な内訳がわからないし。この子供の魔術効果範囲がわかれば、それより外に逃げるなどという消極的な対策は取れるけれども。わからないし。意味ない。

「……！？ 生き物じゃないのか……！？」

驚愕したように子供が叫んだ。

子供はバツと私の方を振り返り、化け物でも見るような顔で言った。

「こんな魔力の塊を意のままに動かせるなんて……。アンタほんとに正規ギルドの魔術師かよ」

「え。まあ、一応」

登録試験とか受けた覚えはないけど。たぶん。

「何処だ!？」

子供が食いついてきた。

「それを答える前に、君の名前と所属ギルド、それから目的を知りたいかな」

「っ……………」

子供は仏頂面になると、私の方をじっと見た。

その瞬間、ジャバウォックが大きな手の平で子供を包みこみ、もう片方の手で蓋をしてシェイクした。

「……………惨い」

さすがナーサリーライム、やらせることが半端ない。道端の蛙を捕まえた小学生並みだ。

「ぶっ、ぐう……………っええ」

どうやら内部で酔ったらしい子供は、青い顔をしていた。口に両

手を当てて、再び地面に降りたジャバウォックの手の中で屈みこんでいる。地面に接したことに気づくと、実にフラフラと、必死な顔をして地面に降りようとした。

「……下ろしてあげてもいいよ、ナーサリーライム」

「えー」

「いや、充分だから」

充分可哀想だから。なんか鼻水出てるし。

「だけどあの子、マスターに精神操作の魔術をかけようとしたのよ」
「目が媒体みたいだな。よかったなマスター、これでアンタにも気をつけることが出来るぜ」

ロビンフッドがからかうように言ってきた。

「目を見なきゃいいんだ？」

「いや、『彼が見たもの』が対象という可能性もある。発動するまでに時間はあるようだが、うちのマスターが対策を立てるには少々難しい。ちよつと待て」

アーチャーは言つと、子供に近づき、涙目で吐き気を堪えている子供を何かで目隠しした。ネクタイだ。

まさか、誰かを縛るといふととりあえずネクタイなのか。いやこの場合目隠しだが。そつちの方が余計卑猥な気もする。あ、しかも相手は子供……。

「アーチャーってそつちの趣味」

「ない!!--」

カツ、という効果音がつきそうな顔で怒鳴られた。怖い。

「たまたま思いついたのがコレだったただだ、勘違いするな」

「たまたま……」

思いつくのか、ネクタイを。

「……マスター、怒るぞ？」

もう怒っているじゃないかと言おうかと思ったが、逆撫でするだけだろうと思っただのでやめた。頭の中で考えていることはほとんど伝わっているらしいので、伝わっているかもしれないが。

「……口に出さなかっただけ、マシだと思うことにする。ほら、訊くことがあるんだろうが」

ネクタイを目元に巻かれ、ジャバウオックの人差し指に両手をひとまとめにされ、地面に縫い付けられている子供はちよつと震えている。まあ、抵抗を封じられて目隠しされれば誰でも怯えるだろう。さっさと訊いて、尋問は終わらせてあげよう。素直に答えてくれればだが。

「で、お名前と所属と目的。順番にどうぞ」

「……うっ、な、名前はヨナ」

「所属」

「……。『放浪する者達』」

「目的は？」

「……」

「……」

彼は黙ってしまった。

「もしかしてその襲撃も君の仕業かな」

「……」

……だんまり。まあ、違つたら違つと言つたろう。そいつのは黙っていられない性格に見える。

ということとは、この無言は肯定だ。恐ろしい子。

「てことは第二皇子の暗殺が目的？」

まだ日の高いうちから暗殺つて言つのも変だろつか。……第二皇子の殺害？

「レ、レナリーに言われたんだ！ きつとそうだから、確認して来いって！」

「レナリー？」

なんか聞き覚えがある。この世界の魔術師との、最初の戦闘。黒髪の魔術師の後ろに浮かんでいた、幽霊のような女性の名だ。

「何がきつとそう、なんだ？」

アーチャーがヨナに尋ねる。ヨナは身を竦め、答えた。

「……守護者」

「おお？」

聞き覚えのある言葉がポロポロと。「きつとあいつ守護者だから確認してこい」と彼は言われたのだろうか。

「……守護者なら、第二皇子を護るはずだから、ちよっかい出して来いって」

ちよっかい。衝撃を受けた。

妊娠した竜をけしかけ、人数を揃えて襲撃するのが、子供の考えた「ちよっかい」なのか。すごいレベルだ。彼の特技が精神操作にしろ、なかなか思いつくことじゃない。というか竜を操作するってすごいな。魔術師なら出来て当たり前って言われたらどうしよう。

「見慣れない魔術を使うはずだからって」

なるほど正しく私だ。

英霊は確かに、彼らにとっては見慣れない魔術を使っているはずだ。ということは、その情報がヨナからレナリーという女性に伝われば、私が守護者だという確信が持たれるということだ。

「……ヨナの知ってる守護者ってどういうもの？」

「守護者……？ そんなの魔術師ならみんな知ってる。世界の支柱となるものを、守り、封じる存在を言うんだ。聖典にだって載ってる。冷徹な審判者でもある。和を乱す者に刑罰を下すのも守護者の仕事だ」

彼は続けて言った。

「だから悪いけどアンタはそんな大層な人に見えない」

いや、刑罰を下すなんて聞いたら、私もそんな人には見えない方がいいんだけど。

「それなら、本物だったら、君を生かして返したりしないよね？」

その大層な『守護者』にちよっかいかけたんだから。

「……本物？」

「どうだろう」

守護者になるように言われてはいるし、この世界に来た以上私にはその道しかないだろう。

英霊達の戦力に頼りっぱなしの、頼りない守護者ではあるが。

「しかし、判断するのは君だ、マスター」

アーチャーがぼそりと言った。

「殺すのかね？」

私の判断を聞いたらすぐさまそうすると言わんばかりに、彼は干将と莫耶、二振りの剣を手に顕現した。

彼を無傷で返せば、レナリーという女性に私の情報を与えるというだけの結果しか残らない。

竜をも操作できる彼は、きっとこれからも気軽にその力を使うだろう。

私がここで殺すと言えば、英霊のうち誰も、私を止めようとする者はいないのだろう。

「アーチャー。この子は、私を殺そうとしてる訳じゃない。それなら絶好の機会を逃している」

最初に会った、街の中。あの時点で殺意があったのなら、遠目に

私を操作すれば、それは簡単に実行出来たはず。

「だから本当にちよっかいをかけられただけだ。それなら、殺すの
どこのつていうのは大袈裟な話だ。この子が情報を持って帰ること
も問題ない。……この子が嘘を言っていないなら、わかったことも
多いしね」

「そうか。 了解した」

アーチャーはあっさりと剣を収めた。

「……」

ヨナは唇を噛んで俯いている。自分が今見逃されようとしている
ことが悔しいのだろうか。

「……変な奴。やっぱり、なんか違う。前の守護者は、もっとひど
い奴だった。だから僕は すごく離れたところから見たのに、
捕まるなんて……」

連れてきたのはナーサリーライムである。

「ご愁傷様」

「アンタが言うのかよ」

しかし、前の守護者ってどんな人だったんだろう。セディの猫は
優しいと言っていたが、彼はひどい奴と評している。敵か味方かの
違いだろうか。

というか、前の守護者は一体どんな理由から引退したのか。不老
不死なら死なないし、永遠と言っていていい時間、守護者をしていら
るはずだ。

……飽きたんだろうか。有り得ない話でもない。

私は最初から二度目の人生に現実逃避を決め込んでいたが、今は今で何とかやれている。しかし、どうにもならなくなって、死にたいと願いつける日々が来るかもしれない。

「マスター？」

前の守護者がいるなら、少し会ってみたいと思った。

第十二話 道中？（後書き）

誤字報告、ありがとうございます。

昨日変換したつもりで改正されていなかった謎。きちんと改正されたか確認しない私が悪いのですね、はい、すみません……。

第十三話 道中？

「マスター、マスター。戻ってこい」

ロビンフッドがちよいちよい、と私の頭をつつく。その刺激で物思いから浮上した。

うわあ、人のことが見えなくなるくらい内側に引っ込んでいたとか恥ずかしい。しかもその物思いの内容って英霊たちに筒抜けだよね、たぶん。よし、私これからもう物思いに耽るとかいうスキルは封印しておく。

「皇子さん方、行つちまいましたよ」

「ええつ。置いてきぼり!？」

「まあそれは、竜が寝てる間は大丈夫でしょうがね」

「ああ、そうだった。そういうえばロビンフッド、起こせる？」

「はいはい」

言つて竜の方へだるそうに歩いていくロビンフッドを見送り、まだ竜で都へ向かうつもりなんだろうかと疑問に思った。

竜は大分怪我をしていたようだが。

「……竜の怪我を治しているようです。エンリの魔術でしょう」

「治癒も出来るんだ」

「治癒力を高める程度のもものようですが」

竜騎士つて意外とオールマイティー。人間の怪我也治せたら、パイロット扱いじゃマズインじゃないだろうか。

ロビンフッドはすぐ竜を起こすだろう。さっさとヨナの処遇を決

めて、彼らを追いかけていなければならない。
彼に視線を向けると、ヨナはそれがわかったかのように口を開いた。

「……三つ、答えたぞ。アンタの所属は、どこだよ」

「私は『彼方の賢人』に所属している」

らしいよ。

心の中でこつそり付け加えたら、アーチャーが肩を竦めた。

「『彼方の賢人』！？」

彼は驚愕の声を上げた。

「生きた化石……や、むしろ化石だと思ってた」

「……。ちなみに君の知ってる『彼方の賢人』の現役時代って何年くらい前なの？」

「何年前？ ……」

ヨナは少し考えてその数字を口にした。

「現役というなら、157年前の」

「あ、わかったも面白い」

百年単位か……。

人間辞めた風のレキサンドラはともかく、セディは何歳だろう。もしかして同じく人間辞めるとかだろうか。私ってそんなのと同僚なのか。ヤダな。とそんなことを考えていて気付いた。

私も人間辞めてるじゃん。一度死んでるし。

……ヤダな。

「それにしても、ヨナ君って物知りだねえ」

一見して十歳前後にしか見えない彼に問いかけてみる。

「君のギルドって大きいの？ 有名なの？」

「……『放浪する者達』を知らないの？」

愕然とした風に言われた。

「道理で反応がおかしいと思った。アンター一体どこの出身……いや、この国なら有り得ないことでもないか」

後半は勝手に納得した風である。

「『放浪する者達』は……非正規ギルドだ。非正規ギルドは山ほどあるけど、中では大きいし、ほとんど代表みたいなもの」

非正規ギルドなんてものがあるのか。

魔術師世界の裏側って感じだろうか。目の前の少年を見るに、人には大っぴらに言えないような能力の持ち主が多いのかもしれない。レナリーと名乗った女性も、表立って大通りを歩けそうな風ではなかったし……というかどうかどう見ても幽霊だったし。

「非正規ギルドなら、もしかして、正規ギルドに見つかったら処罰されたりする？」

管理機関みたいなものがあるんだろうか、と思って尋ねると、彼は頷いた。

それらしいところに彼を突きだせば問題解決だろうか。

「いい扱いはされねーと思うぜ、マスター。言っちゃ悪いが、人権だのなんだのって言うほど文明が進んでるようには見えませんからね。おまけに洗脳系の魔術師だ、とりあえず殺しちまえて話になる可能性は高いんじゃないっすかね」

待ったをかけたのはロビンフッドだった。

「そうなるマスターとしては寝覚めがよろしくないんですよ」

「よろしくない……けど、それについては平気そうにしてるし、何か対策がしてあるんじゃないのかな？」

ヨナの方に顔を向けると、彼はびくりと反応したが、口を引き結んだ。

「……ふむ。とりあえず、ここで解放するのが一番いいかな」

もうちょっと色々教えて欲しかったんだけど。

「次はもっと違うやり方で遊ぼうね」

竜が絡むとかいうようなスリルは一切抜きで。

言っと、なぜかヨナは俯いたまま返事をしてくれなかった。少しばかり顔が青い気もする。ジャバウォックの扱いがよほど怖かったのだろうか。

「ナーサリーライム、竜でここを離れたらヨナを離してくれる？」

「ええ、じゃあちよっと遊んでから追いかけるわね」

「……え、うん」

いいかな。いいよね、ナーサリーライムって子供好きだろうし。小山のような竜の姿は、ここからでも見える。二頭の頭が起き上がったが、互いに襲い掛かる様子はない。無事頭が冷えたようだ。近くへ行くと、子竜が駆け寄ってきた。その図体で飛び掛るとかやめて欲しい。あわや一度死ぬかと覚悟を決めてしまったが、割り込んできたガウエインによつて事なきを得た。子竜の立派な爪による攻撃をいなして頭を撫でるとか、ガウエインのようなあやし方は、私には絶対にできない。

「逃がしたのか？」

皇子殿下が近づいてきたかと思うと、そう尋ねてきた。

そういえば皇子の命を狙った刺客と言えなくもない犯人だ。引き渡した方がよかつただろうか。引き渡したらヨナの命はなさそうだが。

「いけませんでしたか？ 今ならまだ、捕まえられると思いますけど」

言つと、皇子は首を振った。

「魔術師を使われるのは初めてだが……ふむ、まあ構わん。次に同じ魔術師が来ても問題ないのだろう」

「それは大丈夫かと」

「とりあえずは都へ急ぐことを考えたい。大幅に予定が遅れているからな」

「そうですね。じゃ、やっぱり竜で」

行くつもりなのかと、竜の様子を見ようとした瞬間、突風が後ろ

から嘖きつけた。振り向いた私の視界に映ったのは、竜の鼻先だ。

「……近いんだけど」

竜の鼻の穴つて、人ひとりくらいすっぽり入れそうだよね、などと無意味な感想を抱いてしまつくらいには近くから、竜が私を覗き込んでいた。

どっちの竜だろうか。

「礼を言っているようですよ、マスター」

ガウエインが通訳してくれた。すっかり通訳係だ。

「母親の方です」

「何はともあれ、もうちょっと距離を取ってくれると嬉しいんだけど、と伝えてもらえるだろうか」

「あなたを乗せて運びたいそうです」

「ど、どこへ？」

「どこへでも。あなたに竜騎手の適性はないそうですが、魔術師ならば竜の魔力を扱う術があるだろうからと」

生憎だが、私にそんな術はない。

「ガウエインでいいんじゃないかな」

「……主と仰ぐならあなたにしたいと」

「丁重にお断りして下さい」

たとえば私が本物の魔術師だったとしても、そのお申し出は丁重にお断りさせていただきたいところだったが。

竜に乗るって、言葉面だけ聞けば確かに格好いいし、便利なんだ

ろうけれども。

母竜はふうつと突風のような溜息を吐いた。残念そうだ。

「もったいないな。竜が人に頭を下げることなど滅多にないというのに」

皇子はしみじみとした口調で言った。

もったいないとか言わないで欲しい。ものを捨てられない貧乏性が顔を出してしまう。あと優柔不断。

困っていると、竜が突然、まるで犬のようにぶるりと頭を振るった。

巨大な顎を開き、長く薄い舌の先に何かを乗せて私の前に差し出した。

「……石？」

竜にとってはごくごく小さなサイズだが、私が持つと手の平からはみ出す大きさの石だ。

玉虫色に輝くごつごつした表面。牛の胆石を思い出した。

うん、触りたくない。

「竜の魔力結晶だそうです、マスター」

「何それ」

「使用すれば、この結晶のある場所に竜の転移が可能だそうです」

好きな時に呼び出せというつもりだろうか。

背後で皇子が呟いた。

「かの魔術大国で売れば、一生遊んで暮らせるな」

マジですか。てか売ってもいいの？ 使用者制限みたいなものはないのだろうか。

竜は私に石を差し出したまま静止している。受け取るまで動かない心づもりなのはわかったので、私は仕方なく石を受け取った。

……微妙に湿っているのは、喉の奥から出てきた代物だからだろうか。胃酸だったら嫌だなと思ったが、触った手が溶ける様子はないので大丈夫のようだ。

持って歩くには少々大きすぎるサイズ。手頃な袋もないので、マイルームに入れておくことにする。

竜の親子は満足したように、連れ立って飛び立ち、あっという間に見えなくなつた。

「早っ」

「元々竜は人を避ける性質のあるものだ。我々の存在を気にしてのことだろう」

皇子は名残惜しそうに空を見ていたが、すぐに身を翻して残る竜の方へ向かった。

「エンリ、いいか？」

「行けそうです、殿下。どうぞお乗りください」

エンリの号令に慌てて竜の傍に寄った。

そしてそこにアーチャーがいたので、その手を掴む。

「お願いします」

竜の背に縄梯子は垂らされていたが、もはやその難事業に手を出すつもりにはすらなれなかった。運んでもらうのも怖い、自分で梯子を登るのはその上失敗する可能性がある。

「……。それは、ガウエインの担当ではないか？」

私の竜の昇降はいつの間にもやらガウエインが担当することに決まっていたらしい。

別に誰でもいいと思うのだが。

「……あ、無理なら」

「無理とは言っていない」

溜息を吐きながらアーチャーが私の腕を掴み、荷物担ぎで持ち上げた。

嫌なら、と言った方がよかつただろうか。

ガウエインにしるアーチャーにしる、跳躍を繰り返して登るので、浮遊感と衝撃の繰り返しには変わらない。

彼の首を絞める勢いでがちりしがみつきつつ、ジャバウォックの大きさなら地面から竜の背の上までエレベーター式に持ち上げられるのではないかと気がついた。

意外にソフトな手つきで竜の鱗の上に下ろされたが、登る時の上下運動が怖いのは違いない。なぜ登る前に気づかなかつたのかと悔しがる。

「あたしにご用？」

竜の背に両手を突きながら見上げると、ナーサリーライムが首を傾げていた。

「うん、遅かつたんだけどね……それよりヨナ君はどうだった？」

「泣きながら逃げちゃったわ。呼ばれたから戻ってきたんだけど、追いかけた方がよかつた？」

「どこに逃げたとかはわかる？」

「しるしをつけてみたの。マスターが知りたい時に、彼がどこにいるかわかるわ」

もしかして、彼のギルドの所在地がわかるだろうか。まあ、殴りこみに行くつもりなんて微塵もないが。

「ちょっとかい出さないでと頼んだらどうだろう」

「頼んで来てやるうか」

ロビンフッドが笑い含みに言った言葉に、私は溜息をついた。

「ロビンフッドか……」

「ちょ、何だよ？ 俺じゃ不満があるとしても言うのかよ」

「成功する図式が思い浮かばない」

「そりゃ、そもそも無理っしょ、前提が。何にせよ、マスターは向こうの目的を邪魔する立場なんだし」

「やっぱりそうかな」

「皇子さんとやらの暗殺が目的なら、立派に阻害してるだろ」

「うーん」

「考える必要ないって。向こうさんが敵なら撃破、ってだけでしょ」

「敵じゃなかったら？」

「その方が面倒かもな」

協定を結んでみたり出来る相手ならそうしたいが、そもそも私はただの個人であって、ギルドと並び立てる立場にはない。それでは同盟だの何だのと言っても、口約束だけで強制力のないものになってしまうだろう。

「……『彼方の賢人』の名前を出そうにも、代表者じゃないし」

そういえば『彼方の賢人』の代表者って誰なんだろう。レキサンドラ？ セドリック？ いるかどうかもわからない三人目だろうか。

「セドリックに相談したら何とかしてくれるかな？」

英霊たちは一様に微妙な顔をした。

「あれに頼るのか……？」

内情を言葉にしてくれたのはアーチャーである。

「そこも保留にしてくれ。そもそも三人のみという小規模なギルドだろう。どうやら規模の大きいらしい彼らのギルドに対する執行力があるとも思えない」

「それもそうか……」

やはり基本姿勢は戦って撃破、しかないのか。

平和や協調を求める日本人としては、嫌だなあ。私が戦う訳ではないけれども。

「話を聞きに行く必要はあるんじゃないの？ マスター、守護者について何にも知らねえんじゃないですか」

「それはその通りだけど」

世界を守るって言われても、って感じだ。敵はちゃんといるらしいが、どういう理由で対立しているのかも知らない訳だから、戦闘以外の手段を取りようがない。

「じゃあ、セドリックに話を聞きに行くのは決定ってことで」

でも、その間皇子の護衛ってどうしよう。

皇子は竜の頭の上の特等席に立っている。どれだけ竜が好きなんだろうか。

ちなみに私は腹部の上くらいに座り込んでいる。翼による煽りが怖い。なぜか風は来ないし、一番揺れのない場所である。あと真下が視界に入らないという嬉しい特典がついている。なんでみんな頭の方行くんだろう。

「そもそも必要かよ？ さっきのガキは皇子ってよりアンタを狙ってたみたいけど」

「それでいなかったときに暗殺されてたりしたら洒落にならなくないか？ ご兄弟と仲悪いらしいし」

「じゃ、こんだけ英霊がいるんだから、誰かつけりゃーいい話でしょ」

「……英霊って、どれだけ離れても大丈夫なの？」

「さあ」

さあって。

「ナーサリーライム、どのくらい離れたら影響がある？」

ナーサリーライムは首を傾げた。

「わかんない。……でもたぶん、この地上なら、どこへでも行けると思うわ。問題なのは異空間的なものかしら」

「……そうなんだ？」

アーチャーが頷いた。

「途中で消えないか心配なら、令呪を使えば問題ないだろう」

じゃあ、皇子を誰かに任せても構わない訳だ。さしあたって離れ
ても問題がなさそうなナーサリーライムだろうか。

……待てよ、ナーサリーライムがいなくなると私の癒しが。

「マスター、もうすぐ着きそうだ。護衛の話は後にしろ。……皇子
付き魔術師として紹介される可能性もあると思えば、最初からいな
いのはまずいだろう。とりあえず落ち着いてからだな」

アーチャーの言葉に頷きを返そうとすると、がくんと竜の高度が
下がった。

内臓がひっくり返りそうなその感覚には慣れそうもない。ていう
か身体が飛んで行ってしまいそうで怖い。いやそんなことはないの
だが、感覚的に。

「だ、誰かちよっと手を握ってて下さい」

ナーサリーライムが握ってくれた。

第十三話 道中？（後書き）

少々実生活の方でござたが続き、気づいたら二か月も留守に
てしまいました……！ 大変申し訳ございません。

その間に感想を下さった方、お待ち頂いていた方、ありがとうご
ざいます！

第十四話 ロイヤルファミリー

竜から馬車に乗り換えて、案内されたのは巨大な屋敷だった。正門から玄関までにただっ広い前庭のある屋敷である。これが普通に街中にある。周囲にあるのは住宅街だ。スケールは落ちるが、日本人の感覚では有り得ない家がごろごろしている。これ、迷子になったら絶対に戻れない。

「あの一、ちなみにこれからの予定ってどうなってるんですか」

エンリが竜の傍に残っていないので、兵士の一人に尋ねてみた。邪険にされることは覚悟の上だったが、実際に嫌そうな顔をされたが、無視はされなかった。

「今晚はここで休ませてもらう。それから身支度を整えて宮城へ上がるんだ」

そこで兵士さんは私を頭からつま先まで見て、酷評した。

「その格好じゃ門前払いだろうな」

「殿下と一緒にいても？」

「余計駄目だ。殿下の品位を落とす」

わお。

まあ、わからなくもない。私の着ている服はどつ見ても庶民だし、森でバタバタしたから結構汚れている。

屋敷の中から出迎えに進み出てきた女性が、皇子の前に礼を取って言った。

「お帰りなさいませ、殿下」

その女性に案内されて中に入ったが、彼女はなぜかちらちらと私の方に視線を送ってくる。

正確には、私の後ろにずらりと居並ぶ英霊に、である。

「……あ、そうか。どうしよう」

私はともかく、彼らは招かれざる客だということになる。食事の準備とか気にしているのかもしれない。

「消えていればいいだろう。こちらの常識では、召喚されたものは基本的に用が済めば還すものらしい」

「えー」

アーチャーの言葉に、ナーサリーライムが不満げな声をあげた。

「そんなのつままないわ」

対してロビンフッドが肩を竦めた。

「いいんじゃないの。姿を消してた方が自由だし。マスターだって、四六時中英霊と一緒に息が詰まるだろ」

いや、むしろ傍にいて欲しいが。一人にされるの怖い。

「……。マスターは自立心とかいうものを養った方がいいな」

うっ。

「ま、護衛が必要そうなのは間違いないけどさ。護衛は交代制なんでしょ？ 他はいなくてもいいんじゃないの」

仕方ない。危険が怖いからと彼らをずっと拘束しているのも申し訳ない話だ。

「一人いてくれると嬉しい。あ、あとどこか散策するなら、一般常識を調べてきて教えて下さい」

「承知致しました」

ガウエインも問題なく頷く。ナーサリーライムは渋っていたが、ロビンフッドに首根っこを掴まれて消えた。面倒見のいい英霊だ。でもナーサリーライムは置いてって欲しかった。

最後、残ったアーチャーは肩を竦めると、姿を消した。しかし、いなくなった訳ではないのは感覚でわかる。

「……」

女性の方に視線を戻すと、驚愕の表情をしていた。しかし、私の視線に気づくと、はっとして表情を戻し、にっこりとほほ笑んで見せる。余計なことは訊かないつもりらしい。プロだ。接客のプロがいる。

広い屋敷の中、皇子殿下と兵士さん達の行き先は違うようで、どっちへついていけばいいのかかと思っていると、案内の女性が私の前に立った。

「あなたはこちらへ」

え、皇子殿下放っておいていいんですか？ 確かに勝手知ったる

家とばかりにスタスタ歩いて行ってしまったけれど。

「宮廷に上がられるのでしょうか？ 立ち居振る舞いを咎められないようにとの皇子殿下のご配慮です。まずはそのお召物を」

豪華な客室らしき場所に連れ込まれ、座ってお待ち下さいと言われて待つっていると、しばし間をおいて衣服を捧げ持った彼女が戻ってきた。そんなに急いで着替えなければならぬのだろうか。

『貧相な格好で屋敷を歩かれると困っているのではないか？』

アーチャーの言葉にショックを受けた。

すぐさま着替えさせなければならぬような格好だと思われるのか。確かにここで働いている人はみんな綺麗な格好をしているけれども。まさか彼女らが着ているようなエプロンドレスに着替えさせられるのだろうか。

「失礼致しますね」

につこりと笑顔で服に手をかけられて、今から脱がされるのだということに遅まきながら気づいた。

「……いや、出来ますから」

「まあ、そう仰らず」

「むしろ一人でさせて下さい」

羞恥で泣きたくなくなります。

「皇子殿下に言いつけられておりますので」

笑顔で私の抵抗をかわす彼女はなぜか楽しそうだ。Sですか。女同士、諦めてしまえばいいと思うかもしれないが、捨て切れな何かがある。

彼女は皇子の傍に仕える女官という役柄に相応しく、実に魅力的な女性である。服の上からでもその素敵なスタイルは目の保養だ。羨ましい。そしてそんな彼女に自分の身体を見られることほど恥ずかしいことはない。

「うら若き女性が人の服剥ごうとしないで下さい」

頑なに拒否する私に、女性はがっかりしたような顔で諦めてくれた。

「では、お済みになられましたら、このベルでお呼び下さい」

ようやく一人になって、私は深いため息を吐いた。

そして服を広げてみる。彼女らのようなドレスだったらもっと違うものにしてもらおうと思っただけの行動だったが、違った。皇子殿下が着ているものと比べれば装飾は少ないが、似たようなデザインの軍服のようなものだった。柔らかい質感のシャツに、前開きの上着揃いのズボン。靴まであった。履きにくそうな革靴だ。

着てみると、丈も合っている。肩が少し余ったが、一見してわかるほどではないだろう。

「……どう見てもコスプレ」

『似合ってるんじゃないか。ドレスより』

最後の一言は余計である。褒めるなら褒めるだけにしてもらいたい。

とりあえず着替えは終わったのでベルを鳴らすと、すぐさま先ほ

どの女性が戻ってきた。

彼女は私の襟元を直し、裾をぴんと伸ばすと、すっと魔法のように櫛を取り出して私の髪を整え、私の周囲を一回りして頷いた。

「よろしいでしょう。夕食の席にご案内しますわ」

どうやら食事の前に着替えるということだったらしい。

どんな堅苦しい席が待っているのかと思うと、食事だということに気が晴れない。

女性に導かれるまま歩いていると、廊下の途中で立ち話をしている二人に行き合った。

皇子殿下と、もう一人は誰だかわからない、煌びやかなドレスをまとった少女である。緩く波打つ金髪を結びあげ、綺麗に化粧を施した顔立ちは少しきつめの美人だ。

殿下の向こう側でこちらを向いていた彼女は、すぐに私に気づいた。

「誰？」

好意的とはお世辞にも言えないような鋭い視線である。自分より年下の少女なのだが、やけに怖い。身長はもちろん私の方が上だといふのに、見下ろされている印象がある。

「テイだ。 魔術師の」

どう自己紹介すべきかと悩んだ私の代わりに、殿下が私を示して言う。

「魔術師？ お兄様の魔術師はアルケイドではなくて？ 新しくお雇いになったの？」

お兄様、と聞いて、私は彼らの顔立ちを見比べた。……似ていない。

「母の違う妹だ。ハノと言う」

殿下が気にした様子もなく言った。皇室というからには、そんな込み行った事情は山ほどありそうだ。突っ込みたくないが、訊いてみるべきだろうか。

「なぜその妹君がこちらに？」

「それは俺も訊きたい」

「アルケイドがいると思ってお邪魔しましたの。魔術師を連れてくるというから、てつきりそうだと思いますのに」

じろりと睨まれて、非常に居心地の悪い思いをした。でもそれって私のせいじゃないよね？

「お兄様は魔術師団でも作る気ですか？ この国に浸透させるのは難しいと思いますわよ」

「……二人しかいないぞ？」

「二人でも充分おかしい人数ですわ。そもそもこの国は魔術師に忌み嫌われた国ですのに」

そういえば、アルケイドがこの国は魔術師が最も忌避する地だとか言っていた。

それにしても、ヨナにも会ったし、その前にも魔術師を見たが。本人ではないが、セディからの接触も受けた。この世界に来て、この国から出ていない私が知り合った魔術師はアルケイドも含めて四人。おっと竜騎手も含めるとすると五人だ。

考えてみれば、原因は大抵殿下だが。ゴキブリホイホイならぬ、魔術師ホイホイなのだろうか。

「あなた、所属は？」

「……『彼方の賢人』」

「嘘を吐くにももつとマシな嘘を選びなさいな」

蔑んだ目で完全否定された。

こんな美人に罵られるなら本望 と思った時、頭に叩かれたような衝撃が来た。後ろを振り向いても誰もいない。アーチャーか。ひどい。物凄くびっくりしたんだけど。

「『彼方の賢人』は創立三百年の老舗だけど、活動可のギルドメンバーが規定に足りず、五十年ほど前から活動を停止しているわ。新規加入者があつたとしたら話題になるはず」

創立三百年の老舗。

代替わりしていると信じたい。

「……ちなみにそういう話ってどうやって仕入れてらっしゃいますか？」

「アルケイドからの情報よ」

ほほう。私もアルケイドから聞いたんです。私が加入してるってわー情報源一緒ですねー。仲間仲間ー。

「でしたら知らずとも無理はありませんね。私が加入したのはごく最近です。アルケイドと知り合ったのはつい昨日のことですし」

私が言うと、なぜか彼女はきらりと目を輝かせた。

「それが本当なら、相当の実力者ということね。お兄様、この方…
…少しお借りしても構わないかしら？」

「ちゃんと返せよ」

止めてくれないの!?

「もちろんですわ。あなた。ついてらっしゃい」

ずっと優雅な足取りで、ついてくるのが当然とばかりに彼女が背を向けた。

命令するのに慣れてる人の態度ってこうなのか、と少し感心するが……待つて欲しい。

今私は夕食を食べに向かっていたはずなのだが。

我慢できないほどの空腹感があるわけではないが、日はとっぷり暮れているし、十分に夕食を摂る時間だ。実際、皇子殿下はこちらの事情などお構いなしに、食堂らしき扉の向こうへ消えてしまった。彼は結構マイペースだ。

「皇女殿下」

「不愉快だから名前を呼びなさい」

「八ノ様。失礼ながら、夕食はお済みでしょうか」

「……まただけけれど」

自分の行動が咎められたと想ってのことだろうか、彼女は一瞬口を尖らせた。しかし、その表情をすぐに引っ込める。

「では、夕食後にあなたの時間をいただくわ。……その方が余裕もあって、十分に調べられるわね」

私はもしかして選択を間違えただろうか。

ちよつと後悔しながら、ここまで案内してきてくれた女性について食堂の中に入る。無駄に広い食堂で、既に上座には皇子殿下が座っていた。中央に置かれたテーブルは長方形で、やけに長い。その広さから、何人も食卓に並ぶのかと思えば、皇子殿下と皇女殿下と私だけだった。

兵士さん達はいったいどこへ消えたのだろうか。

よしんば彼らがこの席に着かないのなら、なぜ私はここに案内されたのだろうか。実に怖い。テーブルマナーなんて全く知らないのに。他に大衆食堂ならぬ、兵士食堂みたいなものがあるなら、私はそっちへ行くべきではないだろうか。

案内されるままに席には着いたものの、やけに背筋が伸びてしまう。目の前に皇女殿下がいるのでなおさらだ。ここに並んでいるのは二人してロイヤルファミリーだというのに、晚餐がこんなに寂しくていいのだろうか。毎日パーティかと思った。

そして、山ほどあるカトラリーの使い方がわかりません。外側から順だっけ？ …… 異世界だけどマナーは同じなの？ 中央に置かれているのはフィンガーボウルと違っていいの？ もっとも、あの距離にあるのではとても指を拭くには使えない。飾りという線が濃厚だが、なぜ水を入れたガラスボウルが飾つてあるのだろうか。せめて花とか入れないの？

とりあえずチラチラと殿下たちの方を見ながら真似よう、と決める。

こんなに緊張する食事はもしかして人生で初めてじゃないだろうかと思いつながら、彼らの動向を伺うと、小さく口の中で何か呟いている。食事前の祈りの言葉と言う奴だろうか。

背後から近づいてきた給仕が、準備されていたグラスに透明な液体を注いだ。水かジュースでありますように。とてもじゃないが、アルコールを口にしたい気分ではない。

小ぶりな皿の上に乗せられた料理は、どうやら前菜のようだ。完

壁にフルコース料理と知って気が遠くなる。更に、給仕はそのまま私の背後に立った。ただでさえ緊張しているのに背後に立つのをやめて欲しい、と思って他の二人を見ると、漏れなく後ろに給仕が立っている。一人につき一給仕。必要なだろうか。

「……」

乾杯の音頭がある訳でもなく、前触れもなく食事が始まった。始まつちやった、と内心で悲鳴を上げる。

ごはんは美味しく食べたいものだ。しかし、フォークひとつ手に取るのも慎重になるこんな状況で口に運んでも、全く味がわからない。

幸いなのは、皇子殿下、皇女殿下共に、私の手元を気にする様子がないということだろうか。背後に立っている給仕はものすごく気になるが、沈黙を保ってくれている。

「……」

お通夜のような夕食だ。

これだけ沈黙が続くと、もしかして喋っちゃいけないのかという気持ちになるのだが。

食事中は喋らないのがマナーだろうか？

「ねえ、訊いてもいいかしら」

皇女殿下が不意に声を上げた。私に向けてのものらしい。

喋っちゃいけない訳じゃなかった、と思って若干ほっとする。同時に何を言われるのか物凄く怖い。

「どござ」

「あなたどこの出身？ 髪も目も黒なんて見たことがないわ。肌の色も不思議だし……」

初めて訊かれた。私は思わず皇子殿下を見やった。彼にしるアルケイドにしる、どこのギルドに所属しているかという質問はしても、私の出身は一度も訊かなかった。考えてみれば不思議なことである。

「わかりません」

微妙な印象を与えるのは承知で、そう答える。実際、わからない。この世界のどこかに黒髪黒目の人間が住んでいる土地があるのなら、そこの出身と言えるのだが。

「……そう」

幸い、彼女はそれ以上突っ込んで尋ねてこなかった。

「お兄様、いつもどこからこういう魔術師を拾って来るの？ しかし、大抵後ろ暗いのばかり」

確かに後ろ暗いが、そうはつきり言わなくてもいいのではないだろうか。傷ついてしまう。しかし、どれだけ高飛車でも嫌味に見えないのだから、美人は得だ、などと皇女殿下の顔を見ながら思った。

『……頭を正気に戻せ、マスター』

失敬な。私はいつでも正気である。

「役に立てばいいだろう」

「そうではなくて、そういう採掘場があるのなら是非教えてもらい

たいの」

魔術師って掘ったら出るものなのか。驚愕の新事実だ。……いや、まあ本気でそんなこと思った訳じゃないので叩かないで下さい、ア―チャー！。

『よく叩こうとしたのがわかったな』

殺気がしたよ、殺気が。

『いつもそれだけ鋭いといいんだが』

実に残念そうに溜息を吐かれた。そう言われても。

「おまえ専属の魔術師がいたところで、この国では使い道がないだらう」

「まあ、それはそうですけれど……。お兄様方のように、暗躍させる場もありますし」

言い方に含みがある。彼女は、兄たちの争いをよく知っているらしい。その上で呆れているような雰囲気を感じられた。

くるつと私の方へ視線を向けて、皇女は訊いた。

「あなた、若いわよね？　いくつ？」

「二十歳です」

「え！？」

思い切り驚かれた。そういえばそうだった。若く見えるっていうのはいいことなのかどうなのか。普通に日本に暮らしていた時なら喜んだかもしれないが、今はデメリットの方が大きい気がする。―

見してナメられるというのは、あまりよろしくない。

「……年上だったの？ 信じられないわ」

年下だと思われていたらしい。

「魔術はいつから？」

ついこの間、と答えるのはさすがにまずかるう、と私は誤魔化した。

「……小さい頃から」

「師事は誰に？」

「レキサンドラ・ヘルダース」

「あのレキサンドラ!？」

どのレキサンドラでしょうか。

「伝説級の魔術師に師事していたなんて……。アルケイドが調べたのなら本物なのよね。すごい掘り出し物ね、お兄様」

「そうなのか？」

「……アルケイドを傍に置いているくせに、お兄様って、どうしてそう魔術師に疎いの？」

「いや、それは」

皇子殿下はぼそぼそと言いつつ知っている。

「魔術師養成学校がないのも、国史の学校教材に魔術師の説明がないのもこの国だけよ？ よく国として立ち行ってるものだわ。昨今、魔物退治も下水も移動手段もみんな腕のいい魔術師が一人いれば解

決するのに。軍備に魔術師の配置がないのもこの国だけ。攻め込まれたら一環の終わりね。もっとも、どの国もこんな魔術に向かない領土欲しくはないでしょうけど」

さすが魔術師。オールラウンダーな職業だ。

魔物退治と移動手段はともかく、下水は私にはどうしようもないが。

……いや、そうでもなかった。こちらにはアーチャーという強い味方がいる。

『作らないぞ』

さすがにアーチャーが抗議してきた。

「それで？ あなたの得意な魔術って何？」

だんだん尋問されている気分になってきた。

「召喚」

「この土地で召喚が出来るの！」

驚くようなことらしい。

「驚いたわ。召喚……何を？」

百聞は一見に如かずである。ちょっとアーチャー出てきて、と心の中で呼んだ。

なぜか呆れた様子のアーチャーが音もなく現れる。立ち位置が給仕の横だったので、驚いた給仕が思い切りのけ反った。

そしてすぐにフツと消える。私に助け船を出してくれるつもりは

ないらしい。

東の間の現出だったが、皇女は感心したように頷いた。

「……派手な衣装ね。人間？ 人間を召喚出来るなんて、聞いたことがないけど」

私は曖昧に頷いた。人間ではなくて英霊だが、過去の英雄を具現化したものなんて言っても、この世界の英雄ではない彼らを理解してもらうのは難しいと思つてのことだ。

正直に言えば、説明が面倒だった。

「……お兄様が無事に都に来れたのは、あなたのおかげでもあるのかしら」

ぼつりと皇女が言った。際どい発言である。

「無事に済まないことを予想していたという風に取りませんが……」
「当たり前よ。そんなこと、今の情勢を知っていれば誰でもわかるでしょう。皇太子殿下が……皇妃殿下が権勢を誇るこの都に、よく戻ってくる気になつたと思つわ」

「……仕方ない。葬儀がある」
「どなたの？」

思わず尋ねると、皇女に信じられないという顔をされた。

「あなた、ちゃんと新聞読んでるの？」

何！？ 新聞があるの！？ 読みたい！ それは一体どこで遭遇するもののですか。皇子のところの図書室にはなかった。もしくは気付かなかっただけかもしれないが。私の思うような大判で薄っ

ぺらいものではない可能性もある。

「我らが父君にして、先代の皇帝陛下となられる方の葬儀だ」

……え!?

「……お亡くなり!?」

思わず尋ねてから、ここは「ご愁傷様」とか言う場面だったのではないかと慌てる。だが、そんな私の態度も意に介さず、皇子は首を振った。

「まだご存命だ」

「? ではなぜ葬儀なんて」

「御病気で長くないからに決まっていますでしょう。ああ、そういうのに、もしかして馴染みがないのかしら。うちの皇家では、死ぬ前に墓の用意をするのよ」

「身も蓋もない言い方はやめなさい」

皇子に窘められたが、皇女の方は軽く眉を上げただけだった。

「あら。この国の文化を知らない人には、直截的にはつきり物を言った方がいいのよ。遠慮して言葉を濁すと、事実ではないものが伝わってしまうわ」

実におっしゃる通りである。ありがたい話だ。

「あなた、この国に来て日が浅そうだし……。ああ、もしかして文字を読めないのかしら? 教えましょうか?」

意外と面倒見がいいらしい。

「いえ、文字は」

「そう？　なら新聞は読んだ方がいいわよ」

「おまえは二言目にはそれだな」

「だって、情報を得る手段の一つでしょう。どうしてもっと新聞社を盛り立てないの？　我が国が遅れている一因よ」

信じられないとばかりに首を振る彼女に、新聞というものは一般的でないらしいと察しがついた。

しかし、私にとっては実に一般的な代物だ。どこで手に入るか聞かせてもらおう。

「私が鼻屑にしている新聞社があるの。よかつたら一部届けさせるわ」

「ありがとうございます」

思わず満面の笑みで言ってしまった。だって新聞。新聞超読みた

い。
この国の新聞レベルがどんなものかわからないが、掲載されているのは時の話題には違いないはずだ。手に入れられる情報は計り知れない。

「……」

なぜか皇女は一瞬面喰らったような顔をした。

「……お兄様、やっぱりこの方ちようだい。お兄様よりずっと有意義に役立てるわよ」

「まだ、駄目」

まだがつくのか。

「魔術師のコネならおまえの方がいるだろう」

「まともな魔術師はうちなんかに来てくれないって言ったでしょ」

喧嘩のような言葉を交わしながらも、彼らは優雅な手つきで食事を進めている。

終わらせると早速皇女殿下は立ち上がった。

「いいわよね、お兄様？」

黙って頷く皇子殿下に溜息を吐きつつ、私は皇女殿下の後に続いた。

ちよつと何をされるのかドキドキだ。避けたいドキドキである。絨毯の敷かれた廊下を音もなく優雅に歩く皇女。どうやら魔術師というものをよく知ってらっしゃるらしい。

「……不思議そうな顔ね」

彼女は後ろに目がついているのだろうか。振り向きもしないのにそう言った。

「皇女が魔術師に興味を持ってはいけなしかしら？」

「……いいえ」

何に興味を持つとつと、それは本人の自由である。

が、この世界はそうではないかもしれない。

「私、ウェセンシアに留学したことがあるの。知ってるわよね？」

魔術大国よ。魔術師はとつてもポピュラーな職業だし、才能のある人は国を挙げて支援している。国民のおよそ半数が、八歳になると魔力検査を受けるのよ。まあ、その中で才能が見つかるのはごく一部だけだ」

制度化しているらしい。魔術師とはそこまで価値のあるものなのだろう。

「私も受けたわ。そこへ行って、初めて。その時もう十二歳だったし、まだ受けていないというだけでも驚かれたのだけど」

十二歳で外国に留学という時点で私は驚くのだが。

「まあ、才能なんてあるはずないけど。この国に生まれて育つてるんだもの。今はもう魔術師だけど、当時学友だった子を招待したら、こう言ったわ。『この国は息苦しい』って。『使えるはずの魔術が使えない、うまく扱えない』とも」

話している間に、皇女の部屋に辿りついたらしい。控えていた侍女らしき女性が扉を恭しく開け、それを当然のようにして皇女が中に入っていく。続けばいいものかと悩んだが、廊下に立っている訳にもいかないなので、彼女の後を追う。

「あなたもそう？ まあ、そうだろうけど……だとしたら余計不思議ね。どうして、お兄様に雇われたの？」

「成り行きです」

「アルケイドもそう言ってたわ」

皇女は侍女が奥の部屋から持ってきた箱をテーブルの上に置かせると、自らその箱を開けた。

「ここに手を置いて」

彼女が示した箱の中身は、寒天だった。

その白っぽい透明感といい、四角い箱にぴったり収まっている様子といい、どう見ても寒天。

「……」

「魔力測定するのは嫌？」

魔力測定装置なのか！ 寒天が。

「これ、ウエセンシアからのお土産なのよ。この国の人にも才能のある人はいるかと思つて、片っ端から手を置いてもらつてるの。今のところ全部空振りだけど」

さあさあと促されて、私は意を決してその中に手を入れた。あ、これで魔力値ゼロとかだったらどうしよう。魔術師ではないと一発でバレル。代わりにアーチャーに手を突っ込んでもらえばよかった、と私が気付いた時は手遅れだった。もう既に、寒天の柔らかい表面に手が触れている。

その途端、寒天が波打った。

心底驚いて恥も外聞もなく全身で逃げようとした私に、寒天が絡みつく。ギャーと心の中で叫びながら、悲鳴が口から出なかったのは、ひとえに私が固く口を閉じていたからである。開けたら入ってきそうで怖かったのだ。

手から感触が消え、そろっと恐る恐る目を開けると、アーチャーがビチビチと跳ねる寒天を床の隅に向かってポイしていた。非常に気持ち悪そうな顔だ。

元の白っぽい透明な色ではなく、黒と紫が入れ替わり立ち替わり

現れるような、気色悪い色になった寒天は、隅でぶるぶると震えている。

それでもなお私を獲物とでも思っているのか、私に向かってじわじわ近づいてきていた。

ただの寒天かと思っただけで侮った。とんでもない寒天だ。

「まだ寒天言うか」

既にアーチャーは姿を消している。

皇女殿下は驚いたように固まっていた。

「こんな反応したの、初めてだね。精度の低いただのお土産物だと思っただけで侮ったわね……」

ウエセンシアというところは、店頭にこんなお土産物が並んでいるのか。非常に怖い国だ、ウエセンシア。

「……コレ、何ですか？ ハノ様」

モンスターですか？

「普通はああいうものじゃないのよ？ 軽く波打ったり、色づいたりするようなものなんだけど」

「何ですか？」

「ウエセンシアにいる魔物の一部よ。魔力を吸収する能力があるわ」

思わず寒天に触った手を拭きたくなった。

「魔力値に関しては言うことなさそうね……、悪かったわ。あんな風になるなんて知らなかったの」

「……いえ、まあ」

そういえば、英霊たちには私から魔力が供給されているはずだとナーサリーライムも言っていた。

む。だとすると、私にも魔術が使えるのだろうか？

こちらの世界で言う、魔術とやらが、ちゃんと勉強したら使えたりして。

だとしたらまず覚えるのは転移だな。転移使いたい。竜なんかに乗らずに、自分一人でシュツと移動したい！！

「とりあえず用件はそれだけよ。明日は宮廷に行くことになると思っけど……」

皇女はなぜか哀れみの目で私を見た。

私の明日が非常に心配になってくる。

「頑張つてね」

「……何をでしょうか？」

「アルケイドが受けた数々の嫌がらせを、あなたが受けないとは思っても思えないもの。……一応私もいるから、耐えられなかったら私のところへ来てもいいのよ？ お兄様では頼りないでしょうし」

恐怖を煽る言い方をまずやめて欲しい。

第十五話 騎士団とか

「マスターー!!」

皇子殿下の屋敷に存在する、これまた立派な天蓋付きベッドに横たわっていた私は、腹の上に思い切りダイブされて目を覚ました。潰れて死ぬかと思った。

腹の上でナーサリーライムがしくしくと声を立てて泣いている。

「ロビンったらひどいのよ! 朝帰りさせるなんて!」

「おい、おまえだって楽しんでただろうが!? 何泣いてんだよ!」

私はベッドを囲む薄絹をまくり、小さなテーブルの上に置いてあった懐中時計を取った。ぱかりと蓋を開ける。

「……………」

午前四時。

私はこれから常にこの寝不足に悩まされなければならないのだからか。

「昨日寝たのは九時だろう。寝不足というほどとは思えないが」

「くっ……正論だけど、十一時に寝て六時に起きるのと同じ時間眠ったとはとても思えない」

私は溜息を吐いて、私に抱きついてめそめそしているナーサリーライムの頭を撫でた。

「で、ロビンフッドは何を苛めたの？」

「苛めてねえよ。俺はむしろコイツに引っ張り回されましたよ」

「マスターのところに戻りたいっていつぱい言ったもの！」

私は頷いた。

「ロビンフッド、有罪」

「な！？ アンタ贖身しすぎだろ！！」

「まあそれは冗談として」

ナーサリーライムも冗談だったようだ。今はけろっとしてベッドから降りている。

「おはよう、マスター」

「おはよう」

二人の騒がしさのおかげで目は覚めた。

「ガウエインは？」

「ああ。さつき、早朝訓練を少し見てくると」

「仕事熱心って言うか、なんて言うか」

一緒に来た兵士さんたちのところだろうか？ そっいえば結局、昨日は会わなかったな、と思いながら欠伸を噛み殺す。

「勝手にご飯食べに街に出てもいいかな？」

朝食も昨日のようなことになるのはごめんである。

「フラフラしない方がいいんじゃないか？ 今日は予定があるんだ

るっ」

アーチャーが言うのに、私は眉を寄せて頷いた。

「それはそうなんだけど……」

「マスター、お客さんよ？ こっちに向かってるわ」

ナーサリーライムが私の袖を引っ張った。

「やっぱりこんな時間から動き出してるんだ……」

私は深いため息を吐いて、夜着から用意されていた服に着替える。昨日借りた服と大体同じような軍服だ。今度は肩すらもぴったりフィットだった。

「……もしかして、誰か見ただけで体型がわかるプロがいるのかな」「だとしたらすごく怖くねえか、それ」

ロビンフッドの指摘に深く頷く。

「そういえば、マスター。今日の護衛担当は一応呂布ということになるが、それでいいのか？」

なぬ。そういえばそんな順番だった。

「いい機会だ。うまく扱えば大抵のものには遅れを取らないだろうしな」

尋ねたくせに、アーチャーは一人決めして頷いている。待ってと言っても聞いてもらえなさそうな雰囲気だ。

実際、呂布を召喚だけしておいて放っておくというのはいかがなものかと思っていたので、私は頷く。

「……呂布」

いきなり土壇場で呼ぶのも怖い。ので、とりあえずそこに顕現してもらおう。

部屋の中で彼の姿を見ると圧巻だった。天井に頭が届きそうだな。うん。怖い。

コンコン、とノッカーを鳴らす音に気付いて、私はそちらに視線を向ける。英霊たちは呂布を残して消えている。相変わらずの早業だ。

慌てて呂布にも姿を消してもらおうと、私は「どうぞ」と声をかけた。

現れたのは、昨日案内してくれた女性だ。

「お目覚めでいらっしやいましたか。おはようございます。失礼致します」

すると近づいてきた彼女は、じつと私の顔を見上げると、サツと櫛を取り出して私の髪を整えた。昨日の再現である。

私の周囲をくるくる回るが、それ以上の乱れは見つからなかったらしく、満足げに頷いて私の前に立つ。

「皇女殿下がお呼びでございます。どうぞこちらへ」

え。何の用で？

「朝食を御一緒にしたいと」

「……朝食？」

「八ノ様は勤勉な方ですので、一般の方と変わらぬ時間帯に寝起きされていらつしやるのですよ」

一般の方は、今もう朝食時間なの？
四時なの？

「ちなみに本当なら何時起床ですか」

「そうですね……身支度を整えられて、朝食をご用意するのが八時頃になります。普通、貴族の方というとそのくらいですわね。我々がお仕えする皇子殿下も、よくご訪問される八ノ様もそんなにお寝坊さんではありませんけど」

四時間も後。でもそれって朝寝坊って程じゃない気がするよ。

「や、どうぞ」

女性の案内で、皇女殿下が待つらしい部屋へ向かう。なんだか見覚えのある道だなと思ったら、辿りついたのは食堂だった。

なるほど見覚えがあるはずだ。一人で来いと言われても絶対に無理だが。

「おはよう。早かったのね」

既に席についている皇女殿下の前に促されて腰掛ける。

すぐさま給仕の人が近寄ってきて、洗練された仕草で食事を並べて行った。パン、スープ、チーズなどなど。手間暇かかっていそうな素材を思うと朝食とは思えない。スープなんかすごいこってりしてる。

「……あなたこそ、早いんですね」

外はまだ薄暗い。そこかしこに蠟燭の明りが灯されている。

「他の貴族なんかが寝ているのは、夜会が終わるのが遅いからよ。普通に早く寝た日に遅く起きるなんて、もったいないわ」

かといって早すぎでしょう。現代日本人の感覚ではついていけない。

「殿下……オルトレート殿下は？」

目の前にいるのも皇女殿下だと思って言い直した私に、彼女は肩を竦めた。

「訓練じゃないかしら。さっき廊下で会ったわ。……私、時々、お兄様が何を楽しみに生きているのかわからなくなるわね」

「真面目だからですか？」

「いいえ、楽しそうな話題がないから」

それには思わず頷いた。彼の置かれている状況は、よろしいとはお世辞にも言えない。

「……竜が一頭いればそれでいい気もしますが」

「ああ……竜好きだものね……」

そういえば、彼は竜騎手になりたいと言っていた割には、彼女ほど魔術師に対して造詣は深くないようだ。

「あ。竜と言えば、あなた、竜胆石りゅうたんせきを持っているのですって？ すごいわね。さっき聞いたのだけど」

日本人の癖で、頭の中で漢字に変換した。竜胆石。りんどういし。そんな綺麗な代物だったらよかったのにとがっかりする。花の竜胆には似ても似つかないし。まあ、石としては綺麗だと思うけど。こちらには漢字という文化はないようだから、ひとつの言葉に意味が複数あるのが普通という感覚は通じないかもしれない。

「胆石なんですか、アレは」

「いえ、名前がそうついているだけで、実際のところは魔力の塊らしいけど……。竜騎手でさえなかなかもらえないらしい珍品よ。普通だったら自慢して歩いてもいいくらいだと思っけど……。つくづく不思議な人ね。竜に興味がないの？」

「……まあ、正直怖いので」

うつかり内情を吐露すると、思いがけず真剣に頷かれた。

「竜は確かに怖い生き物よ。モンスターとして出会うなら最悪だわでも、だからこそ知らなきゃいけないと言えるのじゃないかしら。この国には竜騎手のついてる三頭しかいないけれど、その三頭がもし同時に暴れ出したら深刻な災害だもの」

想像してみる。恐ろしい光景だ。

怪獣襲来みたいな感じだろうか。

「対策はとられているんですか？」

「この時代遅れの国にそんなものがあると思う？ 完全に竜騎手任せよ。エンリやウエルダーはともかく、ディラン・ヘスは怖いわね」

「竜騎手の三人ですか？」

あんなものを制御している竜騎手の中に、怖いと評される人がい

るとはいかがなものか。

「そう。エンリは知ってるのよね？ イリイに乗ってきたのでしょ
う？」

「ええ」

「ウェルダーはお父様の竜騎士。ディランはお兄様……現皇太子殿
下の部下よ」

「……なぜ皇太子殿下は評判が悪くならないんでしょうか」

「なってるわよ、充分に。……ええと、何か聞いてる？」

「皇太子殿下が、第二皇子であるオルトレート様を蹴落とそうとし
ている、ということくらいなら」

「まあ、おおまかに言えばそんなところかしら。この間までオルト
お兄様の方が皇太子だったのよ。母親の序列でね。ただ、この国で
は正妃が代替わりしたら、皇子の序列も入れ替わるの。オルトお兄
様の母親だった、ヘブラス力様が亡くなったから、現皇妃がその座
について、それまで第二皇子だったラス殿下が皇太子になったの」

えええ。皇子の扱い軽くない？ 母親の添えものなの？

「……ってことは、それまで皇太子として育てられていたのはオル
トレート様だったんですね？」

「そうよ。逆に今の皇太子殿下は側室の子……まあ、つまり、いて
もいなくても変わらない皇子みたいな扱いだったわね。だから色々
と燃えるのかしら。温室育ちの弟が気に入らないのよね」

なるほど。兄弟喧嘩というカテゴリーらしい。

大変ハードな兄弟喧嘩だが。

「……え、弟？」

「ええ、弟。年齢順で言うなら、皇太子殿下の方が年上。もしこの

国が長子存続重視だったら、皇太子入れ替えが二回も行われるなんてことはなかったでしょうね」

二回？

「……ああ、そうか。まだオルトレート様が生まれていなかった時は、皇太子殿下は皇太子殿下だったんですね」

ややこしい。

「面倒な法律よね。しかもそんなことがあったせいで、宮廷の意見は二分してしまってるし……。そんなことでもめて無駄な時間を使う人員がきわめて無駄だわ。そんなものに高い給料を払えるほど国庫に余裕があると思ってるのかしら。くだらない」

彼女ははっきりと顔をしかめて言い捨てた。無駄って二回言った。

「……皇女殿下はどちらの派閥なんですか？」

「正直なところはどちらにもつきたくないわね。皇太子なんかどっちがなったって大して変わりはないわよ」

すごい台詞だ。第二皇子殿下の宮で堂々と公言するには少々はばかりがあるのではないだろうか。

「ただ、オルトお兄様の方がマシだとは思ってるわ。あの人には、権力欲の塊で光りものに目のない烏みたいな母親はいないもの」

やはりそこでも母親基準。本人の資質はまるでどうでもいいのだろうか。

「随分、母君の存在が重要視されているようですが……」

「ああ……それは仕方のないことね。この国はレイバースの庇護下にあるのよ。その王侯貴族から正妃が迎えられるのが慣例になっているの。その母親の後ろ盾で、皇太子にも皇帝にもなれるのよ。実際、ヘブラスカ様はレイバースの……ええと、確か十八番目の王女だったと思うわ。曖昧で申し訳ないけど」

「十八番目の王女にそれほど権力が？」

「一応王女には違いないらしいもの。もちろん故国のレイバースでそれほど権力がある訳ではなかったと思うわ。それをありがたがる気持ちは私にはわからないけど、この国の人がそう感じるのも事実よ。まあ、この国の国際的地位なんてその程度だったこと」

「……それでやっていける理由を聞いてもいいですか？」

そんなものなら、属国と言わず、すぐに吸収合併されてもいいよ
うなものではないだろうか。この国の皇女を前にして尋ねることで
もない気がするが。

「南テレジャとサンパネルという国を知ってる？ 現在交戦中。ど
つちも血の気の多い国よ。しかも南テレジャは隣国。土地が豊かじ
やないから、領土拡大に熱心なの。でもこの国が襲撃されたことは、
歴史上一度もない」

「……という」と

「魔術師が使えない土地なんて怖くて入れないのよ。もしこれが土
地だけではなく、人にもついてくる類のものだったら？ そうでは
ないと思うけど、流行り病の類だったら？ 国お抱えの魔術師が残
らず使えなくなったら？ 考えるだけで青くなるんでしょうね、魔
術に頼り切りのところは多いから」

「狙われない理由はわかりました」

魅力どころかデメリットのついてくる国だということだ。

呪いをかけられるとわかっている魔女の森に誰も入りたいとは思わない。

「……まあ、私たちには魔術がないことが当たり前で、そうやってやってきたから、魔術を使わない技術が多いのよ。そういう方面に關しては、この国が一步先んじていると言ってもいいんじゃないかしら。魔術と違った便利な道具は確かにあるわ。時計や書籍類なんかはそうね」

おお。彼女がこの国を褒めた。結構ズバズバと厳しいことを言っていたので、なんだか感慨がある。

「基本的な水準は遅れているけれどね」

台無しだ。

「他に聞きたいことはある？」

香ばしい香りのするハーブの織り込まれたパンを細い指で千切りながら、皇女が尋ねる。

「事前知識は多い方がいいわよ。何言われるかわかったものじゃないんだから」

「どうやら、何も知らずに宮廷と言つ魔窟に放りこまれる私を心配してくれているらしい。」

「……では、皇太子殿下がどういった方なのかお尋ねしてもよろしいですか？」

「母親に言つたりの覇氣のない男。劣等感だらけで鬱陶しいし、や

ること成すこと陰湿。前向きさの欠片もないわ」

一刀両断だった。

「同じように第二皇子殿下を評するとどうなりますか」

「出来はいいけど温室育ちね。厄介事は避けて通るのが賢明だと思ってるんじゃないかしら」

なるほど。

まだマシ、という言葉の意味を真に理解した。

彼女にとっては五十歩百歩な訳だ。

「……」

この国の皇室、大丈夫だろうか。一番頼りになるのが目の前にいる彼女のような気がしてきた。

「そういえば、他に皇子や皇女はいらっしゃるんですか？」

「いるわよ。皇子は五人、皇女は八人」

……子供が十三人か！

「……失礼ですが、全て皇帝陛下のお子様でいらっしゃいますよね？」

「皇室としては別に多い方ではないと思っただけど……」

彼女は小首を傾げた。

そういえばさつき、第十八王女とか言っていた。それを考えると……そうか。珍しい話ではないのか。

「……一夫多妻制は皇室だけですか？」
「そんなことはないわ。位の高い貴族なら側室を侍らせることは珍しくないし」

そんな話をしているうちに、後からデザートとして出てきた切り分けたフルーツの盛り合わせも食べ終える。

汚れてもいない口元をナプキンで拭った皇女は、すぐに立ちあがった。忙しそうな人だ。

「では、またすぐ宮廷で会うことになるでしょうけれど」

切れ長の目を一瞬だけ笑みの形にして颯爽と去っていく。

うん、美人。

今日は突っ込みを入れてくるアーチャーも傍にはいなかったため、十分に堪能させていただいた。

食堂から出た私は、通りすがりの侍女らしき人を捕まえて尋ねる。

「あ。すみません、訓練場ってどっちですか」

「ご案内致します」

仕事中であったはずの彼女は完璧な笑顔でそう言った。この宮の人って職業意識高い気がする。

都の中だからだろうか？

とりあえず彼女の後についていく。長い廊下を通過し、いくつかの扉の前を通って、右斜めに曲がり、中庭の見える回廊を更に渡って、窓のない廊下を抜けた。その際いくつかの曲がり角も体験した。おまけに似たような装飾や似たような作りの壁が多い。目印になるようなものはほとんどなかった。

自分が方向音痴だとは思いたくなかったが……。私……。もう……。戻れない。

しかしそれでもまだ侍女さんの足は止まらない。少し雰囲気の変わった石組みの建物に入ると、いくつも扉の並ぶ廊下を突っ切る。

「この向こうですわ」

扉のない出口に立つと、侍女さんがその先を示して言う。

広いコロッセウムのような場所だった。観覧席がある。観覧席は閑散としていたが、中央の試合をするための土台には人が集まっていた。どの顔もいかつい兵士さんだ。

そして土台の上に立っているのは、ガウエインとアーチャーだった。

……おや？

「……何してんの」

私が咳くまでもなく、二人はこちらを振り向いた。私の思考が読める彼らだ。私が近づいていることには、もちろん気づいていたのだろう。

その途端、彼らに注目していた他の兵士さんたちがザツと一様に私の方を向いたので、ちょっと、いやかなり、すごく怖かった。

「試合だ」

なぜ訓練中の兵士さんたちに見せつけるかのように試合を行っているんですか。とても目立つじゃないですか。

喧嘩ならもう少し穏便に、というか人目のつかないところでお願いしたい。

「共闘する者として、互いの力量を正しく把握するためです。喧嘩ではありません」

「穏やかに微笑んだガウエインが言った。

「ロビンフッドも呼んだのだが、あいつはうまく言って逃げた」

アーチャーが肩を竦めて言う。

「まあ、彼とはそのうち」

「そうだな」

試合をすることは決定なんですか。

どうやって止めようかと悩んでいると、ぼんと肩を叩かれた。

皇子だ。のんびりとこの見せものを観賞する気らしい。結構近い、いい眺めの場所から見ている。皇子に近づいてくる兵士さん達はいなかったので、私も安心して隣に立った。

「やらせておけ。おまえの能力を知らしめるいい機会でもある」

「……ここに並んでいる方々は、どういう？」

「俺の私兵もいるが、ほとんどは重装騎士団の連中だな」

「騎士団？」

またなんだかファンタジー用語が。

よく見れば、やけに綺麗な、実用的でなさそうな鎧を着ている。

飾り？

「ほとんどは良家の子息という奴だ。戦いなんて知らない」

「こそつと皇子が囁くように言ってきた。

さすがに大きな声で言えば皇子と言えど非難の目で見られるのだろつ。

土台の上、対峙する二人の英霊を見ると、彼らはごく自然な構えを取りながら立っていた。

無造作に一步を踏み出したのは、どちらからだったのか。
見物人からどよめき上がる。

私の目からは、ガウエインの大剣を二本の剣で受け止めるアーチャーが辛うじて見えた。彼らの動作が早すぎて、止まった一瞬がコマ送りみたいに見える。アレをずっと見ていたら動体視力が鍛えられそうだ、と思ったが、実際全く捉えられないので無意味だろう。必死に目を開いて彼らの動きを追ってはいるが、少し残念だ。臨場感あふれるカメラ目線でこの戦いを見たかった。

フツと一瞬の隙をついて飛びのいたガウエインが、下段に構えていた剣を目の前に立てた。

ガラティーンが炎を纏い、眼前のアーチャーを狙って突き出される。ゆっくりとした動きだというのに一分の隙もなく見えた。炎と熱で、剣の周囲が蜃気楼のように歪む。忠義の剣閃……だったっけ？
ガウエインのスキルだ。こんなところで出すとは。

対してアーチャーの方を見ると、彼は慌てず、剣を打ち捨てて両手を前に出した。

「ロー・アイアス」

薄い羽のような、彼の両手から広がる七枚の盾がガウエインの剣を防ぐ。

どう見ても人外の戦いだった。

ガウエインの剣自体はアーチャーの織天覆う七つの円環に防がれているが、その剣圧と炎が土台の地面に濃い焦げ跡を残している。このまま戦っていれば、土台が滅茶苦茶になるのは目に見えていた。人垣はどよめいて、距離をとるものも出始めている。

「……止めなくても、本当に構いませんか？」

皇子に尋ねると、彼は無言だった。

かと思ったら、ちらっと私を見た。止めるって意味だろうか。

二人とも、スキル使用禁止でお願いします、と心の中で言う。大声で叫ぶのは嫌だった、騎士団の皆さまに私がマスターだとバレるから。今更という気もするけれど。

しかし、皇子は一体どういつつもりなんだろう。見せ札のつもりだろうか？ 魔術を使わず、まともに日々訓練している人々に、英霊同士の戦闘は少々刺激が強いのではないかと思うが。

「使用禁止だそうだが、ガウエイン」

「聞こえました。問題ありません」

「マスター。私の投影もか？」

あ、それは仕方ない。ありで。でも剣の投影のみに限る。

「それでもあなたに不利ですね」

「抜かせ」

やけに楽しそうに言い合った二人は、再び剣のみでの打ち合いを始めた。

アーチャーの二本の剣による手数が多い攻撃を、ガウエインはよく防いでいる。逆に、ガウエインの重い一撃をアーチャーは受け止め損ねがちだった。流して対応しているが、時折姿勢がぐらつく。

「っ……馬鹿力め」

「力技であなたに負けたら、立つ瀬がありません」

まあ、アーチャーはアーチャーだ。本来前衛ではないはずだし、多彩な手数で戦うタイプなのだから、私のスキル禁止令は彼を充分

に不利にしている。

ちよつと悪かったかな、と思った時、アーチャーの右手の剣がガウエインの頬をかすめ、ガウエインの小手がアーチャーの左手の剣を弾いた。

私にはよくわからなかったが、何事か一応勝敗がついたらしい。彼らは距離を取って、軽く礼をした。

「……………」

…………… 純粋な戦闘力としてはアーチャーが下になるのかな？ 確かに私が持っているイメージはそんな感じだ。ゲーム中の勝敗としては逆だが…………… あれは色々と事前準備をした結果だろう。今は互いに手の内を知っているはずだから、単純な持てる力の競り合いだ。それだとやっぱりガウエインの方が強そうだ。

アーチャーは小細工、ガウエインは正統派と頭の中にインプットされた。

「…………… 非常に腹立たしいぞ、マスター」

土台を降りてきたアーチャーが、実に苦々しい顔で文句を言った。

「うん、ごめん…………… 参謀派、の方がよかったかな？ 頭脳力勝負のイメージがある」

「今の試合は勝敗を決した訳ではありませんよ、マスター」

同じく私の傍へ来たガウエインが穏やかに告げる。

「同じマスターの助けとなる英霊として、序列を決める必要はありません」

私は頷く。是非仲良くしてください。

「テイ」

皇子に声をかけられて気づいた。こんな人らと話してる私って超目立つ。自分が平凡なだけに。

周囲を見ると、思った通りかなり注目を集めていた。そんなに見つめられるとどこかに隠れたいくなる。

「……戻るぞ。絡まれる」

絡まれる？

その言葉の意味を考えて首を傾げる。素早い動作で私を置いてスタスタと逃げ出した皇子を思わず見送った。

悠然と歩いているように見えるのに、消えるのが早すぎる。一体何のスキルだ。

「君」

振り向いて思わず目を細めた。何となく眩しかったのだ。ポーズとか、ウェーブがかった長い金髪とか。顔は悪くないのに、頭はとても悪そうだ。もしこれが騎士団の正装で、人に挨拶する時はモデル立ちで右手を腰に当てて左手でさらりと髪を撫でつけないといけないのだと言われたらどうしよう。間違っても入団したくない。

「第二皇子殿下の魔術師かね？」

「はあ……」

「先ほどの兵士は君の？」

私はとつても曖昧な表情を作った。思わず相手にしたくないと思
ってしまったのである。

しかし、相手はそんな私の反応を全く意に介さず、大袈裟に両手
を広げた。

「なんて貧相な……。召喚するならもつと大きな魔物にしたまえよ。
なぜ人型を？ 大きな魔物の魅力がわからないのかね？ せめて竜
のサイズでもあればまだ見られただろうに。ああ、しようにも、あ
の程度のものしか召喚出来ないのか。それは失礼したね、精進した
まえ」

さも馬鹿にしたようなジェスチャーがやけに苛立たしい。

この異世界に来て初めて、私は「こいつ敵だ」と自発的に思った。
きつと叩きのめしても構わない。そこに遠慮なんてひとかけらも要
らないに違いない。

……というか、そもそもコレ一体誰？

第十五話 騎士団とか（後書き）

第十六話 邂逅

「そもそも魔術師など、怪しい、胡散臭い、下賤だ。そんなものを重用する第二皇子の気が知れん」

空は青い。懐でこっそり時計を見ると八時すぎだった。朝が早かったからそんなものだろうか。

『マスター』

ぐだぐだと嫌味を並べる相手に、どういつ対応をしようかと思っていると、英霊の声だけがした。ロビンフッドのようだ。

『コイツ、竜騎手のディラン・ヘストか言うらしいぜ。同職でも、エンリと比べると雲泥だな』

ええー。

皇太子殿下の配下じゃん。なんでこんなところにいるの？ 騎士団と同じ制服着ているということは、騎士なの？

『アンタはなんでここにいの？ 騎士団専用訓練場だぞ』

皇子がいたからだよ……って。

そういえばあの侍女さん！ ごく自然に私をここに連れてきたけど、宮から出るんならそう言っよ！ わかんなかったよ！

道理で長く歩いたはずだ。隣接しているのかどうかはわからないが、近い建物らしい。近いと言っても随分歩いたが。素直についていった私が悪いのか。

ちなみにロビンフッド、彼をここでボコ殴りにしたらどんな影響

が出るかな？

『あー、それはやめといた方が……。国に三人しかいない竜騎士だつてことで、ここらへんでは結構珍重されてるみてえだし……。皇子の立場を悪くするんじゃないかねえの』

駄目か……。すごく残念だ。うん、ものすつごく残念。

「……いつになく攻撃的だな」

アーチャーが首を傾げて言う。

一度くらい挫折してもらった方が彼のためかなって思うんだ。

『小首傾げながらボコ殴りを正当化するなよ』

ロビンフッドと会話をしている間にも、ガウエインとアーチャーが両脇に立ち、デイラン・ヘスと対峙している。

デイランの方は何人かのとりまきを連れているが、デイラン以外は確実に尻ごみしている。先ほどの試合を見ていたのだろう。とりまきの反応ならわかりやすいが、デイランは一体今私に喧嘩を売って、何がしたいんだろうか。

ガウエインとアーチャーの顔は割れたので、他の人に……。あ、そうだ。アサシンなんてどうだろう。李書文を召喚してみようか。そうしたら、姿を消して悪戯し放題だ。よし、それで行こう。

『……相当頭に来てるな、マスター』

もちろんだ。この金髪、よりもよって英霊を貧相だとか言ったのだ。これまで私自身が怪しい目で見られたり侮られたりすることはあっても、英霊自体は本人の力もあつてすぐ見返せたのに。さっ

きやっていた試合を見ていたかどうかは知らないが、目で追い切れない剣戟のすごさがわからない金髪野郎に文句を言う権利があるかと言っただ。

とりあえずこの金髪はボコる。今でなくてもいつか。

「……」

ガウエインとアーチャーが何とも言えない顔で私を見ていた。そんなに変なことを考えていただろうか。

「……金髪に相当恨みがあるな。レキサンドラにも随分怒っていた」「そのようですね……。……もしかして、それで私のことも苦手にされているのでしょうか」

いや！ ガウエインは違うよ！ 英霊だから別枠です！

「とりあえず金パ……。いえ、失礼致しました。デイラン・ヘス様」「僕の名前を知っているのか」

「もちろんでございます。この国で三人しかいない竜騎手ですから」

営業スマイルで相手をおだてあげる。こめかみの青筋は出来るだけ引っ込めた。

「あなたのお姿は一度拝見したら忘れられません」

でもこれは結構本気で言った。一度見たら忘れられないインパクトだ。……顔だけ見たらイケメンなのに、いろいろ残念なところとか。

「今日は大変御不快にさせたようで、申し訳ございません。これ以

上のお目汚しになりませぬよう、私はこれにて失礼させていただきます」

袋叩きは後日だ。今は人目がある。

「ふん。二度と会わないように願いたいものだな」

彼の捨て台詞を聞かなかったことにして、私はとりあえず石組みの建物の中に戻る。

前を確認せずに歩いていたら、壁の影に隠れていた誰かとぶつかりそうになり、ガウエインが相手の肩を掴んで避けさせることによってことなきを得た。

「あつ、す、スンマセン！」

慌てたように謝るのは、赤毛の少年だった。鎧ではなかったが、騎士団っぽい制服を着ている。頭だけぴよこんと下げる仕草といい、どこか全体に幼さの残る印象だった。

「あつ、あのつ、皇子殿下に言われて、俺っ」

おろおろと少年は、自分の肩を掴むガウエインを見上げている。

「……離してやったらどうだろう、ガウエイン。何も別に故意にぶつかるうとした訳じゃないみたいだし」

「は」

ガウエインは短く答えて手を離した。

少年はわずかにほっとしたようで、改めて私を見た。

「皇子殿下から、テイ様をご案内するよう申しつかつております。騎士団詰所とか、街とか。」ご覧になりたい場所があれば仰って下さい」
「え」

観光案内？ 私って一日フリーなの？ 皇子と一緒に宮廷行くんじゃないの？

「宮廷では別に護衛は要らないから、好きにしていとの仰せです」
「……ガウエイン、行ってもらえないかな？」

「御意に」

何も言わずとも察してくれたようで、ガウエインはすっと姿を消した。

あの皇子……。護衛を置いて行くとはどういう見なのだろう。そりゃあ、皇太子だった経歴もある皇子にとっては宮廷なんか自分の家のようなものかもしれないが。今は違うだろう、どう考えても敵だらけのはずだ。思えば、この騎士団にもよくのこのこと顔を出せたものである。味方も多いのかもしれないが、デイランのような敵もいたはずだ。

「……あ、ロビンフッド。ついみたいで何だけど、さっきの人の監視をお願いしてもいい？」

『何調べりゃいい？』

弱点。

『りょーかい』

ガウエインが消えて、どうしたものとおろおろしている風の少

年に声をかける。

「私は観光案内をしてもらおうかな。アーチャー、どうする？」
「……そうだな。少し調べたいことがある。何かあれば呼んでくれ」

アーチャーもまたふいと姿を消す。

目を白黒させている少年に、改めて尋ねた。

「君の名前は？」

「あっ、ロジーです！ よろしくお願いします！」

今しがたの困惑など感じさせない笑顔を返してきてくれた。

「ロジー、いくつ？」

「俺ですか？ 十五になります！」

「……十七、八かと思ってた！」

えっこれ異世界だから？ 異世界だからこんなに成長度違うの？
それにしても中学生か……。そうか……。私、女としては長身な
方だと思ってたんだけど……。

「テイ様はおいくつですか？」

「二十歳」

「えっ」

「……そうだよな、同年くらいに見えるよね。背同じくらいだし。
むしろちよっと負けてるし。」

「なんかすごい負けた気がする。成人してないだろうと皇子に言わ
れたのも頷けてしまった。」

「お、お若いですね……あつ！ 皇女殿下から、力ある魔術師は老いが遅くなるんだって聞いたことがあります！」

ロジーはなぜか、キラキラと尊敬の目を私に向けてきた。
「ごめん、たぶんそれ違うと思う。」

「皇女殿下って、ハノ様？」

「はい。俺、ラドクリフ様の従者をしてるんで、ハノ様にはよくしてもらってます」

「ラドクリフ様って？」

「えっ」

えっ。ごめん常識だった？

「す、すみません。ハノ様の近衛騎士のバース卿です」

うっ名前増えた。ハノ様付きの騎士のラドクリフさんと覚えればいいだろうか。

「君も騎士団の一員ということでもいいのかな？」

「はい。重装騎士団は、騎士だけで構成されている訳ではないので……俺は一応、見習いって扱いになります」

「ハノ様付きの近衛騎士ってことは、皇子殿下にもいるの？」

「あ……いえ、あの。オルトレート殿下には……。アルケイド様がいらっしやいますので」

「どういうこと？」

「失礼ですけど……騎士の多くは、魔術師を快く思わないので……。殿下と気の合う騎士がいらっしやらなかったと聞いてます」

「……」

ええー。

「だからその、本当に失礼なんですけど、テイ様もお一人では歩かれない方がいいです。宮廷なんかは特に騎士がうるうるしてますから」

「……わかった」

まあ、英霊がいるんだけど。

「はい。お願いします」

ロジーはにつこりすると、改めて私に質問した。

「では、どこをご覧になりたいですか？」

「……んー。観光名所とかあるだろうか」

「勿論です！ 都は古き良き建物の宝庫ですよ。歴史の中でも、内乱以外では戦火に焼かれたことがないので、古代の建造物がそのまま残っているなんて例もあります。あつ……でも、全部回るとなると、一日じゃ無理ですね」

予想外に熱い返答が返ってきた。

歴史……もしくは名所好き？ 京都の寺好きと同じイメージだろうか。目を輝かせている。

「一番古くて立派なものといえば、当然皇宮の一の郭ですね！ この数百年火事もなく、多少の補修だけで、今でももちろん皇室の方々がご使用になられているんですよ！」

いや、……うん、これは質問した私が悪かったのだろう。大人しく聞いじう。

「俺、一度でもいいから一の郭に入りたくて、見習い志願したんです。俺の身分じゃ騎士にはなれませんから、ラドクリフ様について行く機会がなければ無理ですけど」

「え、そうなの」

「だって商人の息子ですから。あ、でも騎士見習いになったつてことでいいことはあるんですよ。将来商人になるにしても、つては必要だし、礼儀作法だって学べますからね」

ニコニコと、何でもないことのようにロジーは言っている。

彼らにとつては身分差はあるのが当たり前なのだろう。それについて否やを唱える気は毛頭ないが、現代の感覚で生きていた身として違和感はある。

しかし、皇子の傍にいたデイキやアルケイド、エンリは、どちらかというと私に近い感覚だった気がする。皇子に対してへりくだっている様子はなかったし、まるで友人のようだった。皇女殿下の考え方は身分よりも能力重視の印象があった。それは格差社会の中で通用する考え方ではないはずだ。

ロジーの話ではどうやら格差社会がまかり通っているらしいので、不思議に思った。

「……もしかして革命しようとかいうノリなんだろうか」

うわあ、内乱の最中に巻き込まれたりしませんように。そればかりは祈るしかないが。

まあ、杞憂だろうけど。特にそんな素振りがあった訳でもないし。彼らは彼らとして……どちらかというに変人としての地位を確立しているようだから、それはそれでいいのかもしれない。

「テイ様？」

「ごめん。……あ、そういえばその様付けやめてもらえるだろうか」
「え、すみません。それは出来ません。そんなの見つかったら百叩きだし」

「あ、そう？ なら別にいい」

処罰を覚悟させてまで敬称を取り払わなければならない理由などないだろう。私が少々据わりの悪い思いをするだけだ。

……でも魔術師ってそれほど地位が高そうではないのに、なぜ様付けなんだろう。皇子殿下付きだからかな？

「あ、テイ様。あそこから出るんです」

騎士団宿舎の出入り口は、立派な門だった。しかし、その門は使わず、横に設けられた柵を外して外に出るらしい。私の身長より高い城壁はずっと連なっているのに、そこだけ崩れたように穴が空いている。

「……」

「正門は高貴なお方の訪問のためのものなんです。開閉に時間がかかりますし」

「……どちらかというと、この柵がちゃん作りだということが気になるかな」

「え、そうですか？ どうして？」

どうしてって、……騎士団とかだと、籠城するための砦になっていたりするんじゃないの？ 実際正門は立派な訳だし、城壁もあるのに、なぜ出入り口が木の柵？ ここから敵さん雪崩れ込んでくるんじゃないの？

「敵が来たらという想定はないの？」

「えっ？ もちろん、ありますよ？ あ、そっか、そういう意味ですみません、以前は立派な鉄の扉がついていたらしいんですけど、レジスタンスの連中が火薬を投げ込んだ時に壊れて、そのままらしいです」

やっぱりいるんだレジスタンス。嫌だな、血なまぐさいことにならないかな。

「……直さないの？」

「不当な暴力には屈しないって、上の人がなんか言っていました。直すの直さないのがどう関係あるのかよくわからないんですけど。レジスタンスの連中が壊したんだから、連中に修理させろって意味かなと思いますけど、それって無理ですよ」

無意味なプライド振りかざしそうな貴族は確かにいた。もちろんデイランのことだ。

自分たちの資金を使って直すと負けた気になるのかもしれない。わからなくもないが、共感は出来ない。

「あ、こっちですテイ様。まずはご飯食べにいきましょう。うちの近くで美味しいところがあるんです。……あ、ちょっと柄悪いですけど、テイ様そういうの大丈夫ですか？」

育ちのいい現代日本人に何を訊くのだろう、この子は。

しかし、ロギーは普通に出入りしていることだろうから大したものではないだろう。いざとなれば呂布もいるし。

「案内してくれ」

「了解しました！」

ピシッと敬礼したロジーは、さっさと慣れた道を歩きだそうとして戻ってきて私の袖を掴んだ。

「テイ様、ちよっとこっち通りましょう！」

「どうしたの？」

「さっき話したレジスタンスの連中です。たむろしてる」

騎士団の近くで？ 随分勇気のある連中だ。

「あいつら、俺みたいなのが一人していると狙ってくるんだ。レジスタンスって言うか、ただのごろつきですよ」

ぐいぐいと引つ張られるままに路地を抜けて行く。騎士団からは城下町が近いのか、入り組んだ作りになってきた。一般庶民の家と思しきものが並んでいる。玄関を可愛らしく花壇などで飾ってある、白塗りの家がほとんどだ。

「うっ、遠回りになっちゃった。テイ様、少し歩くけどいいですか？」

振り向いて話をしてくれるのはいいが、ちゃんと前を見ないと人にぶつかると忠告をしたくなった。

「うわっ」

その途端、予測した通りにロジーは道端に立っていた男に肩をぶつける。

そそっかしい。人のこと言えないが。

「すみません！」

その男はフードを被っていた。男だとわかったのは体格からだ。慌てて謝って、離れようとしたロジエを男がちらりと見た瞬間、私と目が合った。

「……」

目の色は黒。ちらりと覗いた髪の色も黒。そして何より、見覚えのある顔。こっちのテンションまでつられて下がりそうな陰鬱な視線。

切実に見なかったことにしたい。

「呂布！！」

男が動く前に、ロジエの腕をひつつかみ、呂布を呼ぶ。もっとも、私の行動が間に合ったのは、単に男が動かなかったからだろう。顕現した派手な巨人を、男はしげしげと見上げた。

「別の奴か。なるほど興味深い」

それから私の方に視線を向けた。

「ヨナが世話になったようだな」

えっ！？

普通に話をする気なの？ うっかり呂布まで出しちゃって、私完全に臨戦態勢なんだけど！ フライイング！？ 恥ずかしい！

「テイ様？ どなたですか？」

ロジーに訝しがられてるし！

「小僧などには言えぬ仲さ」

せせら笑つように男は言った。

「誤解を与えるような表現は謹んでもらえるかな」

「ふむ、少しは変わったか。怯えて口も利けぬかと思ったが」

正直足が震えてますがね。いきなり戦闘ではなく、会話なんだつたら何とかなる。多少は。

「……ヨナは？」

「回収した。まだ使えるのでな。しかし、あれほどいたぶつてくれるとは思わなかったぞ。ふ、その方が面白いと言えはそうだが」

……えー。

そんなつもりは毛頭なかったのだが……ナーサリーライム？

「なあに？」

うわっ近っ、いつからいたの!?

「ずっといたわ。この人の気配を見つけたから、追ってたの」

なるほど……。

それにしてもヨナに何したの？

「遊んであげただけよ？ まあ、マスターに手を出したことに關してはお灸をすえたけど」

やっぱりー！

なんかけっこう手ひどいことしてない？ 大丈夫！？

『精神崩壊は一步手前でやめたわ』

ヨナ……無事を祈る。そして本当にごめん。

「おまえは、この国の事情に首を突っ込む気なのか？」

え、正直パス。面倒くさそうです。

「首を突っ込んでいるのはそちらじゃないのか？ しかも組織ぐるみで」

「ふん、『放浪する者達』の集まりなど、所詮ははぐれものの集団だ。どこに行こうと気ままなもの」

「『放浪する者達』！？」

反応したのはロジーだった。

途端に腰のナイフを引き抜き、臨戦態勢になる。遅いよ、横で呂布はもうとっくに巨大な矛を構えているのに。

不審な動きをしたら即座にでも襲いかかるようにこっそり呂布を緊張させながら、私は男から目を逸らさない。なぜなら目を離したら襲ってきそつで怖いから。

「テイ様……犯罪者集団です！」

だろつねえ……。この反応ということは、一応国際的に手配されているのだろうか。

「今日はうるさい子猿を連れてきているようだな」

「あなた避けになるならいつでも連れて歩くんだけど」

「嫌われたものだ」

男は肩を竦め、じんわりとした闇を宿す目を私に戻した。

「どちらかというところ、おまえには同じ匂いを感じるのだが、な……？」

ニツと唇がつりあがる。怖い、目が暗いから全く笑っているように見えない。

「まあいい。いずれまた」

数歩下がった男は、意外なことに、くるりと身を翻すと走ってその場を去った。

前みたいにスツと消えたりしないんだ……？

「……………うつつ」

ロジーが地面に座り込んだ。立っている私を見上げて、恨めしそつに言っつ。

「……………なんで、平気なんですかあ……………テイ様」

「え」

それは申し訳ないことながら、危険を感じる本能という部分が欠落しているためかと思われます。もっと身に迫らないとそんな過剰な反応は出来ないの。恐ろしかったし、足は竦んだが、話せるというだけでつい安心してしまったのも事実だ。

ロジーみたいなのが正当な反応なんだろう。確かに怖かったし。

「……なんで都にいたんだろう」

『誰かと会っていたわ。煌びやかな衣装の人』

「誰かはわかんない？」

『ごめんね。少しお年を召したおば様だったけど』

煌びやかな衣装の、お年を召したおば様。

……皇妃とかじゃないよね？

「テイ様？ 誰とお話を……」

「あ、うん。ごめん」

『あたしはもう少しだけ追いかけるわ。潜入ごっこみたいで楽しい』
の

「……そか。じゃ、よろしく。気をつけて」

ナーサリーライムの気配が消えたことを感じて、私はロジーに手を貸した。

「なんでもないよ。少しうちのサーヴァントと話していただけだから」

「そうなんですか？ でかいですよねえ」

ロジーは呂布を見上げて感嘆の声を上げる。

……呂布のことじゃなかったんだけど、まあいいか。

「呂布、姿を消して」

めっちゃ人目引いてるから。

……ハッ！？ 今消すのもマズイ！？

と思ったが、消えた後だった。……ま、まあ、いいや……。うん、最初からいなかったみたいな顔してこの場を去ろう。

「よし、逃げよう」

「えっ！？ 何から？」

「噂になる前に、人目から」

「あっ、そうですね。……もう遅いと思いますけど」
「……………」

わかってるよ、言うなよ！

第十七話 観光案内

「ここが後宮です」

意気揚々とロジーが案内してくれた。少し開けた印象の建物だ。正門はなく、窓は大きく、衝立のようなもので内部は仕切られている。

「というか……来ていいの？ 一般公開されてるの？」

「一応、建前は男子禁制らしいんですけど、今の時代そんな規則は守られてないって言った方がいいですね。皇子皇女問わず、皇室のお方はある一定の年齢までここでお暮しになるんです」

子供の時期だけ、ということだろうか。

「男子禁制」

「大丈夫ですよ、咎められることは絶対ありませんよ。ここだけの話、ここの出入りはそんなに厳しくないんです。高貴なお方は何かと暇を持って余してらっしゃいますからね」

「不審者対策っていうのはないの」「ないです」

断言しないでください。

皇子とか皇女とか、よくそれで無事だな。

「いえ、でも、基本的には高貴なお方ばかりですから、個人個人で護衛の騎士や私兵を持っています。後宮付きの護衛官もいますし、騒ぎが起きたらすぐ駆けつけますから」

「……うん、まあ考えないことにした」

現代日本と比べてはいけない。治安もきつとよくはないのだろう。何処へ行っても自分の身は自分で守れということだ。……守れないけど。英霊さんたちに守ってもらっちゃってるけど。

「テイじゃないか」

軽く手を挙げて、気軽に近づいてきた男性の顔には見覚えがあった。

「エンリじゃないか……なんでこんなところで会った」

後宮で何してをしているんだろうか。そこはかたなく背徳の香りが漂うのだが。

「いや、俺は……おまえこそどうした」

「観光案内してもらってる」

ロジーを示すと、彼は興奮した目つきでエンリに言った。

「エンリ様ですね！ あっ、俺ロジーです、ラドクリフ様の従者の

……」

「ああ、皇女殿下の」

「はいっ！ お会いできて光栄です！」

「観光案内……。おまえ護衛役だろ、オルトレート様の」

「ついてきて欲しくないみたいだったから、ガウエインに頼んだ。姿を消せる彼の方がいい」

「あー」

エンリは溜息を吐いた。

「変なところで見栄っ張りだからな、あの人も」

「見栄？」

「まあ、宮廷内で襲撃されることはまずないだろ。あの人、結構人望あるんだぜ、こっちでも」

不思議だが。

「で、エンリは誰に会いに来たの」

「蒸し返すか」

「当たり前だろう、気になるに決まってる」

実はちよつとウキウキしている。秘密の恋とやらだろうか。他人事である分にはただの娯楽だ。

しかし高まりすぎて、駆け落ちとか決行するような話になって、国外逃亡の手段を相談されたらどうしよう。

……やっぱり、詳細を知るのはやめておこう。

「やっぱりいい」

「何だよ、いきなり手の平返すなよ。言っとくけど色恋じゃないぞ」

「何だ違うの」

「違うっつの。お子様方がいるだろ、ここには」

「えー」

竜の話をせがまれて、とかそういうことだろうか。何だ。期待して損した。

「がっかりしたような顔するな。……そうだ、せつかくだからおまえも会っていくか？」

「何歳くらい？」

「五歳の利発な皇子だ」

「……見たい」

五歳か。やんちゃな盛りじゃないか。

いや、しかし皇室のお子様ともなれば品格とかそついつのが違ったりするんだろうか。

……それはそれで可愛い気がする！

「……あ、ちよつと待ってエンリ」

「何だ？」

「皇帝陛下つて年、いくつ？」

エンリはちよつと面白そうな顔をした。

「六十六だ」

六十歳の時の子供か！！

……えっそれって有り……？ 歴史を紐解けば日本にもあつたかも……？ しかし現代の常識から考えるとすごい。子供じゃなくて、いつそ孫の領域だ。

「末の皇子だから、継承権にはほとんど関わりがない。そついう意味では気楽な相手さ。母君も気さくな人だしな」

エンリはこそつと言った。

「そついえば、母君つて？」

「フォス領主令嬢だ」

「わからない」

「そりゃそつか」

うーんと説明を考えるような顔をしたエンリに変わって、ロジエがにこにこ言った。

「フォス領っていうと乳製品の盛んなところですよねえ。ここよりちよつと北にある避暑地です、長閑でいい観光地ですよ、テイ様」

地理も特産品も万全か。さすがだ、商人の息子。

エンリの後についていくと、後宮に住んでいるらしい女官に何度か会ったが、特に気にされることもなかった。

本当に素通りだった。恐らくいないものとして扱われているのだろう。

「……エンリ、あとどれくらい歩くの？」

「ん？ まだ半分くらいだぞ」

徒歩圏広すぎるよ！！

しかも今日は朝から歩いているのだ。歩きすぎだ。

いつもだつたら絶対に疲労で歩けなくなるし、数時間後くらいに筋肉痛になるが……今の私はどうだろう？ 竜騒動で使わない筋肉を総動員していた気がしたが、それでも身体の調子が悪くはならない。

地味にそんなところも改造されているのか。……くそう、レキサンドラ……会ったら殴る理由が増えた。

疲れないのはいいことかもしれないが、勝手に肉体改造されているかと思うと非常に気分が悪いのだ。

「そういえば、イリイはどうした？」

「ここに来れる訳ないだろう。あいつは休暇。呼べば来るしな」

「エンリ、ディランって人を……」

「会ったのか」

まあ、当然、知っているか。三人しかいない竜騎士だということは、数少ない同僚だということだろうし……。

そう思うと、エンリが哀れになってきた。まだ短い付き合いだが、アレに比べれば彼はとつても常識人だ。付き合うのは辛かるう。

「えーと、親しいか？」

「いや、全然」

「同僚なのにな？」

「ウエルダー……ああ、もう一人の竜騎士となら親しいと言えるけどな。ディランは比較的だが、竜騎手としては新入りなんだ。俺は第二皇子についてあっちの領で過ごしてるから、あんまり会いもない」

「へえ。ウエルダーさんっていうのは？」

「皇帝陛下の竜の乗り手だ。まあ、竜自体、結構な年だから滅多に飛ばないけど」

エンリは歩く速度を緩め、一つの扉をノックした。

両開きの立派な扉が、中から侍女らしき女性によって開けられる。

「エンリ様。お待ちしておりました。中へどうぞ」

にこやかな侍女さんに招かれて入ると、その部屋は控えだったらしく、もう一枚扉がある。

そこを開けると、やけに広い部屋だった。窓が大きく、日差しが入って明るい。白いテーブルには、簡素なドレスをまとった女性が座っていた。

「エンリ、よく来てくれました」

立ち上がる仕草もにこやかな微笑も、やけに様になる女性だ。穏やかそうだが、その肌は日に焼けていて、健康的な輝きを放っている。にきびひとつなく綺麗ではあるのだが、こんな後宮の中で見るには、いつそ不思議なくらい、庶民的な印象を受けた。ドレスを着ている人を見て庶民的だと思うなんて、もはや日本の感覚ではない。私も徐々にこつちの人の服装に慣れつつあるらしい。そのドレスに隠れるようにしていた男の子が、エンリを見つけて飛び出す。

「エンリ！」

「クラウス様。いい子にされてましたか」

エンリは軽々と男の子を抱き上げると、高い高いの要領で振りまわす。危なそうなので距離を取った私に、ロギーがこそつと言った。

「……あ、あの、いいんですかね」

「えっ何が」

一緒に入ってきたことが？ 今更だと思っが。

「いえ、あの、皇……皇子殿下のお体を、あんな風に」

えっごめん、どういう意味かわかんない。

疑問符を表情で読み取ったのか、ロギーが信じられないという顔をした。

「皇子殿下の玉体にあんな気軽に触れるなんて、俺がやったら敵罰ものですよ！……あっ、エンリ様はいいのかな」

「えっ。……」

世話どうするの？

皇子であるうが何だろうが、五歳の子供に触れずに世話するなんて、無理だろう。

「いいですよ」

くすくすと笑って、女性がとりなしてくれた。

「体に触れずして、どうやって子供を育てることが出来ましょうか。もちろん、人目のあるところでは出来ないことですが、今ここにはあなた方と私達しかおりません。……構わないのでしょうか、エンリ？」

「ええ。そちのロジーはバース卿の従者だというし、もう一人はテイ、オルトレート様の魔術師です。素性というか、まあ、どっちも主の性格があんなんですからね」

エンリは苦笑して言う。皇室の二人に対してそんな表現を使ってもいいのだろうか。

「テイ、おまえは何もおかしいなんて思わなかっただろう？」

「……まあ」

「悪いことじゃないから気にすんな。ただ、確かにそういう風潮はあるから、皇室の方々に気軽に触れると、反逆の意があると見做されるということには覚えておいた方がいい」

反逆とまで。

皇室の人って大変だ……。いや、それと付き合い合わねばならない方が大変なのだろうか。

「わかった」

ロジーは頭を悩ませていたようだが、見て見ぬふりをすることにしたらしい。何も言わなかった。

「テイ、こちらが元フォス領令嬢、ジェシカ様だ。ご子息のクラウド様」

「よろしくお願ひします」

「あらあら、こちらこそ。あなたが噂の魔術師ね？ 会えて光栄よ」

「噂とは……？」

「オルトレート様のお命を守ったんでしよう、竜から」

ニコニコと笑いながらジェシカ様が言った。

情報早っ。昨日のことのはずだけど。

「その姿を詩人にでも聞かせれば、物語がひとつ出来上がりそうだしわ」

「それは遠慮したいですが」

「あら、そう？」

間違っても格好のつく話にはならない。基本的に腰を抜かしていたし。

「そういえば、そう、召喚をするのだったわね。クラウドが見たいと言って聞かなかったのよ」

「皇子殿下が？」

視線を向けると、クラウド殿下はエンリの足の後ろにシュッと隠れた。

なぜに。

「クラウド。そんな態度をとってはいけませんよ」

言葉は優しいが、いや表情も優しいのだが、ジェシカ様はにこやかにクラウド殿下を私の前に無理やり引きずり出した。教育ママだ。

「ちゃんとご挨拶なさい」

「は、はじめまして」

ぺこんと頭を下げる皇子。なんかすごく普通の子だった。顔は将来美形になるのが目に見えているような可愛さなのだが、おどおどとした仕草といい、とても皇子とは思えない。

「初めまして、皇子殿下。魔術師のテイと言います」

あんまり可愛かったのでニコニコしながら挨拶を返した。やっぱり子供っていいよね！

「あ、あの、しょうかん……」

一度挨拶してしまえば、初対面の人に対する怯えより、好奇心が勝ったのか、おどおどしつつもクラウド殿下が言ってくる。

これはやっぱり召喚を見せて欲しいと言っ意味だろうか。

…… 呂布は見応えあるけど、怯えそうだなあ。

ロビンフッド辺りは気安く相手をしてくれそうだけど、仕事を頼んでしまっている。

というか今、呂布以外軒並みいない。

いや、考えてみれば、竜の話を知りたいとせがむお子様だ。意外と呂布で大丈夫かもしれない。ジェシカ様の方を見るとにっこりと笑って頷いてくれた。

「……。呂布」

怯えられるかなー、大丈夫かなーと思いながら彼に顕現してもらう。しかし予想に反して、クラウス殿下は目を輝かせた。

「かつこいいー!!」

そして全く怯えることなく、呂布のすね当てにしがみついた。表情の変わるはずのない呂布も、若干困って見えるから不思議だ。

「遊んであげ……いや、丁寧に、怪我をさせないように、遊んであげて下さい」

「あら、テイさん。そんなに気を使っていたただかなくとも大丈夫ですのよ。これで、剣なども習っている身ですから」

五歳にして剣!? 普通のお子様かと思いきや生活はハードらしい。

……持てるの?

「専用の剣があるのよ。このくらいの」

ジェシカ様には私の疑問がわかったようで、手の平と手の平で長さを作ってくれた。三十センチ物差しより少し長いくらい。

クラウス殿下は、呂布の肩に乗せてもらってきゃっきゃと喜んでいる。

無邪気な子供の笑顔っていうのは……いいものだ……。癒される。でも頭の触角……みたいな形をした飾り、ぐいぐい引っ張られているけど、いいんだろうか。

「テイさん、よければあなたも、時々クラウドに顔を見せに来てやってもらえないかしら」

クラウド殿下に聞こえないよう、ジェシカ様は私を少し離れたところに手招いて言った。

「皇子だというだけで敬われるし、ろくに友達もいないの。一つ間違えば、卑屈にも傲慢にもなる環境だから、もっと他の世界を見せてあげて欲しいのよ。もちろん、出来れば、で構わないけれど」

私は少し不思議に思った。私の不当な貴族のイメージを覆すくらいには、彼女は立派な女性だ、子供のためを思って考える母親だ。しかし、だからこそ不思議である。後宮ではいい暮らしが出来るから、もしくは権力を振るえるからと嫁いでくるような女性には見えない。

ただの好奇心で口を開いた。

「……なぜあなたがこの後宮にいるのかお尋ねしてもいいですか？」

彼女は虚を突かれたように目を見張り、寂しそうに笑った。

「そうね……逃げたいと、昔は思ったかしら」

なるほど、聞くまでもなかった。

皇帝陛下が、年齢に釣り合わない若々しい側室を望んだとしても、その権力からすれば当然のことなのだろう。

おまけに、一見して三十を超えていないように見える彼女の年齢からすると、嫁いだ当時既に皇太子も皇子もいた可能性がある。それはどういう気持ちなのか。少なくとも、虚飾に興味のなさそうな彼女にとって喜ばしいことではないとは、想像に難くない。

視線を感じて顔を向けると、エンリと目が合った。

彼は私を見て、なんだか思案げな顔をしている。

ジェシカ様が呂布で遊んでいるクラウス殿下の傍へ行ったのを見計らって、尋ねてみた。

「何かまずかったか」

「……いや……ただ、ジェシカ様が言われたとしても、ここへ出入りするのには避けた方がいい」

当たり前ですー！ 後宮なんて怖くて一人で入れませんー！

という内心の叫びは覆い隠して、首を傾げる。

「なぜ？」

「あの感覚をお持ちなのは、ここではジェシカ様だけだと言って過言じゃないからだ」

「……他の方は、魔術師に偏見が？」

「魔術師だけに偏見がある訳じゃないが、まあ、そういうことだ。女性なら特にだな。竜に乗る女性を見たことあるか？」

ここに一人。

まあ、それは別だろう。そう何度も竜の飛翔を見ている訳ではないが、彼がこういう言い方をするなら、ない、ということなのか。

「口を揃えて『まあ、恐ろしい』と言うだろうよ。乗ってみるかとも言おうもんなら、蔑んだ目で見られる。『そんな野蛮なこと、するはずがないでしょう』とかな」

「実際に目の前に例がいたみたいない言い方だな」

「いるんだよ、山ほど」

竜騎手でそうなら、地位の確立していない魔術師なんて余計だろ

う。

社交界怖い。

「きゃー！」

高い声が室内に響いた。クラウド殿下の喜びの声である。エンリがやった高い高いより余程高い位置に体を持っていかれて、それでも怖がらず喜んでいるクラウド殿下は意外と大物だ。私より先に呂布と打ち解けるとは。

「……エンリ、クラウド殿下が皇帝になる可能性って」

「他の皇子殿下が全員失権すれば、ないこともないな」

「末の皇子だから？」

「いや、こう言っちゃなんだが、ジェシカ様のご身分が低いからだ」

やっぱりここでも母親の地位が優位なのか。

「だからこそ、この後宮でも割とこの辺は平和なんだ。眼中にない、というやつだな」

「やっぱり後宮の権力争いってひどいの」

「ひどいな。特に、この国では、皇子が皇太子になれるかどうかは女性の身分に関わるから」

特に声をひそめる訳でもなく会話をしているから、ジェシカ様の耳に入っていない訳ではないだろうが、彼女は特に気にする素振りも見せず、クラウド殿下の様子を見て微笑んでいる。

「……。テイ様」

居心地悪そうに、ロジーが私の袖を引っ張った。

「俺どうにも見てられないんですけど……。本当にアレ、大丈夫ですか」

「何？」

「怪我、させたりしません？」

「……」

呂布の手つきは壊れものでも扱うかのように慎重だ。見ていて危なげもない。彼の手の平は実に繊細に五歳の子供を扱っている。

「たぶん」

「そんな自信ないような返事しないで下さいよお」

ロジーが半泣きになってきた。仕方がないので、呂布に遊ぶのはやめてもらう。

「すみません、殿下。そろそろおやめになって、またの機会に、ということにしていただけませんか」

相手の動きが止まっても、なお飛びかかろうとするクラウド殿下との間に割って入る。

クラウド殿下は息が上がっている。しかしその目はまだまだ遊び足りないと言っていた。意外だな呂布。子守の才能とかあるのか！

「またの機会に致しましょう。その時は他の者も紹介させてもらいます」

「もつといるの!？」

「ええ。きつとお楽しみいただけるでしょう」

「会いたい!」

「次の機会にとっておきましょう、殿下。そうされた方が、楽しみ

と言つのは大きくなるものですよ」

また機会があったら、ナーサリーライムも紹介しよう。この子は何の含みもないだろうから、きつと普通に遊んでくれるだろう。…ヨナとは違って。

ジェシカ様とクラウドス殿下に挨拶をして、後宮を後にする。

「は……緊張した」

門を出て、ロジーが深いため息を吐いた。

「なんだ、情けないな。バース卿の従者ならもつと勇壮でもいいんじゃないか？」

「無茶言わないで下さいよう、強いのはラドクリフ様であって俺じゃないんです」

何も言わずにどんどん進む彼ら二人についていくと、あつという間に路地の入り組む街中に入った。

地元民め。目的地を言ってから進んで下さい！

「どこへ向かっているんだ？」

「え？ あつ、皇子の宮です、すみません」

ロジーが慌てたように言った。

「なんだ、こっちから来たんじゃないのか？」

「え！？」

まさかこれ、来た道？

駄目だ、私ここで生きて行く自信失くした。元からあんまりなか

ったけど。

『大丈夫だって。意外と凶太く生きてんじゃん』

ロビンフッド……。それ褒めてるの？

『それより報告。ディラン・ヘスの周辺について、今執心な女と、過去に付き合った女、それから母親の浪費癖とか両親と折り合い悪いとかとりまきのこととか色々調べてきたけど、今聞きますか？』

一日でそれはすごい。いったいどうやったのか。

ていうか今箇条書きにしてくれたから、大体わかった。詳細は後で聞こう。

アーチャーが何調べてるかとかはわかる？

『皇女さんの私室を調べてるようだけ』

「……え!?!」

思わず振り返って、ロビンフッドのいるはずの背後を見た。

『ちょ、マスター。不審がられてるって』

「あっ」

ロジーとエンリが何事かと私を見ていた。

「いや、あの」

「何かあったのか？」

英霊と話していることに勘付いたのだろう、エンリが少し厳しい顔でそう尋ねた。

「殿下の身に？」

「いや、そんな緊急性を要する話じゃない……」

でもこれ内訳を素直に言つとマズイよね？ 私の配下っていう位置扱いの英霊が皇女様の私室に忍び込んだとか、結構ヤバイよね？

「こ、個人的なことだ。驚かせてすまん」
「……」

エンリは少し納得いかないような顔をしていたが、それでもそれ以上の詰問は引つ込めてくれた。

……ていうかアーチャー何があつたの。

『さあ。俺が知る訳ないつしよ』

だよーねー。

第十七話 観光案内（後書き）

うーん、英霊が活躍しない話が続いてしまいました……。

第十八話 閑話休題

『マスター、非常事態を申告する。指示してくれ』

いつになく困惑したアーチャーの声が脳裏に響いたのは、エンリと別れ、ロギーと共に皇子の宮へ戻る道中だった。

どうやらアーチャーは傍にいない。遠くからでも彼らの声が聞こえるというのは新発見ではなからうか。

『呑気に構えている場合ではないぞ』

とはいっても、説明してもらわねばどうとも とまさに呑気に構えていた私の目の前、白い塀の向こうからにゅるんとツタのようなものが横切った。人の指先くらいの長さだ。

黒いゼリー状の何か。紫の混じったえげつない色合いには、何やら見覚えがある。

「……………」

「テイ様、何でしょうコレ」

単純に不思議に思ったらしいロギーが、若干の警戒をしつつのことと近づいていこうとするのを、慌てて止めた。

アーチャーに状況の説明を要求する！

『見たままだ』

もうちよっと詳しく！

『皇女の宮に、何やら魔術関係のものがしまつてあるらしい一角があるのだが、そこから逃げ出したようだ』

なんかこれ、私のせいだったり……。

『するだろうな。魔力の質を見るに、マスターのものと同質だ』

私の魔力ってこんなえげつない色してるのか。

『いや、色は無関係だ。モンスターの許容量を超えたせいだろう、と皇女が言っていた』

で、アーチャーはどこにいて、何をしてらっしゃるんでしょう。

『皇女の宮で避難誘導に付き合わされている……。必要ならそちらへ向かう』

え……いや、いいんだけどね？ それも大事だろうから手伝ってあげてください。

「テイ様、あの？」

私に腕を掴まれたままのロジーが、困惑した面持ちで私の顔を覗き込んだ。

「どうかなさつたんですか」

人差し指のような大きさだったツタが、不意に方向転換をして私の方へ向かってきた。見る間に腕の太さになり、人の大きさになり、留まるところを知らないかのように巨大化する。触手とかマニアッ

クー！ とか言ってる場合でもない。

「うわ……っ！ 何だ!？」

慌てたロジーが武器を引き抜くが、そんなものでどうにか出来そうなのではない。

ていうかどうしよう。私にもどうにも出来そうにない。

『ありやー、無理だわー、触りたくないし。竜でも呼んで焼き払ってもらっしかなくね?』

いやどうにかしてくれロビンフッド。さっき別れたエンリを追いかけても、彼を捕まえる前に私が捕まること請け合いだ。

『英霊にも向き不向きってあると思うぜ。……あれが薬の効く体質ならいいが』

シュンツ、と私の背後から放たれた矢が白い軌跡を描き、スライムのぶよぶよとした腹に吸い込まれるようにして消えた。

『やっぱ齒ア立たねえわ』

使えない……っ！

しかし、もしかすると剣なども矢と同じかもしれない。向かって行って吸い込まれるのは非常にイヤだ。

『てか、マスター。ありやちまちまと突っついてもどうにもならないんじゃないですかね。それこそ、ライダーの火力でもねエと……』

ロジーと共にじりじり後退しているが、家や道はどうにもならな

い。スライムの重みに耐えかね、塀や街路樹が倒れ始めた。
と思うと、内部に取り込まれたものがじんわりと溶けだし、形を失って行く。人でアレ見たくない！

『……あれってやっぱマスターを追いかけてきてんのかね』

考えないようにしてたのに！
ていうかライダー召喚すればいいんだよね！ 彼女ならきつと蹴散らしてくれるよね！

「騎士団だ！」

ロジーの喜びに満ちた声に、私は振り向いた。舗装された道を、武装した集団が馬に乗ってやってくる。

……馬？

馬じゃなかった。背中に小さな翼がついている。真っ白という訳でもなく、馬の体色によって様々に違う色合いだが、その姿は私に伝説の馬を思い起こさせた。

ペガサスとは……。でもあの大きさを飛べるんだろうか。

「退けい!!」

怒号が響く。

今度はロジーに引つ張られて、私は家の角に引つ込んだ。

先頭の馬に乗った騎士が、やたらに巨大な盾を翳したと思うと、その盾が陽光を反射して白金に光る。それに焼かれたかのようにスライムの動きが止まった。次々と追いついてきた騎士たちが盾を翳し、スライムの周囲を取り囲んでいく。巨大化し続けるかに思えたスライムの体が、ほんの少し縮まったようにも見えた。

「テイ様、俺も援護に行つてきます!」

私を物陰に押しやると、ロジーが決意を秘めた顔で騎士団の方に走つて行く。

馬上の誰かに声をかけているようだ。口髭を生やした鋭角の顔がチラツと兜の隙間から見える。その馬の隣りに立ったところを見ると、噂のラドクリフ様だろうか。

「……で、アンタは援護しなくていいんすか」

ロビンフッドが私の隣に立つて言った。

「や、うん……これでどうにかなるなら手を出さないでおこうかな」と

しかし、スライムを囲んで陣形を取った騎士たちの間からは、やけに絶望的な声が漏れてきた。

「これからどうする!?!」

えええ。対策もなく飛び込んできたんですか。

「……。どうにもならないみたいだ。呼ぼう」

まだまともな給金ももらっていない私には、彼女への報酬を用意出来るかどうか若干の不安があるが。

「フランシス・ドレイク」

辺りを見回すと、見間違えようのないピンクの髪をばさりとたな

びかせて、彼女は屋根の上に現れた。

せめて召喚の瞬間くらいはあつと光るエフェクトでもあればいいのに。分かりづらい。

「はーっはっはア！！ 面白いトコだねここは！ 誰を攻撃すりゃいいんだい、マスター！？ その金ぴかした奴らかい？」

やっべアレ私にどうにか出来る気がしない。

「聞こえてるよー！」

どうにかして欲しいのはスライムの方です、姐さん。

「金は！？」

「皇女殿下の懐から出してもらえばいいと思う。彼女が原因だからきつと渋らない」

屋根の上にいる彼女に聞こえる声量ではないだろうが、ドレイクとは別のつながりがある。というかなぜ、この喧騒の中、ドレイクの声があれだけ通るのが謎だ。

「よっしやあ行くよ！ 野郎ども！！」

彼女の背後に黒い渦が現れ、何隻もの船がそこから飛び出し、空中に浮かぶ。彼女の宝具、『ゴールデン黄金鹿と嵐の夜ワイルドハント』だ。騎士たちがざわめき、陣形を乱す者も現れ始める。

だがそんなことを全く意に介さない彼女は、片手を挙げて合図する。実に凜々しい立ち姿だ。

「やっちまいなア！！」

居並ぶ船の大砲が火を吹き、狙い違わずスライムに激しく攻撃した。スライムは、攻撃を消化しきる前に次々と燃え盛る鉄の塊を打ちこまれ、歪な形に歪んで弾ける。次々と着弾する砲丸の衝撃に騎士たちが体勢を乱すが、留めるものがなくともスライムはそれ以上増殖する様子もなかった。

それでも砲撃は止まらず、地面に穴をあけるほどの激しさで辺りを覆う。騎士団は、彼らというより馬が先に恐慌状態に陥ったのか、我先に慌てた馬が走って行った。

一頭の馬がこちらへ向かってくる。砲弾の衝撃でパニックに陥ったらしく、泡を吹いている。

「これってやばくない」

「とか言ってる間にせめて避けるという行動をとろうぜ、マスター」

近くの屋根の縁に手をかけたロビンフッドが、私の腕を掴んで引っ張り上げてくれた。腕抜けそうだが、足元を激しい勢いで走り去っていく馬とそれに手を焼く騎士を見ると文句を言う気にはならない。

この辺りは雨があまり降らないのか、引っ張り上げられた屋根は平たく、立ちやすい。近くに洗濯物が干してあった。生活臭がする。他人の家に乗っちゃっていいんだらうか。

「……あれ、意外に平気なんスね、マスター」

「何が？」

「高所」

「いや、高所恐怖症って訳ではないし」

竜の上に比べれば、屋根の上がなんぼのもんという感じである。

「なるほど、竜の上が怖かったと。俺今、あそこに立ってる姐さんも怖いんですがね」
「私もだ」

屋根の上でスライムの行く末を見ているドレイクはなぜか高笑いをしている。悪役がとても似合いそうだ。倒しているのはスライムだが。

「こんなもんだろ、マスター」

原型をとどめないほど飛び散ったスライムが再生しないことを念入りに確認し、ドレイクが屋根を跳び移ってきた。

かつんとヒールで音を立て、私の前に立った彼女の　　つい胸に目が行く。実に豊満なお胸様だ。

「どうだい？」

自信に満ちたどや顔が眩しい。

「ありがとう。報酬の方はこれから皇女と談判するよ。なんなら自分でもぎ取ってくれてもいいけど」

「ふん……まあ、初陣だしね。そこらへんはマスターに任せるよ。新入りがあんまり出しゃばるのもよくない」

ドレイクは肩を竦める。

「で、あとはどうするんだい？　逃げるのかい？」

うむ、逃げる。

と頷きそうになった瞬間、アーチャーがフツと目の前に現れた。

「マスター、すまん。事態は収束したようだな」

「皇女殿下は？」

「無事だ。彼女の騎士だという男がマスターと話したらしい」

「え、どこにいるの？」

「今、そこにいる」

えっ、逃げる選択肢が消えた。

「逃げるつもりだったのか？ それは差し障りがあると思うが」

「……まあ、そりゃそうか……」

後始末だけして逃げるなんて、まるでスライムを放った犯人のようだ。魔術師だし、あらぬ疑いもかかりやすいだろう。

皇女殿下の騎士とやらはそれを回避しようとしてくれているのかもしれないが、出頭する気分である。アーチャーの手を借りて地面に降りた。

……この道路、どうするんだろう。ところどころにスライムの残骸が飛び散り、地面が陥没している。スライムの残骸は、皇女殿下の部屋で見たような半透明の寒天に戻っていた。これ、触ったらまた巨大化するのだろうか。

「ドレイクの宝具って破壊兵器だな……」

「それでも結構出力を抑えたんだよ」

「……わお」

肩を竦めるドレイクを見ながら、彼女の最大出力で敵を殲滅するような機会なんてないといいな、と思考が横滑りする。

「テイ様！」

馬を引きながら、ロジーが走ってきた。
背中に小さな翼の生えた馬は、少し乗りにくそうだ。

「ラドクリフ様です」

ロジーが手を翳した方から、背の高い男性が近づいてくる。盾を持っていた騎士の一人だろう、その口髭にはチラツと見た覚えがある。髪や髭の色は白いが、顔立ちからはそれほど年をとっているようにも見えない。

「初めまして。君の話はハノ殿下から伺っている」

「……どうも、テイです」

差し出された手に一瞬困惑したが、待たせるのは悪いと思ってその手を握る。厚い手袋に覆われた手が、力強く私の手を握り返した。

「今回は、殿下の気紛れに突き合わせた拳句、迷惑をかけたようだな。申し訳ない」

「いいえ」

「場所を変えよう、少し話を聞きたい」

私を促し、大掃除の始まった地帯から移動するように歩き始めた彼の後を追う。

「先ほどの攻撃は君が？」

「……私のサーヴァントが」

「皇女殿下が、喉から手が出るほど欲しがりそうな逸材だな、君は」

「はあ」

「君は魔術師だということだが、所属を聞いてもいいかね？」

「『彼方の賢人』です」

殿下から聞いているらしく、彼は大した反応を見せなかった。

「『彼方の賢人』はこの国に関わるつもりがあるのかね？ 言っているのはなんだが、魔術師にとって利益のある国ではないが」

私に『彼方の賢人』の方針を訊かれても困るが、代表者がレキシヤンドラかセドリックであれば、この国に関わることは彼らの意向であると言って差し支えないような気もする。

かといってやはり代表者ではない私が勝手に答えるのも問題がある気がするので、私は首を振った。

「ここにいるのは私個人の事情です」

「では、第二皇子に帰属する形になるのか？」

「この国での私の立ち位置は、そうなりますね」

魔術師って面倒臭い職業だな……。目の前の相手は一人の主に仕えて忠義を示すのが仕事の騎士様だ。胡散臭いと思われても仕方のないことかもしれない。

「この国ではない場所なら？」

何気なく訊かれた質問に、私は慎重に答えた。

「それは恐らく貴方には関係のないことでしょう」

他の立場でこの国に関わることはないと言わせたニュアンスを、受け取ってくれるだろうか。

ラドクリフさんは口の端を挙げた。

「そうか」

「そうです」

「ならいい。今後の予定は？ よければ皇女殿下の宮へ来てもらえるかね？」

「構いません」

「本来はこちらが赴かねばならないところだ。感謝する」

ラドクリフは、近くにいた他の騎士と何事か話すと、その騎士から馬の手綱を受け取ってその馬に跨った。

追いかけて来ていたロジーが、私に馬の手綱を差し出す。恐らくはラドクリフさんの馬だろう。

「乗れますか？」

「乗れません」

「えっ!？」

えっ？ どうしてそんなに驚くんだろうか。

「えーと、大丈夫ですよ。翔馬はとても賢い種類です。上に乗った人間を振り落したりしないし、初めて乗るんだとしても乗れるものです。長い距離は慣れないと難しいかもしれませんが」

そして彼は一言付け加えた。

「翔馬に乗ったことがないなんて。足が悪い訳でもありませんよ、移動はずっと騎車だったんですか？」

乗り物と言えば竜くらいしか乗ったことがありません。

騎車ってなんだろう。馬車みたいなものだろうか。何が曳いてい

るのが気になるところだ。

「いや……うん……。他の乗り物があつたから」

嘘ではない。グリフォンとか。もう乗りたくないけれども。

「飛び乗れってことかな？」

手綱はとりあえず受け取ったが、私の知っている馬以上の体軀を持ち、おまけに邪魔なところに翼もついているような生き物に、どうやって乗ればいいのかさっぱりだ。鞍もあるし、馬装らしきものもしているが、鐙に足をかける時点で難しい。

だが、それは杞憂だった。私が手綱を持ったと知るや、その馬は前足を折って私の前に首を下げたからだ。

乗れと言わんばかり。異世界動物ってすごいな、と思いつながら備え付けられた鞍にまたがると、ロジーが感心したように言った。

「俺が頭を下げさせるまでもなかったですね」

「ロジーはどうするの？」

「あ、俺はこの片づけを手伝います。ラドクリフ様についてって下さい」

「わかった、今日はありがとう。面白かったよ、観光案内」

「いえ、俺も楽しかったです」

「また機会があれば」

苦笑するロジーに手を振り、英霊たちを見る。視線が合うと、彼らは姿を消した。気配はある。ついてくるようだ。

騎乗したまま待つていたラドクリフさんの方を見ると、私の乗っている翔馬が緩い速度で進み始めた。

背中の方にある翼が、心なしか歩く度パタパタしている気がする。

「懐かれているようだな？ 君は、異詠士もこなせるのか？」

「なんですかそれ」

「……？ 魔物の声を聞くことのできる二級魔術師のことをそう言うんだと思ったが」

訝しげに首を傾げながらも教えてくれるラドクリフさんはいい人だ。

「なるほど。いえ、違います」

「そうか。もしそうなら調整を頼みたかったんだが、仕方ないな」

「なぜですか？」

「常に人手不足だ。家畜化した魔物も少なくはないのに、竜騎手ほどではないが異詠士も数が少ない」

調教師みたいなものなんだろうか。だとしたら確かに困るかもしれない。騎士団が乗っていた翔馬だけでも結構な数だ。

「竜騎手とは違うんですか？」

「一緒にするとディラン辺りが怒るだろうな」

あー。

「違うらしい。講釈が聞きたいなら皇女殿下に依頼するといい。喜んで教えてくれるだろう」

ラドクリフさんが進む速度を緩め、馬上から降りる。それに従おうと思ったものの、思いがけず高い背の上からどうやって降りようと悩んでいると、翔馬がまた膝を折ってくれた。賢い動物だ。役に立たなさそうな羽が気になってしょうがないけど。

ラドクリフさんは近づいてきた使用人らしき人に翔馬の手綱を渡し、何か言伝を頼んでいる。私の乗ってきた翔馬の手綱も恭しく受け取り、使用人らしき人は離れて行った。

「来てくれ」

ラドクリフさんに促され、皇女殿下の宮とらしい場所に入っていく。作りは大体皇子の宮と同じようなものだった。

通された部屋は応接室のような場所で、落ちついた赤の調度品が高級そうで落ち着かない。壁に飾られたタペストリーは、舞踏会をモチーフにしてあるようだ。

「今、殿下が来られる。少し待ってもらいたい。ああ、そこに座ってくれ」

「客分扱いですか？」

「勿論だ。君はオルトレート殿下の直属の部下だろう」

そう聞けば身分は高い気もするが、一般人でどこぞの馬の骨な上、あまり評判のよろしくない魔術師だ。こんな扱いをするのは、ここがハノ様の宮だからだろうか。

「ここで騒ぎが起こったそうですが、被害の方は？」

「なぜ知ってる？」

私は座ったが、まだ仁王立ちのままのラドクリフさんから問い返されて、私は言葉に詰まった。

『すまん、マスター。騎士団を案内したのは私だが、私が君のサーヴァントだということはまだ話していない。それゆえの疑問だろう』

アーチャーの言葉になるほど、と頷いて、私はラドクリフさんを見返した。

「赤い服装の男性がいたでしょう。彼が私のサーヴァントだからです」

「なるほど、彼を寄越してくれたのは君だったか。随分助けられた、人命に被害が出なかったのは彼のおかげだろう。重ねがさね礼を言う」

頭を下げられてしまった。え、ちよつとアーチャー出てきて、私の代わりにこの礼を受け取ってもらえませんか。

『君でいいだろう、我らの代表者のようなものなのだから』

とは言っても。

「被害は、一部建物が損壊した程度だ。怪我人は出ていない」

「ハノ様もご無事ですか？」

「勿論」

「よかった」

本当にほっとした。半ば私の責任のような気もしていたからだ。

「しかし、少々恐ろしいな、魔術師というものは」

ラドクリフさんが呟き、私の視線に顔を挙げて付け加えた。

「いや、気を悪くしないでくれ」

「いえ、仕方ないことかと」

ドレイクの宝具にせよ、彼らはとてつもない力だ。それをよくわかってもない私が振りまわしているのを見るのは、恐怖心と呼び起こす危なっかしさだろう。

ラドクリフさんは頷いた。

「見るにつけ、魔術の発展しないこの国で生まれてよかったこともあるのだと思わせられる」

「……この国は滅多に国外の敵と戦うことがないとか」

「そうだ。この国では、騎士団とは、治安を維持するためのものだと行って過言ではないだろう。人より、魔物と戦うことの方が多い」「字面だけとるとまるで平和な国ですね」

「君はそうは思わないのか？」

うつかりぼろりと本音が零れたものを、ラドクリフさんが素早く拾って返してきた。

「……」

そう思わない、と正直に言うことも出来ず、私は黙る。

「すまん。困らせたな。質問を変えよう」

ラドクリフさんが笑って首を振るが、私にはその笑みがとても人の悪いものに思えた。

「君から見えた正直なところを教えて欲しい。もちろん、聞いた言葉も君の立場とつなげて考えたりはしない。いいか？」

「……随分と、身分の高い女性にお困りのようですね。ハノ様は除外していいと思いますが」

「ははは」

笑われた。なぜだ。

「なるほど、ハノ様が気に入るのもわかる。面白いな、君は」

それは、ラドクリフさんにも気に入られたということだろうか。主従揃って物好きだ。

ノックの音が響き、それに対してラドクリフさんが返答すると、侍女が開けた扉から皇女殿下が入ってきた。

一応立ちあがったが、果たして礼儀作法がそれで合っているのかドキドキする。

「お待たせしたようね、ごめんなさい。今回はありがとう、テイ。あなたのおかげで大事にならなかったわ」

皇女殿下は私に座るよう促すと、自らも優雅な仕草で椅子に腰かけた。ラドクリフさんはさりげなく扉の方へ移動している。そこが彼の立ち位置らしい。

「あなたの方に被害はなかった？ 無理をして助けてくれたのでないといいのだけど」

「お気になさらず、殿下」

「……なんでもないような顔をするのね」

ハノ様は首を傾げて、私を覗き込むように身を乗り出した。そんなつもりはなかった私は少したじろぐ。

「魔術の発展した国なら起こらないようなことなのでしょうね。速やかに片づけたあなたの手腕は、誇るほどのことですからないのかしらっ」

「私には何とも言えませんが」
「……実害はそれほどなかったけれど、それもあなたが止めてくれたからだと思えば、あの時の恐怖を忘れることは出来ないわ。魔術に対する怯えは街の人たちの間にも顕在化してしまっただでしょう。少し、計算が狂ったわね。もう少し穏便な形で知識を広めたかったのだけど」

私は彼女の言うところを理解して、頷いた。暴れたのも魔力を吸いこんだ魔物なら、それを退治したのもまた激しい攻撃力を持つ魔術だ。何を目的に振るわれた力であっても、それそのものを怖いと思うのは自然なことだろう。

「今回のことに対する報酬は用意するわ。希望があれば出来る限り沿うようにするけれど？」

「いえ、あなたが相応だと思う程度でお願いします」
「それってちよっと難しいわ」

ハノ様は、少しきつめの顔立ちを緩めて笑い、侍女に目配せをした。

された方の侍女は私の方へ歩み寄ると、何やら筒状にされた羊皮紙らしきものを両手で差し出した。

「……これは？」

「約束していた新聞よ。明日にはあなたのことも載るでしょうね」

え、ヤダ……。

「気をつけて。あなたに注目する人間が、これまで以上に増えるわよ。味方ばかりとは限らないわ。敵ばかりとも思っただくしくはないけれど」

私は新聞をありがたく受け取りつつ、皇女殿下の言葉にまんじりともせず頷いた。

第十八話 閑話休題（後書き）

またしても間が空いてしまいました（汗）
ドレイクのターンのはずだったのに、あまり目立っていない罫……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9618p/>

英霊とにわか守護者と異世界旅行

2011年6月21日14時56分発行